
植物だいすき

ガケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

植物だいすき

【Nコード】

N2770W

【作者名】

ガケン

【あらすじ】

幽遊白書のKC19巻の「のるか そるか」で幽助でなく蔵馬が異次元砲の自爆ボタンを押してハンターXハンターの世界に飛ばされたら？という内容で書いていくつもりです、でわ・・

第一話 プロローグ（前書き）

皆様の面白い作品を読ませていただいて、自分も書きたいなと思
執筆いたします、誤字・脱字・改行・語句の使い間違い等は、温か
い目でみてください。

第一話 プロローグ

「審判の門が占拠された！？100人近い人質の中にコエンマや、ぼたんもいるって！？」

突然、幽助の部屋に現れた霊界特別防衛隊によって知らされた、詳しい話をきいた幽助は、魔界に居る煙鬼に電話をした。

「久々にパーティー組んでやりたいんだが、一人たりねーんだ、大統領権限で、そいつムリヤリこっちに送ってくれねーか？」

そうして、幽助・蔵馬・桑原・飛影の4人が揃い、霊界に飛び立った。

霊界に降り立ち、飛影が邪眼で内部を索敵し、蔵馬が作戦を考え、桑原を煽って次元刀で進入をし、4・5秒でコントロール室に入りモニターの画像を録画にきりかえた。

「よし！！手分けして残りの見張りをやっちまおう」

・
・
・

「これで見張りは全部片付けた」

「桑原博士、異次元砲の作動を止められねーか」

「これ見るよ、解体不可能自爆しますの注意書き、なめてんのか？メインボタンが3つもあるぜ、2つはダミー間違っって押せば多分ドカンだ」

「・・・直接奴らのボスに聞か、残は人質のいる会議室、敵は13人、1人ノルマ3人弱、銃つき人質アリか・・・スキさえあればな」

「ドアは正面の1つだけ、人質の安全を考えたら奇襲ですね、密かに部屋に隠れて、機をうかがいましょう」

「隠れるって、一体どこに？どうやってだよ？」

「木を隠すなら森ですよ」

！つんつん、突然人質になってるぼたんの背中がつつかれた、そこには下の階の天井をくり貫き顔をだしている幽助たちがいた。

「ん？」監視モニターを見ていた大竹（元霊界特別防衛隊隊長）が気づいた

「異常発生！！見張りが急に！！」「何！！」「今だ！！」「ボカ！スカ！バキ！ポーン！飛び出した幽助たちによってテロリストたちは殴り飛ばされた。

「おい！！メインボタンの何色が本物だ！！赤か！？青か！？黄か！？答える！！」

「・・・フンツ、我々の・・・究極の教えに第三者の三択というものがある、最後の運命は、教徒ではなく、第三者に選択させるという教えだ、神の意思には絶対・・・例え誰が自分の意思で決めた様に見えても・・・それは全て神の意思・・・単純な三択だ」

「？皿屋敷市に向けて異次元砲発射」

「？審判の門もろとも自爆」

「？何事も起こらない」

「おっと、例外？時間が来れば自動的に発射、お前らが選べ・・・しかし、それは神の意思・・・必ず・・・グッ」

「毒か・・・魂の死さえ恐れていない」

「・・・ケツ、マジでターゲットは皿屋敷市か、ウソからでたマコトってか」

「おいオメーら、すぐ、こっから出るできるだけ遠くにな、蔵馬・桑原・飛影、大急ぎで人間界へ戻って知り合いだけでも、非難させろ」

「な！ふざけんな！オメー一人だけ残せるか！オレもここに！！」

「いーから行け」

「オレ達だけ安全な場所に逃げろってのか！？他のヤツらどーすんだもし・・・」

「うるせーな！グダグダ言ってるヒマねーぞ！！もしドジッたら霊界でオレが・・・」

「おい！！幽助どうした！？急に倒れて！！」

「桑原君、すまない幽助を連れて行ってくれ、皿屋敷市は雪村さんもいる、俺の両親は今、海外にいつている、幽助には魔界の曼陀羅華を吸って寝てもらった・・・俺が残る」

「蔵馬・・・オメー・・・」

「フンッ蔵馬がこんな所でくたばるか、桑原、幽助を担いでさっさと行くぞ」

チツチツチ・・・

「ふー盗賊時代を思い出すな・・・母さん、父さん、幽助、みんな・・・時間だ、よし・・・やりますか」

「んっ・・・んー・・・はっ！オイ！桑原！どうなってるんだ！？突然急に目の前が暗くなつて・・・異次元砲は！？」

「ちよつと！幽助落ち着いてよ！」

「幽助・・・落ち着け！異次元砲は蔵馬が、何とかしてくれる！飛影だって信じてまってるんだぜ」

「蔵馬――！！！！！！！！」

第二話 くじら島1

ーくじら島ー

少年は、釣りをしていた、息を潜めひたすら沼の又シをつりあげるために・・・

「きた！きたきた！きたあー！ー！ー！っ！ー！ー！えっ！？女の人！
」

大丈夫？返事がない、ゆさゆさ、女の人（？）の肩をゆするが返事は無く、手を口に近づけて呼吸を確認すると、息はしているようだった。とりあえず少年は家に連れて帰る事にした。

ドドドドっ！！女の人（？）を背負い少年は家まで走っていた

「ミトさーん！！大変だよ！又シを釣りにいったら女の人釣れて！息してるけど、起きないんだ！！」

「ちょっと！ゴン落ち着きなさい！タオルを持ってきて、それから、お湯を沸かして！私はベットにつれていくから！！」

「うん！わかった！」

「それにしても、キレイな娘ね、くじら島では見かけない娘だけど・・・」

みとさんはタオルで、女の子（？）をゴンがもってきたタオルで

拭きながら一人つぶやいていた

「ミトさん！お湯もって来たよ！」

ゴンはタライにお湯を入れて、寝室までやってきた。

「ありがとうゴン、私が服を脱がせて体をふくから、外でまっ
いてね」

ミトさんは、そう言つと女の子（？）の服を脱がせ始めた・・・

「あら？この子、胸がないはね？っ！えっ！この子・・・男の子
？まあいいわ、はやく拭いて寝かせてあげないと」

「ミトさん女の子（？）どうだった？大丈夫？」

ゴンは心配そうに、ミトさんに女の子（？）の様子を聞いてみた

「うん、ゴン今は落ち着いて寝ているみたい、それに、あの人は
女の子じゃなくて男の子だったのよ」

「えっ！あんなにキレイだったのに男の人だったんだ」

「ええ、そうよ、私もおどろいたは、今はちゃんと休ませてあげ
ましょうね」

「それじゃ、今日は夕飯は作つてあるから食べちゃってね、私は
彼を見てるから、あなたはゴハンを食べ終わったら、早くにねなさ
いよね」

「わかったよ、ミナさん」

「うう、くじら島の一日は終わった」

第二話 くじら島1（後書き）

うーん、俺には文才が無いですな：

第三話 くじら島2

ちゅんちゅん、朝日を浴びて小鳥たちがさええずる、朝日をあび青年は目をさます、ここは？どこだ？眩しい朝日を手でさえぎりながら、辺りを見る、ベット？俺は・・・そうだ俺は異次元砲の解除スイッチを押して・・・体には異常はなさそうだ、解除に成功して幽助たちに寝かされたのか？彼は考えていた。その時ドアがノックされた

「あら、起きたみたいね」

若い女性が、ドアから現れ、彼は聞いてみた

「おはようございます、ここはどこなのでしょう？幽助たちはいるのでしょうか？」

「ここは、くじら島の私の家よ、幽助？お友達かしら？昨日ゴンが貴方を、沼から担いで家に運んできたのよ？チョットきいてみるわね」

沼？霊界のあの辺りには川も沼も海もなかったはずだ・・・彼は、審判の門周辺を思い出していた

「ミトさーん！あの人は起きた？」

「あつ、ちょうど今あなたを呼ぶところだったの、昨日、この人以外にも人はいたの？」

「いなかったよ、ヌシが居る辺りには、島の人はいないし、人の

気配もしなかったし・・・」

だとすると、ここは・・・彼は考えをめぐらせる・・・

「そうだ、あなた名前は？私はミト、こっちの子はゴン」

「ああ失礼、自己紹介がまだでしたね、私は蔵馬、ゴン君、ミトさん、助けていただいて感謝します」

自己紹介をしながら彼らを、蔵馬は観察した、妖怪ではないし、霊界の者でも無さそうだな・・・人間だとすると、言語は、日本語だからここは、日本か？

「質問してもよろしいですか？ココは、日本ですか？」

「日本？ミトさん日本って知ってる？」

「んー聞いたこと無いわね？んージャポンじゃないかしら？何となく似てるし？」

っ！日本を知らない？日本語をはなしているのか？ジャポン・・・たしかに外国の方だったら呼ばれる事もあるかもしれないが・・・

「どうしたの？急にだまっちゃって？」

どうやら、心配させたみたいだ、整理しなくては、ここは、たしか、くじら島と言っていた、日本にそんな島は、なかったはずだ、だとするとココは・・・

「すみません、ちょっと考え事をしてしまいました、いまから言

う単語で知っているものはありませんか？アメリカ・ヨーロッパ・アジア・キリスト教・仏教・イスラム教なにかわかりますか？」

「んー聞いたことないわね？」

「っ！まさか！コレらを知らない訳は、ないはず、この人たちはウソは言っていないみたいだし、どうなってるんだ？」

「ねっ、本当に大丈夫？顔色が良くないわ、食べるものを持ってきてあげるから、食べたら、しっかり休んでね、ゴン台所行ってスープとパンをもってきてね」

そういうと、ゴンは走って台所のほうに向かっていった

「あーゴン！家の中ははしらないでよねー、まったく・・・あの人みたいなんだから」

そう言うミトの顔は、少し寂しそうだった

「ごめんなさい、ミトさん、こんどから気をつけるよ。これ、パンとスープね、じゃ俺、お兄さんも休むみたいだし、夕飯のオカズを釣ってくるね」

「気を付けるのよ、お昼はどうするの？」

「釣った魚を焼いて食べるから要らないや、いってきまーす！」

「ごめんなさいね、騒がしくて、これ食べて、ゆっくり休んでね、なにかあったら呼んでね、私は外で洗濯してるから、声をかけてくれればわかるから」

「すみません、たすかります」

蔵馬は、そう言々とスープを飲みだした・・・うまいな、母さんの料理と同じ温かい味がする、スープを飲み終えた蔵馬は、考えをまとめていくのであった。

第四話 くじら島3

蔵馬は、考えていた、現在わかっているのは、ここは魔界でも霊界でもないこと、日本のことや宗教について知らない事、そして日本語を彼らが話していたこと、服装を見る限り文化的であること・まさか・異次元砲によってどこかに飛ばされたのか!? 異世界・まさかな・

「ただいまー!!!ミトさん大量だよ!!」

ゴンが大きな声で、帰ってきた

「お帰り、ゴン本当に大量ね、あら?その紙はなにかしら?」

「うん!これ漁師のオツチャンに地図もらったんだ!蔵馬さんに見せてあげようと思ったんだ!」

「そうだったの、私は料理をするから、蔵馬さん部屋に居るみたいだから行ってあげなさい、喜ぶとおもうわよ」

「うん!いつてくるね」

うふふ、あの子も成長したわね、男の子の成長は、早いのかしらねハンターにだなんて、なりたい何て言わなければいいのに・・・

「蔵馬さん起きてる?地図もってきたんだ!」

「ああ、起きているよゴン君、ありがとう、さっそく見せてもらえるかな?」

そういうと、ゴンは地図を広げだした

っ！これは、蔵馬は地図を見て愕然とした、自分のしっている地図と違う、そして国名を表すだろう文字が、まったく違うことに

（これは、地図の精巧さからして、この地図は本物だろう、だとすると、本当に異世界か・・・帰れるのだろうか・・・皆の居るところへ・・・）

「蔵馬さん？どうしたの？知っている所あった？」

心配そうにゴンが、見つめてきた

「ああ、大丈夫だよ、なんというか俺は、ここの世界の住人じゃないのかもしれない」

「えっ！この世界？どういう事？」

ゴンは興味津々だ！

「紙とペンはあるかな？俺の知る地図を描いてみよう」

そう言うとゴンは部屋の引き出しから、紙とペンを差し出してきた、それに蔵馬は、大まかではあるが地図を描いていった

「俺の世界の地図は、大体こんな感じだったよ」

「うん！大分違うね、それにこれは文字？読めないけど・・・すごいや！世界って一つじゃないんだね！ハンターになれば、他の世

界も見て回れるかな！」

「ハンター？それは獵師とかの事かな？」

「ハンターは、色んな所にいたりするんだ！俺のオヤジもハンターで世界中を飛び回ってるみたいなんだ、世界中をまわれば、他の世界に行くことができるかもしれないし」

「みたい？父親はハンターなんだろう？聞いたことはないのかい？」

「うんジンはって、オヤジの名前んだけど、俺が生まれてすぐ家を出たみたいで、あったことはないんだ」

「っ！それは、すまないことを聞いたね」

「うん、いいよ、俺もハンターになってジンを探しにいくから」

そう言うゴンの笑顔は、自分の仲間の幽助に似ていた

ハンターか・・・帰る手段を見つけるにはいいかもしれないな・・・
・蔵馬は、ふと思いついた

「ゴン君、ハンターには誰でもなれるものなのかい？」

「試験に合格すれば、だれでもなれるみたいだよ！蔵馬さんもやりたいの！」

「ああ、帰る方法を探すのには色々、世界を見て回る方がいいとおもってね、この世界は不慣れでまだ良くわからないしね」

「ちょっと、まっててね、ハンター試験応募カードを持ってくるよ」

そういつて、ゴンは部屋まで戻り、一枚の紙を持ってきた

「これに、名前と、未成年の場合保護者のサインを書いて送ればいいんだよ」

なるほど、名前を書く欄しかないという事は、身分証もない俺もなれるということか・・・

「このカードは、どこで貰えるんだい？」

「このカードは、港にある店に置いてあるんだ、後でもらってき上げるね」

「ああ、ありがとう、ちなみに試験はいつあるのかな？」

「うんと、2週間後に港からハンター試験会場に行く便が出るんだよ」

「だけど、ミトさんがサインしてくれないから、まだ俺は応募できないんだ、蔵馬さんを釣った沼のヌシを釣れば、ミトさんがサインしてくれるんだ！だから俺は絶対にヌシを釣り上げるんだ！！」

「！そうか、俺は君の釣りの邪魔をしてしまったんだね、すまない」

「いいよ、気にしないで、まだ時間はあるし、明日にでも沼に行

って釣り上げるんだ」

「ゴンー！蔵馬さんー！ゴハンできたわよー台所にいらっしやい
ー！ー！」

「はいーじゃ蔵馬さんゴハン食べにいこう」

「うん、そうだね、たべに行こうか」

ー翌日ー

「おはよーミトさん、俺は鞍馬さんと釣りに行くから！」

「気を付けてね、お昼ごはん作ってあるから、このバスケットも
って行きなさい」

「ありがとうございます」「うん、ミトさんありがとう」

2人は、森の中に釣りにいくのであった。

「すごいな、この森は生き生きしている」

「うん、このあたりは、キツネグマの縄張りだから人は、あんまり
入ってこないから、くじら島の中で一番キレイなんだよ、あつこ

こが又シの居る沼だよ」

「ここに、俺がいたのか・・・しばらく俺はこの周りを見させてもらうね」

「うん、でもあんまり遠くに行かないでね、オスのコンは友達だけど、奥さんは人間になれていないから」

「わかったよ、この近くだけ見させてもらうよ」

・

・

・

「きた！きたきた！きたあーーーー！！！！！！」

大きな水しぶきを上げながら、又シはゴンによって釣り上げられた

「おめでとう！ゴン君、じゃあ急いで戻ろうか」

「うん！ありがとう、そうだね早くミトさんに見てもらいたいし」

ざわざわざわ、町につくと、ゴンの釣った主を見て人だかりができた

「おやまあ」「大の大人が5人がかりでも上げられなかった沼の又シが・・・」「この島じゃ10年は釣り上げられる者など現れんとおもっていたが・・・」「たいした子供じゃ」

「さあ約束通り又シを釣り上げたよ！！今度はミトさんが約束を守る番だ！！」

「許してやんなよ試験受けるぐらいさあ」「そうそうゴンなら立派なハンターになれるって」

キツ！「無責任なこと言わないで！！」

「そうだよ言葉に責任持たなきゃね、約束を守れない人間にはなるなって、教えてくれたのはミトさんだよ！！」

「・・・」

「ね！！」

「好きにしなさい」

「うん、ありがとう」

そう言ってゴンは鞍馬と共に、ハンター試験に応募をした

・その夜・

「いつ出発するの？」

「来週の頭にでも」

「そう、しってたのね・・・ジンの仕事を、あいつ、まだ赤ん坊だったあんたを捨ててったのよ、それでも・・・」

「子供を捨ててまで、したいと思う仕事なんだね、ハンターってそれだけすごい仕事なんだね」

「ゴン・・・あんた、やっぱりあいつの息子だわ!!」

ミトさん、ごめんなさい、ミトさんの言つと通り俺は、オヤジの息子だから、オヤジに会いに行くよ!!

――翌週――

「ミトさんいままでありがとう」

「ゴン、ごめんなさい・・・私、ゴンにウソついちゃった、ジンが・・・ゴンを捨てたんじゃないの、私が、裁判でジンから、親権を奪い取ったの・・・」

「うん、ウソだって気づいてた、ミトさん俺にウソつく時、絶対に俺の顔見ないもんね」

「それじゃ、いつてくるねミトさん鞍馬さんも居るし心配しないでね」

「いままで、お世話になりました、試験が終わったら、またゴン君と来てもいいですか?」

「はい、ゴンをゴンをよろしく願います」

「元気でねー！！絶対立派なハンターになって帰ってくるからー！！！！」

「くくく、立派なハンターかなめられたもんだ、この船だけで十数人のハンター志願者が居る、毎年全国から、その数十万倍の腕利きが試験に挑んで、選ばれるのは、ほんの一握り、狙う獲物によつては、仲間同士の殺し合いも珍しくねー職業だ滅多なことを言うんじゃないねーぜ、ボウズ」

こうして、ゴンと蔵馬の旅は始まった、「荒れるな・・・」船長の独り言が2人の耳にいつまでも残った・・・

第四話 くじら島3（後書き）

すみません、主人公は蔵馬なはずなのに・・・影うすい；；徐々にも、主人公になれるようにがんばりますので、暖かく見守ってください。

第五話 ハンター試験へ（前書き）

このペースだと・・・終わらない気がするのでペースを上げて、はしよりながら進めていきます。

第五話 ハンター試験へ

―船内―

「ゴン君、俺は少し眠らせてもらうよ、会場まで時間は掛かるだろうし、何かあったら起こしてください、お手伝いしますので」

「うん、蔵馬さんおやすみ」

ざわざわ、ケツ！あの美人のネーチャン子連れかよ、ハンター試験は何時からこんなに温くなったのかねー、周りの柄の悪い男たちは話していた。

「おきて、おきて蔵馬さん！」

「んっ？どうしたんだいゴン？」

「嵐がきて、みんなダウンしちゃってるんだ、介抱してあげてるんだけど手が足りなくて困ってたんだ」

「ああ、わかったよ、森の中で薬草を取ってきてあるから、俺はコレを飲ませて回るね、ゴン君は水を持ってきてもらえるかな？」

「うん、ありがとうね」

うーん、死ぬー・・・ゲロゲロ・・・うーうー・・・うえうぶう・・・

ドタドタ、バタバタ、これを飲むといい、うーすみません

「ふーこれで粗方おわったようだね、ごくろつさまゴン君」

「ううん、こっちこそ手伝ってくれてありがとう、蔵馬さんの薬草すごいね！！みんな直ぐに落ち着いたよ！！」

「薬草とかの知識は、あるからね、こんどゴン君にもおしえてあげるね」

「わっ！本当！！ありがと！！」

ふふん、今年はちったー骨のあるやつがいるようだ、船室を覗きにきた船長はそうつぶやいた。

「これから、さっきの倍近い嵐の中を航行する、命の惜しいヤツは救命ボートで引き返すこったあー」

スピーカーからアナウンスが入ると、我先にと皆ボートに向かって走り出していった・・・

「結局のこったのは、この4人か名前を聞こう」

船長が、鞍馬・ゴン・サングラスの男・金髪の男に話しかけた

「俺はレオリオというもんだ」「私の名はクラピカ」「おれはゴン！」「俺は蔵馬」

「お前ら、何故ハンターになりたいんだ？」

「えらそうに、面接官でもねーのに聞くもんじゃねーよ」

レオリオという男は、柄の悪いチンピラのようにだ

「俺は、親父の魅去られた仕事が、どんなものかやってみたくな
ったんだ」

「おい！勝手にこたえるんじゃないよ、協調性の無いやつだな、
俺はイヤな事は決闘してでもやらねーぜ」

「私もレオリオに同感だな」

「おいっ！おまえ年いくつだ人を呼び捨てにするんじゃないよ！
おい！コラ！レオリオさんと訂正しろ！」

「ほーそうかい、お前らもこの船から、今すぐ降りな、すでにハ
ンター試験は始まつてるんだよ」

「俺は、俺の元いた場所に帰るために、世界中を回ってみようと
思っています、そのためにハンターになります」

「ほーネーチャンの、地元ってのはそんなに大変な所にあるのか
？」

「そうですね、レオリオさん、本当に本当に遠くになんですよ・
・あと俺は男です！」

「マジか！」（っ！私より女ぽいとは・・苦勞してそうだな）
（俺も最初は女の人だと思ってたもんなー）

「んじゃー次、クラピカ」

「私はクルタ族の生き残りだ・・・4年前、私の同胞を皆殺しにした幻影旅団を捕まえる為ハンターを目指している」

「要は、あだ討ちか、ハンターにならなくても出来るじゃねーか」

「この世で、もっとも愚かな質問の一つだなレオリオ、ハンターでなければ入れない場所、情報、行動とうものが君の頭にはいりきらないよなほどあるのだよ」

「おい！おまえはレオリオ」

「オレか？金さ！！金さえ入れればなんでもできるからな！！でかい家！！いい車！！うまい酒！！」

「品性は、金では買えないよレオリオ」

「3度目だぜ、表に出なクラピカ、うすぎたねえクルタ族の血つてやつを絶やしてやるぜ」

「とりけせレオリオ」

「レオリオさんだ」

「おい！こら、まだ俺の話は終わってねーぞ、俺の試験を受けねーきかコラ！」

「放っておこうよ、俺には2人が怒ってる理由は大切なことだと思えるんだ、とめない方がいいよ」

「大丈夫ですよ、いざとなったら俺が二人とも、取り押さえますから」

「ふ．．．む」

「いくぞ!!」「きやがれ!!」

その時、嵐によってマストの1本が折れ船員にブチあたった

「カツツオ!!!!!!!!!!」

「!!」「チツ!!」(まに会つか!?)

ゴンが船から投げ出される船員の足を掴んだ、しかしゴンの体も船から離れていてしまっている、そこに蔵馬も飛び出し、レオリオとクラピカが蔵馬の片足を何とか掴み、ひっぱり上げた。

「なんとという無謀な!!下は人魚ですら溺れるという危険海流なのに!!」

「俺たちが足を掴まなきゃオメエらも海のモクズだぞボケ!!」

「でも、つかんでくれたじゃん」

「そうですよ、ありがとうございましたレオリオさんクラピカさん」(ローズウィップを使えば最悪海には落ちなかっただろうし、命の恩人のゴンを見捨てるわけには行かないしな)

「あ．．ああ．．」「ねっ!」「うーむ」

「非礼を詫びよう、すまなかったレオリオさん」

「なんだよ、水くせえなレオリオでいいよクラピカ、俺の方もさっきの言葉は、全面撤回する、ゴンも鞍馬もレオリオでいいぜ」

「わかったよ、レオリオ」

「俺は、さん付けになれているので、すまないがレオリオさんと呼んではもらっても良いかな？」

「くはははは！気に入ったぜオメーラ！俺の気分はすこぶるいい！！俺が審査会場最寄港まで責任もって送っていつてやらあー！」

「ドーレ港」

「あの山の一本杉を目指しな！それが会場に着く近道だぜ！」

「わかった！ありがとー」「ありがとうございます」

こうして蔵馬たちは、一本杉をめざして歩いていった、途中ドキドキ二択クイズがあつたが、蔵馬とクラピカが気づき、多少レオリオがキレたが問題なくクリアをした。途中クイズの二択を先に行つた彼の悲鳴が聞こえたが・・・気にしないで置こう。クイズ婆に――軒屋にいる夫婦が道案内をしてくれるとの情報を聞き一行は、小屋の前まできた。

コンコン、レオリオがドアをのつくしたが反応がない

「はいるぜ」

「!?!」

「きるきるきるきーる」

「魔獣!!」

ガシャン！魔獣が部屋のガラスを割り、右手に人質を抱えながら外に飛び出した！

「はい、おつかれさまでした」

窓の外には、笑顔の蔵馬がおり魔獣の頭を押さえていた。

「なぜ！外に居る！なぜ俺が外に跳ぶ出してくるのがわかった！
！」

「そうだぜ、蔵馬なんでわかったんだ？」「うん、俺の鼻でも中に魔獣がいるのが分からなかったのに」

「簡単ですよ、建物の中から妖気が3つ、建物の外にも1つ、貴方たちが案内人でしょう？コレはしけんですね？」

「妖気だあゝ？そんなの分かるのか蔵馬！」（妖気！？なんだそれは?!）「すごいや蔵馬!!」

「くくく、あははは、おいカーチャンすぐきな!!面白いもんが見れるよ!!」

「ふーむ妖気ね」「そんなで見破られたのは初めてだね」

「さて、もうお分かりのとうり我々夫婦がナビゲーターさ」「娘です」「息子です」

「本当なら、色々なヒントを見つけて答えにたどり着くはずなのにねえ、こんなに早くたどり着いたのはアンタ等がはじめてさーね」

「合格だ！あんたら四人会場まで案内しよう」

つかの間の空中遊泳を楽しむ一行、だが彼等はスタートラインにすら着いていないのだ。

第五話 ハンター試験へ（後書き）

やっと、会場にたどり着ける・・・眠るまでに何処まで書けるかな
？

第六話 一次試験

ーザバン市ー

「おーつとこー、ここだ、この建物がハンター試験の会場さ」

「どうみても、ただの定食屋だな？冗談きついで！案内者さんよ、まさか、こんなかに、全国からのハンター志望者があつまってるなんて言っくんじゃねーだろう」

「そのまさかさ、ここならハンター試験の会場だと思わないだろう？」

「いらしえーい！！ご注文は？」

「ステーキ定食」

「焼き方は？」

「弱火でじっくり」

「あいよー」

「お客さん奥の部屋にどうぞ！」

「一万人に一人・・・ここにたどり着くまでの倍率さ、お前たち新人にしちゃ出来だ、それじゃ頑張れよルーキーさん達、お前らなら来年も案内してやるぜ」

「失礼なヤツだぜ、まるで俺たちが今年受からないみてーじゃねーか」

「三年に一人、ルーキーが合格する倍率だそうだ」

「それは、大変な倍率ですね、でもルーキーで合格する試験なら合格できないことは無いでしょう皆さん、なりたい理由があるのだから」

「「「おお、そうだと合格しような」「」」

チン！地下100階まで降り、ようやく会場にたどり着いたようだ、会場には既に沢山の者たちが集まっていた、それら全てが、会場に着くまでに会った者たちとは、雰囲気がちがっていた、皆それぞれが何かの達人のようだった。

（これがハンター試験の参加者達ですか、靈力もさほど高い者も余りいないようですね、B級並なのが3人・・・C級なのが、ぼちぼちってところですか・・・）

蔵馬は、周りの様子を伺っていたが、そこに、小柄なオッサンが話しかけてきた

「それにしても薄暗いところだな」

「地下道みたいだね」

「何人ぐらい居るのかな？」

「君たちで406番人目だよ」

「よっ！おれはトンパよろしく」

「君達、新人だね？」

「分かるの？」

「まーね、なにしろ俺は、35回も受けているから、まー試験ベテランだよ、なにか分からないことがあったら何でも教えてあげるよ」

「俺は、蔵馬といいます、教えてもらい人たちが居るのですが？よろしいですか？」

「おお！いいぜ！番号を言ってもらえれば、教えるぜ！」

「ありがとうございます。では44番と301番彼らについて教えてほしい」

「2人だけでいいのかい？それにしてもヤバイやつらに目をつけたな、301番は、今年からのルーキーで分らないが、見た目だけでもヤバすぎるだろ？44番こいつはルーキーじゃないから、情報はある、去年合格確実といわれながら気に入らない試験官を半殺しにして失格になったやつだ、去年は試験官の他に20人の参加者を再起不能にしている、極力近よらないほうがいいぜ」

「ありがとうございます、参考になりました」

「おっと、そうだお近づきの印だ飲なよ、お互いの健闘をいのつてカンパイだ！」

「ありがとうー！！」

「ダーペっぺ」

「トンパさんこのジュース、味が変！古くなってるよ！」

「えっ！あれ〜おかしいな？」

（この臭いからして、下剤の類か・・・トンパという男、話に聞く新人潰しか？）

「いやー本当に申し訳なかった」（まったく今年の新人たちは、どうなってるんだ？ベテラン並にくせの強いやつが揃っている・・・だが、それだけ潰しがいがあるってもんだー！）

じりりりりりりりりりりい！

「ただ今をもって、受付を終了いたします、これよりハンター試験を開始します、こちらへどうぞ、私一次試験担当のサトツと申します、これより皆様を二次試験会場までお連れします」

髭の紳士が、試験開始を伝えたようだ、そして皆が前に進みだす、そのペースは次第に上がっている様だ

「？」「？」「？」（あの髭・・・メソ！？）

「二次・・・？って事は、一次は？」

「もう初まっているのでございます、二次試験会場までついてくる、これが一次試験でございます、ただ私について来ていただきまず、到着時刻や場所はお伝えできません」

「ゴン君ちよつと私は、前の方に行かせてもらうよ、何人か今のうちに、気になる人物を見ておきたいんだ、すまないが、またあと

で」

「気になる？さっきトンパさんに聞いた人？」

「うん、それと後数人かな？この先の試験が、どんなものかは分からないが、情報収集は、早めにしておくに限るからね、この一次試験は危険は少なそうだから、また後で合流したときにでも話すよ」

「うん、わかった気をつけてね」

「おーそうだぜ蔵馬！気を付けろよ」

「わかった、また後で合流しよう蔵馬」

そう言つと、おんどん蔵馬は、前の方に走っていった

「すげーな、蔵馬のやつ、もう見えなくなっちまったぜ」

「だね、蔵馬すごいや！」

（蔵馬たしかに、すごい魔獣の時といい何者だろう？）

こうして蔵馬は、前の方にいる気になる人物たちに話しかけていった。

（やはり、危険なのは44番か、301番は、話は出来なかったが少なくとも手を出さなければ問題ないだろう、あとは、16番トンパやはりヤツは新人潰しだったようだ・・・）

「あつ！おーい蔵馬！追いついちゃったね」

「ああ、そのようだねゴン君、俺の方も、だいたい話をしてみたよ、ところで彼は誰かな？」

「あー俺？俺はキルア、オネーサンもゴンの友達？」

ピシッ！（なぜこの世界は俺を女と間違えるんだ？元の世界でも間違えられたが、これほどヒドクはなかったのに）

「そうだよ、蔵馬といいます、くじら島からゴン君と試験を一緒にきました、それと、俺は男です」

「！っマジで、お兄さん、全然わからなかったよ！」

（っ！本当ですか？キレイな子が後ろを走っていてドキドキしていたのに・・・）

サトツはココロに100のダメージを受けたw

「キルア君、俺の事は蔵馬でいいですよ、これからよろしく」

「おう、わかった蔵馬よろしくな」

（それにしても、今年のルーキーは、豊作のようですね）

「皆さん、その出口から外に出ますよ、暫くは出たところで、待っていてください、暫く後ろを待ってから、再出発いたしますので」

「ふう、ようやく、うすぐらい暗い地下からおさらばだ」

「な・・・なんだ・・・ここは？」

「ヌメーレ湿原、通称詐欺師の埒・・・十分注意して着いてきてください、だまされると死にますよ」

「おかしいこと言うぜ、だまされるのが分かっている、だまされるわけがねーだろ」

レオリオが、息切れをしながら答えた

「ウソだ！そいつはウソをついている！そいつはニセ者だ試験官じゃない！俺が本当の試験官だ！」

「ニセ者！？どういうことだ！？」

「じゃあ、こいつはいったい？」

「コレを見る！こいつはヌメーレ湿原に住む人面猿だ！そいつは、ハンター受験生を一網打尽にする気だ！」

ヒュっ！！サク！サクサク！パシ！パシパシ！

「ガッ・・・」

「くっく なるほどなるほど」

・・・チラッ（こんなはずじゃなかったツキ、一気に逃げ出すツキ！）

死んだ試験官が運んできた人面猿の死体が起き上がり、一気に駆け出した！

ヒュッ！サク！サクサク！！

「・・・！！あの猿死んだフリを・・・！？」

「これで決定 そっちが本物だね？試験官と言う者は、審査委員会依頼されたハンターあの程度防げない訳ないからね」

「ほめ言葉と受け取っておきましょう、しかし、次から試験官に対しての攻撃は即失格とします、よろしいですね」

「はいはい」

「では、まいりましょう」

受験者達は足場の悪い湿原を走っていった、湿原にすむどんな生き物より恐ろしい者と一緒に・・・

「ゴンもつと前に行こう」

「うん！試験官を見失うと困るもんね」

「キルア君の言う通りに前に行った方がいい、44番のヒソカ、ヤツの殺気が膨れ上がって来ている、さきほどの血で、押さえが効かなくなっているみたいだ、霧に乗じて、かなりの数を殺すだろう」

（へーやっぱり、コイツ俺と同じ住人か？ヒソカの殺気に気づくし、なにより隙が無い）

「レオリオー！クラピカー！キルアと蔵馬が前に来た方が良
いってさー！ー！」

「ドアホー！いけるならとっくに行ってるわい！」

「緊張感ないやつらだなも」

霧が濃くなりだし、後ろの方から悲鳴が聞こえだした

「ごめん、キルア、蔵馬！俺！レオリオとクラピカのところに
ってくるー！」

そう言つと、ゴンは悲鳴のする方に走っていった

「あれ？鞍馬は行かないの？ゴンのヤツは行っちゃったけど？」

「ああ、ゴンは問題ない、地下道のなかでヒソカと話したが、有
望なら食べないって言ってたから、一応、手を出さないように、お
願いしてあるしね」

「げっ！マジであのヒソカに話かけたのかよ、アイツが約束なん
て守ると思う？」

「守るさ、ヤツは強者と戦うのが好きなのさ、だから、俺との約
束は、守るさ」

「ふーん、でどんな約束なの？」

「試験が終わったあと、俺と戦う事、ゴン君、レオリオさん、ク

ラピカさんを殺さない事これだけだよ」

「げー、蔵馬ってバカ？アイツと自分から戦おうなんてさ」

「負けない位には手札があるしね」

（すげー自信じゃん、でもコイツ、底がみえねー本当にヒソカとヤレるのか？まあ俺には関係ないけど）

「おっ！蔵馬！先の方に建物が見えるぜ！これで一次試験おわりかな？結構ハンター試験も楽勝かもな、つまんねーの」

そうして、二次試験会場に着いた蔵馬とキルアは、ゴン達が来るのを試験会場であっていた

第六話 一次試験（後書き）

今回の投稿は、これでおしまいです、おやすみなさい。

第七話 二次試験

―二次試験会場―

ガオオオオオ　グオオオオオ　ギョルギョルグウー

「ゴン達着てないみたいだぜ蔵馬！さっきヒソカのヤツみかけたけどな、約束は守られなかったみたいだな」

獣のうめき声が鳴り響くかのような、二次試験会場の一角で、キルアは蔵馬に話しかけた。

「いや、そうでもないですよ」

蔵馬がヒソカの方を向くと、ヒソカが近づいてきた

「やあ　フフフフ？彼なら入り口の方に置いてきたよ、後の二人は自力で追いついて来るってさ？ああ君との約束も美味しそうだけど、彼らも美味しそうだ？フフフ楽しみにしているよ？じゃーまたね」

（ゲツ、あの新人ヒソカと知り合いだよ、美人だと思ってたのに）
（フー本当に今年のルーキーは潰しがいいがそうだが、トンパ様の腕の見せ所だな・・・）（なるべくアイツ等にも近づかないで置こう）

「本当に、ヒソカ約束守ったんだ」（あーでもなんか、ヒソカに俺も目を付けられてるような・・・殺気とも違う、兄貴とも違う、なんか、お尻に危険があるような・・・）

「ね、大丈夫だったでしょ、ゴン君達を迎えに入り口の方で待つてましよう」

二人は、会場から少し歩き、ヒソカがレオリオを置いてきたという入り口に向かっていった

「蔵馬ー！キルアー！ここだよー！」

「おーどうやって追いついたんだ？もう絶対追いつけないと思っただけ、どんなマジック使ったんだ？」

「香水の臭いを辿って来たんだ、レオリオの香水特徴あるから数キロだったら嗅ぎ分けられるよね」

「はあー？おまえやっぱ、相当かわってるぜ」

「ゴン君、クラピカさん、レオリオさん、お疲れ、この薬草を飲むと良いよ、疲労回復に効くからね、あと、レオリオさんは、この薬草を殴られた顔に塗るといい、腫れが収まるから」

「おーありがとう蔵馬、こいつら俺の顔が殴られたことにも気づきやしねー、気づいてくれたのは、鞍馬だけだぜ」

（！顔殴られていたのか！？）（わー全然気づかなかったや・・・）
（フーンあんまり変わってねーじゃん）

ギギギギーゴ、試験会場の方で、大きな音が鳴った

「おっ、二次試験はじまるみたいだぜ、行こう」

キルア達は、会場に向かって走っていった、会場から聞こえていた獣のうめき声は、どうやら、試験官の腹の音だったようだ。

「どお？もう大分お腹はすいてきた？」

「聞いての通り、もーペコペコだよ」

「そんな訳で、二次試験は料理よ！美食ハンターの、あたし達二人を満足させる食事を用意して頂戴」

「まずは、俺の指定した料理を作ってもらい」

「そこで合格した者だけが、あたしの指定する料理を作れるってわけ、つまり、あたしたち二人が美味しいといえば腫れて二次試験合格、試験はあたし達が満腹になった時点で終了よ！」

（男のほうはともかく、女のほうは、あんまり食べそうにないな）
（まさか、料理とは・・・）（これで、かなり人数が絞られる）

「俺の指定するメニューは・・・豚の丸焼き！！俺の大好物！！
森林公園に生息する豚なら種類は自由」

「それじゃ、二次試験スタート！！」

受験者達は、一斉に森の中に走っていった

「豚の丸焼きなら簡単だね！さっさとつくっちゃおうぜ！」

「たしかに、普通の豚と比べると大きくて、凶暴だが、この程度

問題ないな」

「じゃあ、途中でみつけた香草を皆さんに渡しますね」

「サンキュー蔵馬！」

「わたしも、使わせて貰おう、ありがとう」

「ありがとう蔵馬ー！」

「しかし、蔵馬オメーさっきの薬草と良い、香草と言い、植物の知識スゲーな、ありがとうよ！」

会場に戻り、受験者達は豚を丸焼きにしていくのであった。

ドドドドー！！ハイお待ちィ！！試験官の前には大量の豚の丸焼きが並べられていった。

「うん美味しい！これもこれも、イケルイケル、バクバクー！！ゲプ」

「あーくった、くった、もうおなかいっぱい」

ゴオーン「終ー了ー了ー！！」

豚の丸焼き71頭！！バケモンだ・・・！！受験者達の心は一つになったw

「あたしは、ブハラとちがってカラ党よ！！審査もキビシクいくわよー！！二次試験後半！あたしのメニューはスシよ」

（スシ・・・！？スシとは・・・！？）（一体どういう料理なんだ？）（知ってるか？）（いや）

「ヒントをあげるわ、中をみてごらんさーい！ここで料理を作るのよ！！最低限の道具と材料、スシに不可欠なゴハンも用意してあげたわ、最大のヒント！スシはスシでもニギリズシしか認めないわよ、それじゃスタートよ！！」

（この課題もらったぜ！！まさか俺の国の伝統料理がテストに出るとは！しかし、ここで浮かれたら周りにバレちまうからな、知らねーフリして、あっさと一人で合格しちまうのが利口なやり方だぜ・・・それにしてもプププー）

（クラピカ、スシしらねーか？）

（具体的な形は知らないが、文献を読んだことがある、酢と調味料を混ぜたゴハンに新鮮な魚肉をくわえた料理のはずだ）

「魚アー！！お前こは、森の中だぜ！」

「声がデカイ！！川とか池とかあるだろーが！！」

「・・・魚！！！！」

「ちいーっ！盗み聞きとは汚ねーやつらだぜ！」

「あれを盗み聞きと言うならもう何も言うまい・・・」

「くそお、俺のほかにも知ってるやつがいるのか！」

「ねー蔵馬はスシってしってるの？」

「ゴンくん、知っていますが普通スシを作るのには海魚を使うんですよ、川の魚でスシを作る場合は時間が掛かるし、生のまま食べると、寄生虫や病原体があるのでオススメできませんが」

「えーどうしよう！これじゃ合格できないや」

「そうですね、とりあえず魚を確保して、様子を見ることにしましょう」

おのおの、川や池に向かい魚を取ってくるが、まともな魚はいなかった・・・

「自信アリ！！新鮮な魚を加え！にぎるといえばコレしかねえ！よし！出来たぜ！俺が完成一号だ！名づけてレオリオスペシャル！！さあくつてくれ！！」

「食えるかつー！！」

「なにも放ることねえーだろコラア！！」

「何？失格にするよ？ほれ、さっさと戻りな！ーい？形は大事よ！ニギリズシの形をしていないものは、味見の対象にもならないわ！ー！！」

「よし！次は私だ！」（彼女のセリフや彼女の前にある調味料の入っている皿から考察すると、コレしかない！）

「っ！あんたも403番と同じよ！！食えるかあ！！」

（レ レオリオと同じだとっ・・・うつうつ）

「クラピカ！そんなにショックか！！コラ！」

「もーどいつもこいつも、観察力や注意力以前にセンスが無いわ！！やんなっちゃう！！」

「フッフフ！そろそろオレの出番だな！どうだ！！これがスシだろ！！」

「ふーん、ようやくソレらしいのが出てきたわね、どれ、パク・ダメねおいしくない！やり直し！」

「メシを一口サイズの長方形に握って、その上に山葵と魚の切り身に乗せた、お手軽料理だろーが！！こんなもん、誰が作っても味に大差ねーべ！！はあ！しまった！！」

（（（なるほど、そう言う料理か！！！！）））

「お手軽！？味に大差ない！？ざけんなてめー！スシをまともに握れるまで十年の修行が必要って言われてるんだ！！キサマら素人が、いくら形だけ真似したって、味に天と地ほど味が違うんだよボケー！！」

「んじゃ、そんなもんテスト科目にするんじゃねーよ」

「っせーよ！コラ！ハゲ！殺すぞ！文句あるのか！おお！？あん？」

（あーあ、メンチの悪いクセでちまった、暑くなったら最後、味に妥協できなくなるからなあー）

「オイ！次は俺だー！」「いや俺のを！」「俺のだって」

「もーハゲのせいで作り方が皆にバレちゃったじゃない！これからは味で審査するしかないわね」

次々ともっていかれる、受験者達のスシだが、どれも試験官の舌を満足させられるはずがなかった・・・

「蔵馬アー！皆もっていつてるけどどうするの？」

「味で審査するなんて、まず受からないから、まあ、ゴハンと魚もある事だし、お昼たべましょうか？さきほど森の中でキノコなども見つけたので、ちゃんとした料理が作れると思いますよ」

「おいおい蔵馬ー、すんなに何で落ち着いてられるんだ？」

「そうですね、この試験、まず合格するとしたら、その道何十年のベテランのスシ職人だけですよ、なので、素人が何をもっているても合格できない、ここでハンター試験が終了になるか、ハンター協会から試験の変更があるかだと思います。なので、次の試験に備えて腹ごしらえをしておくのが良いと思いますよ」

「ああ確かに、この試験では合格者は出そうにないな・・・」（レオリオと同レベル・・・）

「おい！クラピカ！お前まだ俺と同レベルなのが、気に入らねえ

「のかよ！」

「んじゃ！まあせっかく蔵馬が作ってくれたし、メシたべよーぜ」

ゴン達は、試験そっちのけで、蔵馬が作ってくれた、料理を食べ、一休みをしていた

「悪！！おなかいっぱいになっちゃった！試験　終～～～了～～～～！！合格者は0よ！！」

「納得いかねえな、とてもハイそうですかと帰る気にならねえな！俺が目指してるのはコックでもグルメでもねえハンターだ！！しかも賞金首ハンター志望だぜ！！美食ハンターごときに合否を決められたくねえーな」

「それは残念だったわね、今回の試験では試験官運がなかったってことよ、来年また頑張ればー？」

「こ・・・この！ふざけんじゃねえ！！！！」

パアン！メンチに殴りかかった受験生は、ブハラの手打ちで宙を舞い倒れた

「ブハラ、余計なマネしないでよ」

「だってさー、俺が手を出さなかったらメンチあいつを殺ってたろ？」

「ふん、まーね、どのハンター目指すとか関係ないのよ、ハンターたる者、誰だって武術の心得があって当然！武芸なんてハンター

やってたらいやでも身につくのよ！あたしが知りたいのは、未知のものに挑戦する気概なのよ！！」

「それにしても、合格者0は、ちとキビシすぎやせんか？」

「なんだ？あの飛行船は？」「あれはハンター協会のマーク！！」
「審査委員会か！？」

ヒューードオオオン！！空の上から老人が飛び降りてきた

「なに者だあの爺さん！？」「あの位置からから飛び降りて足は！？」（ククク やるねえ？）

「審査委員会のネテロ会長、ハンター試験の最高責任者よ」

「ほほほ、ワシはハンター協会のネテロという、メンチくん、今回の試験は事前に報告されたものとは大分ちがうな？」

「・・・はい、すみません料理のこととなると我を忘れるんです、審査員失格ですね・・・私は審査員を降りますので試験を無効にしてください」

「ふむ、審査を続行しようにもメニューの難易度が少々高かったようじゃな、よし！こうしよう！審査員は続行してもらう、そのかわり新しいテストには君にも実演というかたちで参加してもらおう、というのでいかなかな？その方がテスト性も合否に納得がいくじゃろ」

「そうですね、それじゃ！ゆで卵！会長わたし達をあの山まで連れて行ってくれませんか」

「ふむ、いいじゃろう」

「マツタツ山」

「着いたわよ、試験は簡単ここマフタツ山の崖から飛び降りて、クモワシの卵をとってくる、下は深い流れの速い川よ流れが速いから数十キロ先の海までノンストップだけど、命の危険はそんなにないわ、クモワシは陸の獣から卵を守る為に谷の間に丈夫な糸を張り卵を吊るしてる、その糸につかまり、卵を1つだけでもって岩壁をよじ登ってくる！簡単でしょ？それじゃお先に！」

そういつてメンチは、崖から飛び降りていった

（・・・簡単に言ってくれるぜ、こんなもんマトモな神経で飛び降りれるかよっ！！）

「本当に蔵馬の言った通り試験の変更になったな、あーよかった」

「こーゆうの待ってたんだよね」

「走るのやら、民族料理を作るのなんかより、よほどはやくて分かりやすいぜ」

「でわ、いきましようか！」

・
・

・
「残りは？ギブアップ？」

「やめるのも勇気じゃ、テストは今年だけじゃないからの」

グツグツグツ、飛び降りた参加者達のクモワシの卵を大ナベでメ
ンチが茹でていった

「うつつまいっ！！」

「濃厚でいて、舌の上でとろける様な深い味わい！」

「美味しいものを発見したときの喜び！少しは味わってもらえた
かしら？こつちとら、これに命をかけてるのよね」

こうして、第二次試験後半めんちの料理合格者43名

第七話 二次試験（後書き）

次はトリックタワー！！ここからは、ゴンたちと離れて蔵馬メインにしていけます！そしてヒロイン・・・どうしよう・・・メンチをヒロインにするつもりだったのに、これだと出来なさそうだorz
オリキャラは出たくないの、ヒロインになれそうな娘いないかな？

第八話 飛行船

― 飛行船内 ―

「残った43名の諸君等に、あらためてあいさつしておこうかの、わしが今回のハンター試験審査委員会代表責任者のネテロじゃ、本来ならば最終試験で登場する予定であつたが、いったんこうして現場に出てくると、なんともいぬ緊張感が伝わってきていいもんじや、せつかくだからこのまま同行させてもらふことにする、ほほほ」

「次の目的地には、明日の朝八時到着予定です、此方から連絡するまで自由に船内でお時間をお使いください」

受験生をのせた飛行船は大空に飛び立って行つた

「ゴン！飛行船の中を探険しようぜ」「うん」

「元気な奴等・・・俺は、とにかくぐっすり寝てーぜ」

「私もだ、おそろしく長い一日だった」

「俺も、少し眠らせてもらおう」

「試験は一体後いくつ有るんだろうか？」

「あつ！そついや聞かされてねーな」

「試験の数は、審査委員会が、その年の試験官と試験内容を考慮

して、加減する、だが大体平均して5つか6つくらいだ」

「あと、3つか4つぐらいってことか」

「なおのこと、今は休んでいたほうが良いな」

「だが気を付けた方がいい、さっきの進行係は、次の目的地と言っただけだから、もしかしたら飛行船の中が三次試験の会場かもしれない、連絡があるのも朝八時とはかぎらない、寝ている間に試験が終わってしまってる、なんてことにもなりかねない、次の試験受かりたきゃ、ココでも気を抜かないほうが良いってことだ」

（なーんちゃって、せいぜいキンチョーして心身ズタボロになりな）

「なー蔵馬、今のトンパの話どうみる？」

「そうですね、他の参加者おもにトンパに一次試験の時話を聞きましたが、トンパという男はルーキー潰しで有名だそうですよ、なので、飛行船の中では休憩をとるのが良いと思いますよ」

「ケツ！マジかよトンパのヤツ！！分かったよ、疲れてるし十分休憩させてもらうぜ」

「私も、同じだな、トンパは信用できない、休ませて貰うよ」

「あちらのほうに、休憩できそうなスペースが有ったので移動しましょうか」

―飛行船内の試験管達の休憩室―

「ねえ今年は何人くらい残るかな？」

「合格者って事？」

「そつ、なかなかツブぞろいだと思うのよね」

「でも、それは、これからの試験内容じゃない？」（メンチみた
いな試験官じゃ一人も残らないだろうし）

「そりゃま、そーだけださあー、試験してて気づかなかった？け
っこう良いオーラ出してたヤツラいたじゃない、サトツさんどう？」

「ふむ、そうですね、ルーキーが良いですね今年は」

「あーやつぱり！？あたしは254番が良いと思うのよねーハゲ
だけど」

（唯一スシってたしね、406番もしてそうだったけど・・・
）

「私は、断然99番の彼が良い、406番の彼も捨てがたいです
が、これから考えると99番ですね」

（女性なら、是非とも試験終了後にでも、スカウトしたいもので
すが・・・もったいない）

「99番！？あいつきつとワガママでナマイキよ！絶対B型！―

緒に住めないは！406番の彼？あれは女の子じゃないの？スシ知ってるみたいだったけど作らなかつたみたいだし、きっと家事は苦手なタイプね」

（そーいう問題じゃないんじゃないかな・・・？406番のスシを知っているのは気づいてたんだ）

「406番は、男性だそうですよ、一次試験の時に99番と話しているのを聞きましたから」

「ここでも、女性だと思われている蔵馬だった・・・」

「ブハラは？」

「そうだねールーキーじゃないけど気になったのは、やっぱり44番かな、メンチも気づいてたと思うけど、255番の人がキレたとき、一番殺気をはなっていたのが、実は44番だったんだよね」

「もちろん、しつてたわよ、数え切れない凄い殺気だったわ、でも知ってるブハラ？あいつ最初からああただったわよ、あたしら姿を見せてからずーっと」

「ホントー？」

「そつ！あたしが、ピリピリしてたのは実は、そのせい、あいつずーとあたしに、ケンカ売ってるんだもん！」

「私にもそうでしたよ、彼は要注意人物です、認めたくありませんが彼も我々と同じ穴のムジナです、ただ彼は、我々より暗い場所に好んで住んでいる、我々ハンターは心のどこかで、好敵手を望ん

でいます、そんななかにたまに現われるんですよね。ああいう異端児が・・・我々がブレーキをかけるところで、ためらい無くアクセルを踏むような」

「飛行船内」

「くくく？」

（やっぱり、アイツは危なすぎるな・・・近づかないでおう）
（うー近くにいるだけで寒気がするぜ）

そのころ、ゴンとキルアはネテロ会長と玉取り遊びをしていた

・
・
・

「機長か？ワジじゃネテロじゃがのー飛行は順調？そうか、順調なところ悪いんじゃないが、少しゆーっくり飛んでくれんか？」

疲れ果てて、熟睡しているゴンのためにネテロは機長をお願いをしていた・・・それから数時間後・・・

「皆様大変お待たせしました、目的地に到着です、ここはトリックタワーと呼ばれる塔のテッペンです、ここが三次試験のスタート地点になります、さて試験内容ですが、試験官からの伝言です、生きて下まで降りてくること、制限時間は72時間、それではスタート！」

第三次試験参加人数41名

第八話 飛行船（後書き）

うー三次試験の前に、飛行船がありましたね・コンビに行ってきたら、三次試験を書き始めます。

第九話 三次試験 前編（前書き）

ああトリックタワーを降りきったところまで書いたのに・・・消えちゃったTT途中保存とかできないのかな？はあーorz

第九話 三次試験 前編

ートリックタワー頂上ー

（生きて下まで降りること制限時間は72時間）

「側面は窓一つ無いただの壁か」

「ここから降りるのは自殺行為だな」

「普通の人間ならな！このぐらいの取っ掛けがあれば一流の口ツククライマーなら難なくクリアできるぜ」

グッ グッ ス ス86番の男は、どんどん壁を降りていった

「うわすげーもうあんなに降りてる」

「あ・・・あれ」

ゴンガ遠くから飛んでくる怪鳥の群れを発見した

「ふふん、どうやら第三次試験の合格者第一号は俺様の様だ・・・
？！・・・！！うわああああ」

「外壁をつたうのは無理みてーだな狙い撃ち・・・」

「きつと、どこかに下に通じる扉があるはずだ」

「・・・？人数が減っている21 22」

「23人！？」

「半数近くが、すでに頂上から脱出したことになるな」

「くそっ！いつのまに」

「この人数の中、こっそりと全員が同じルートを使って降りたとは思えづらい。きっといくつも隠し扉があるんだ」

「蔵馬ー！レオリオー！ クラピカー！そこで隠し扉見つけたよ、でも今迷ってるんだ」

「は？なにを迷うことがあるんだ？」

「どれにしようかと思って、扉がいっぱい、ここと、ここ、あとコッチに2つ、少し離れた所に2つ」

「6つの隠し扉が、こんなに密集しているのが、いかにも胡散臭いぜ」

「おそらく、このうちのいくつかが罠・・・」

「だろうな」

「扉は一人につき一つずつ、皆バラバラの道を行かなきゃいけない、ゴンとオレはこの中の1つをそれぞれ選ぶ事に決めた」

「罠にかかっても恨みっこ無し！」

「鞍馬、レオリオ、クラピカどうする?」

「いいだろ!! 運も実力のうちってな」

「最初に誰が選ぶ?」

ジャンケンポン!! あいこでしょ! あいこでしょ!

「決まったな1・2・3で全員行こうぜ、ここでいったんお別れだ、地上でまたあおうぜ」

「1」

「2」

「3!!」

スタ! スト! ドカ! ザ!

「くっそ! どの扉をえらんでも同じ部屋に降りる様になったのかよ」

「違うよレオリオ、蔵馬がいないよ」

「よっ! 飛行船ぶりだな」

「あっ! トンパさん! トンパさんが先に降りてたんだね」

「あージューズくれた人か、まだ余ってる? のど渴いちゃって」

「すまない、もうジュースは無いんだアハハ」（こいつ、まだあのジュースを飲むつもりかよ・・・何者だ？しかし、このメンツはルーキーだけだな、ククク」

「そうすると、蔵馬の方がわなだつたのかなー」

「いや、そう考えるのは早計だ、この部屋のように全てが下に降りれる可能性もある」

「壁にプレートがあるぜ、多数決の道だー？」

こうして、ゴン、キルア、レオリオ、トンパは多数決の道を進んでいく

ー蔵馬ー

（ここは、罨では無さそうだな・・・ゴン達とは別れてしまったが、地上であえることを祈ろう、ん？壁に何かプレートのようなものが・・・）

ひゅーどさ！上からターバンを巻いた人物が降ってきた、蔵馬の降りていた近くにあった隠し扉からであろう

「いててて、なんとか頂上から脱出できたか」

「大丈夫ですか？怪我はないようですが」

「あー大丈夫だよ、オレはポツクル！よろしくな！」（おおラッキー美人のネーチャンと一緒にとは！オレにも運がむいてきたかも）

「よろしくお願いします、オレは蔵馬、壁にプレートがあるみたいなんで読んで見ましょうか」

バトルの道：このルートは下に向かうと闘技場がある、そこをクリアすれば地上に向かえる

「バトルか、あんた腕に自信はあるかい？オレはこの弓があればソコソコ戦える」（良いとこ見せて、ポイントをかせぎたいな）

「ええ、オレも腕にはソコソコ自信がありますよ、ではポツクルさん向かいましょうか」

一本道を暫く蔵馬達が歩いていると開けた空間にでた、部屋の中
央にはリングが設置されていた、様子よ見ていると、天井から釣り
下がっているスピーカーからアナウンスがながれてきた

「ここでは、君たちに向こうの扉からでくる囚人達と戦っても
らう、人数は5人、一人で戦っても、交互に戦っても構わない、た
だ参加をすると棄権は認められなくなる、ルールを説明しよう、武
器の使用は許可する、リングがら出た場合は10カウントで負けと
なる、勝負は死亡するか場外でのカウント負けのみ、ギブアップは
認めない、ああ相手は、凶悪犯罪犯罪者、殺しても気にしなくて良
い、どうする、参加する？しない？キシシ」

「もちろん！参加するに決まってる！犯罪者ごときにオレは負け
ない！」（オレの勇姿をみせてムフフ）

「参加します」(死亡するかカウント負けのみ？なにかあるのか？)

「よろしい！でわ第一試合を開始する」

試験官がそう言つと、反対側のゲートが開き、一人の男があるいてきた

「彼の名は、ゲイリー。リッジウェイ、通称：川男、彼が殺してきた人数は1000人以上、殺した人間の血で川が出来たことからそうよばれている、刑期は1200年だ、存分に戦ってくれたまえキシシ」

「じよ！冗談じゃ無い！あんなヤツと戦える訳ないだろ！」

「・・・いったはずだよ、参加をすると棄権は認められなくなる
とね」

「くっ！」(いい所をみせるどころか、殺されちまう・・・オレ
つてやっぱり運が無いのかな・・・)

「ポックルさん、オレが先にいきますね」(特に問題は無いな・・・
ただの犯罪者か)

「わ わかった、でも気を付けろよ、危険だと思ったら場外に出て、カウント負けをするんだ」

「大丈夫ですよ、でわ行ってきます」

そついうと蔵馬は、リングの上に飛び乗った

「ククク、対戦相手はキレイなネーチャンか、シャバにいた時にも殺せなかった上玉だ、囚人になるのも悪くねーな、一番手になれるなんて俺はツイてるぜ」

「ごたくは良い・・・さつさと掛かって来い、あとオレは男だ」

女に間違われて、蔵馬は頭にきているようだ、この世界に着てから間違われっぱなしなのがいけないと思うが

「これより第一試合はじめ！！キシシ」（406番が男だったとは・・・）

「男でも、キレイなツラしてるなら楽しめるさ！」

ゲイリーは蔵馬に向かって走り出し、背中に隠していた鎌で足元を薙いだ、鞍馬は軽くジャンプして交わり、ふたたび距離をとる

「たいした使い手でも無さそうだ、今楽にしてやるよ」

蔵馬は、ゲイリーの鎌をかわしつつ、右手で手とうを叩き込んだ

「ちょこまかと逃げやがる！お前もオレが過去に遊び殺したヤツラと同じように、この鎌で切り裂かれればいいんだよ！！お前の攻撃なんてオレには効きはしねーよ」

そう言つて、ゲイリーは鎌を振り回しながら蔵馬に攻撃を仕掛けてくる、どんどんと激しくなる攻撃、しかし蔵馬は、ソレをなんなく交わしていた、する突然ゲイリーの動きが止まった

「うつ！？体が動かねエ」

蔵馬は、冷酷な目でゲイリーをみると闘技場の気温が低く感じられる殺気を出しながら、こう言った

「さつき、お前にシマネキ草の種を植えこんだ、体の自由がきかないほど、根が全身に行き渡った様だね・・・おれが、ある言葉を発すれば、爆発的に成長し体を突き破る、キミが外道でよかった、オレも遠慮なく残酷になれる」

（なんだ、蔵馬の、あの凍るような目は・・・アレは俺たちとは違う！ヒソカの様な危険な感じがする・・・）

「まつ！待ってくれ俺が悪かったア許してくれヒイイ！！！！」

（ほーあのゲイリーを、あそこまで追い込むとは・・・シマネキ草？聞いたことが無いな？寄生植物だろうがキシシ）

「死ね」

ぶばっ！！」「うぎゃああああああ！！！！！！！！」

「皮肉だね、悪党の血の方がきれいな花が咲く・・・」

（ちよっ！マジかよ！何この死に方！コワっ！ああーやっぱりオレは運が無いワァーン）

「あっ！蔵馬さん！試合お疲れさまでした！！タオルあるんで使ってください！！」

ポツクルは恐怖の余り蔵馬の機嫌を取ることにした

「ポツクルさん、ありがとうございます」

笑顔で、答えた蔵馬の顔すら今のポツクルには、恐怖以外の何者でもなかった

「死体の片づけが終わるまで、暫く休憩してくれたまえキシシ」

―囚人控え室―

「じょ冗談じゃねえ。俺たちはもう抜けるぜ!!」

「殺しが出来て、恩赦がもらえるって参加したんだ、オレはあんなやゲイリー程、強くねーんだ!」

「刑務所の中の方がよっぽど安全だぜ」

バシユ!バシユ!バシユ!

奥に座っていた男が立ち上がると、3人の首めがけて回し蹴りをした

「フィー、おい!刑務官!不慮の事故で3人が死んだ、この場合、オレが出て問題ねえーよな?」

「・・・問題ない、しかし、殺した囚人の分は、お前の刑期に加えるからな!囚人を殺すなと何度も言っただろう!!」

「んゝはいはい、これから気をつけるよ、刑務官殿アハハ」

（ちっ！忌々しいヤツめ！コイツも殺してくれないかな・・・しかしコイツは念能力者、406番に対抗できるか？）

第九話 三次試験 前編（後書き）

次回：トリックタワー後半！また消えるのが怖いので途中で区切らせていただきます。

第十話 三次試験 後編

―闘技場―

先ほどの試合が終わり、死体の処理も終わった闘技場で、次の試合が始まるのを、蔵馬たちは、じっとまっていた。

「ポツクルさん、次の試合はどうしますか？俺がこのまま戦ってもいいですか？」

蔵馬は、さっきのポツクルの様子を見ると、もう使い物にならないと重いながらも話しかけた

「へ へい、すみません、俺では力不足のようです、蔵馬さんよろしくおねがいします！」

ポツクルは、完全に小物になっていた。

そこに、アナウンスが流れ始めた「これより第五試合を始める！キシシ」

第五試合？次は第二試合のはずだろ？蔵馬は、疑問に思いながらアナウンスに耳を傾けた。

「先ほど、控え室で不慮の事故がおきた、第二、第三、第四試合に出るはずだった囚人が、死亡これにより第五試合の囚人しかいなくなつた。この試合に勝てばクリアだ、では、頑張ってくれたまえキシシ」

試験官が、そう言うのとゲートが開き、大柄な男が笑顔で手を上げながら進んできた、隙があるようで隙が無い、先ほどの男とはまったく違う、強者のオーラをかもし出しながら。

「彼の名は、ジョン・ウィリー、通称：ナチュラル・ボーン・キラ―、彼が殺してきた人数は5000人以上、生れながらにした殺人鬼だ、刑期は6400年だ、格闘かや腕自慢のを殺してきた男だ、ゲ―リーとは別物だよ・・・出来ればコイツは殺して貰いたいよ、

でわ戦って勝ってくれたまえキシシ」

「よう！刑務官さみしいーこと言うじゃねエーか、囚人なんか殺しても問題は無いだろうよ？俺は強いやつと戦いたいだけなんだ、ビビッてる小物なんかに時間を取られたくねエ、本物の戦いがしたいだけさ、さあ！早くリングに上がって来い！」

蔵馬は、試験官とジョンの会話を聞き、相手の予想を立てていた、彼は戦闘狂か、確かに彼から感じるオラーは戸愚呂並だ、それにヤツの右腕・・・異常に発達している、おそらく彼の最大の武器は右腕からの攻撃だろう、しばらく様子を見るか。

そう考えながら、蔵馬は、リングの上にとった。

「それでは、第五試合開始キシシ！！」

ジョンの姿が、突如として消失した。

視界が捉えたのは、砕けるリング、視界をさえぎる粉塵のみ、そしてジョンが大声で叫んだ。

「コレが俺の必殺技よ、死招乃右だ、ウェーピングライト単純に右手で思いつきりブン殴るだけだがな、威力はこの通りだ、リングはもう無い！場外負けは無くなった！お前のチカラも俺にみせてくれよ！」

粉塵が収まると、そこにはリングの元あった位置に二人は立っていた、ポツクルは先ほどの衝撃で壁に激突し、気を失っていた。

（チッ！ジョンのヤツまた施設を破壊しやがった！俺に何か恨みでもあるなか？406番！本気であいつは殺してくれ）

「俺からも、行かせて貰います薔薇棘鞭刃」ローズウィップ

蔵馬は懷から1本の薔薇を取り出し、妖気をこめムチに変化させた、ムチを構えながらジョンに向けて疾走する、放たれた蔵馬の一撃はジョンの胸板めがけてき、直撃した、しかし・・・

「フー、いい一撃だぜ、血を流すなんて何年ぶりだろうアハハ」
ジョンは、切り裂かれた傷口を楽しそうに右手で撫ぜ口元にもっていく。

「さー、こっからが本番だ！」

一気に駆け出したジョンは、右手で蔵馬の腹めがけてパンチを繰り出した、蔵馬はその間合いから逃れるように後退したが、かわしたはずの攻撃が激しい衝撃となつて腹部を襲う。

「くっ！かわしたはずが・・・」

「コレは、遠当てつて技だ、文字道理の攻撃を遠くに当てるだけの技だが、俺の右手から放たれる一撃は岩をも砕くぜ！コレを食らつて立っているのはアンタで3人目だ！」

今の人間の姿をした、蔵馬には、結構なダメージだった、接近すると死招乃右間合ウェーピングライトいが離れると遠当て、ジョンはこの攻撃2つで数々の格闘家たちを倒してきた。

「ならば、これはどうだ！」

鞍馬は懷から葉っぱを左手で出し妖気を込めナイフにする、それをジョンめがけて投げつけた、かわすことをせず間合いを詰めてくる、ナイフは腕や体に刺さるもの、気にする様子も無く蔵馬の目の前まできた。

「風華円舞陣！！（フウカエンブジン）」

空中に撒かれた、刃のように研ぎ澄まされた花びらが蔵馬を守り包み込んで、その領域を侵す全てのものを切り刻む。

「ぐはっ！」

流石に、この攻撃にはジョンも後退した、蔵馬は懷に潜り込みジョンの胸に当身を食らわす。

「中々やるじゃねーか！楽しいぜ！だが、最後の一撃は失敗だな」
ジョンはそう言うのと自らの胸の傷に指を突っ込んだ

「さっきの試合は控え室のモニターで見させてもらったぜ、この俺に二番煎じはきかねえよ」

シマネキ草の種は指で、すりつぶされた。

さっきの試合で、シマネキ草を見せたのは間違いだったか、だが今の妖狐のチカラを取り戻した俺なら吸血植物は呼べる、コイツを胸に叩き込めば決まる、勝負は、攻撃後の隙が大きいウェーピングライトをかわした時！

蔵馬は、考えをまとめると、ジョンの攻撃を誘う為にムチを捨て、接近戦に持ち込んだ。

「おお、インファイトか！俺の最も好きな事に付き合ってくれなんてありがてエーな」

二人の攻撃は、激しさをます、衝撃で砂煙が舞い上がり、徐々に両者にダメージを与えていく、ジョンの左ストレートを蔵馬は右手でガードし、飛ばされ間合いが少し開いた！

ウェーピングライト
「死招乃右！！」

すかさず、絶好の間合いに必殺技を放つ！蔵馬はそれをしゃがみ込みながら回避しジョンに向けて吸血植物を召還した。

「ぐがああ！！」

吸血植物はジョンの胸を突き破った。

「ぐはっ、コレで勝負は決まったな楽しかったぜ、俺アもう満足だ、ハラアいっぱいだ・・・」

そう言うジョンは息絶えていった。

「キミも強かったよ・・・生まれ変わって魔族になったら幽助と戦って見るといい・・・」

大量殺人を犯した、ジョンだが非道な男では無かった、彼はただ強いものと戦いたい、それは魔族の本能のようなものだ、蔵馬は彼にそつつぶやいた。

「試合終了、おめでとうキシシ、ゲートを開けるからそこから降りるといい、壁際に転がっている彼も連れて行ってくれたまえキシシ」

ゲートが開かれ蔵馬はポツクルを担ぎ闘技場を後にした・・・

（ジョンをやぶるほどの念能力者か、今年のルーキーは優秀なようだキシシ）

ー トリックタワー地上部ー

「第三次試験406番53番合格！所要時間13時間45分」

スピーカーから、合格を告げるアナウンスが流れた、蔵馬は今だ気を失っているポツクルを壁際に寝かせ、持っている薬草で腹の傷を癒していた。

「ククク 試験おつかれさま、キミに傷をつけるなんて試験官も中々いい手駒をもっていたね」

ヒソカが、そっぴいながら近づいてきた。

「ええ、手ごわい相手でしたよ、手当てが終わったら試験終了までやすませてもらいますよ」

「トランプでもどうかと思ったんだけど しかたがないね、キミと戦えるのを楽しみにしているよククク？」

ヒソカは、蔵馬のそばから離れ、トランプタワーを作っては倒し、作っては倒して時間を潰していた。

残り時間が30秒のアナウンスが流れてきたとき、3人の足音がゲートの方から聞こえてきた。

「ケツいてー」

「短くて簡単な道が、滑り台になってるとは思わなかったよ」

「ギリギリだったね」

「もう手がマメだらけだ」

「全くイチカバチかだったな、だが5人揃ってタワーを攻略できた、ゴンのお陰だな、全くあの場面でよく思いついたもんだ」

「長くて困難な道から、50分以内に壁を壊し短く簡単な道へ行く、確かにこれなら5人揃って時間内に脱出出来」

「対戦した試験官が壁や床を素手で壊してたからさ、道具さえあれば、残り時間内に穴を空けられるかもって、思っただけんあんだけどね」

（極限の精神状態で、二択を迫られてなお、それをブチ壊す発想

が出来る・・・そこがお前のすごいところだ)

「タイムアップー!!!第三次試験通過人数26名!!!(内1名死亡)」

第十話 三次試験 後編（後書き）

それにしても戦闘描写は難しい・・・

第十一話 四次試験

― 船上 ―

三次試験が終わり、四次試験会場に向かう船の上で、試験内容が発表された

「諸君タワー脱出おめでとう、残る試験は四次試験と最終試験のみ、四次試験はゼビル島で行われる、でわ早速だがこれからクジを引いてもらう」

「くじ・・・？」

「これで一体なにを決めるんだ？」

「このクジで決定するのは、狩るものと狩られるもの」

試験官助手が持ってきたクジの箱に皆の視線が集中する。

「この中には24枚のナンバーカードと1枚ワイルドカードすなわち、今残っている諸君らの受験番号とプラス1枚が入っている。

今から一枚つ引いてもらおう、それではタワーを脱出した順にカードを引いてもらおう」

受験者たちは、順々にカードを引いてきた

「全員引き終わったね、諸君がそれぞれ何番を引いたかは、全てこの機械が記録している、したがって、そのカードは各自自由に処分して結構、それぞれのカードに記された番号の受験生が、それぞれのターゲットだ」

試験官は、受験生たちを見渡すとルール説明を続けた

「奪うのはターゲットのナンバープレート、自分のターゲットとなる獲物のプレートは3点！自分自身のナンバープレートも3点！それ以外のナンバープレートは1点！最終試験に進む為に必要な点数は6点！ゼビル島での滞在期間中に6点分のナンバープレートを集めること！例外としてワイルドカードこのカードを引いた受験者

のナンバープレートは6点だ」

試験官の説明が終わると、受験者たちは、自らのナンバープレートを懷に隠していった、誰が自分を狩る者か、誰が自分の獲物か誰とも視線を合わさず、情報を遮断していった。

ーゼビル島ー

「それでは、第3次試験の通過時間の早い人から順に下船してもらいます。一人が上陸してから3分後に次の人がスタートする方式を取ります！！滞在期間は丁度一週間！そのあいだに6点分のプレートを集めて、またこの場所に集まってください！！それでは、一番の方スタート！！」

全ての受験生が、島の中に散らばって行った、ゼビル島は緑豊かで過ごしやすい島だが、人の手が全く入っていないことから、森に入ると見通しが悪く、ジャングルのような生態だった、蔵馬は運良くワイルドカードを引き当てたので、この試験中は誰とも会わないように、森を進んでいった。旅で使った薬草の補充も兼ねて奥へ奥へと、薬草を探しながら試験終了まで森の奥深くを探索した。

ボー！！スタート地点の方から船の汽笛が島一帯に鳴り響いた

「ただいまをもちまして、第四次試験は終了となります。受験生の皆様はすみやかにスタート地点にお戻りください！これより一時間の帰還猶予時間とさせていただきます。それまでに戻られない方は、すべて不合格とみなしますのでご注意ください！なおスタート地点に到着後のプレートの受け渡しは無効です、確認され次第失格となりますので、ご注意ください！！」

―飛行船内―

最終試験会場に向かう飛行船の中では、ネテロ会長を始め、試験官たちが集まって今年の試験について話をしていた。

「10人中7人がルーキーか、ほぼ豊作、豊作」

「たまにあるんですか？こんなことって？」

「うむ、たいがい前触れがあつてな10年ぐらいルーキーの合格者が出ない時期が続く、そして、わつと有望な新人があつまりよる、ワシが会長になって、かれこれ4度目の―」

「へえー」

（会長って年いくつなの？）

（20年ぐらい前から約100歳と言ってますけど）

「ところで、最終試験は一体何をするのでしょうか？」

「あ、そうそう、ぼくらも、まだ聞いてないね」

「ルーキーの豊作の年かどうかは、まだ最終試験次第だもんね」

「うむ、それだが一風かわった決闘をしてみらうつもりじゃ」

「？？」

「その為の準備として、まず10人とそれぞれ話をしてみたいの
オ」

（どーゆーことだろ？）

（さー会長の考える事は私には、さっぱり）

「えーこれより会長が面接を行います。番号を呼ばれた方は2階の第一会議室までお越しください」

「受験番号44番の方！44番の方お越しください」

会議室は、和風の居間の様な部屋だった、ネテロ会長が上座に座り、ちゃぶ台をはさんだ反対側には座布団がひかれていた。

「まあ座りなされ」

「まさか、これが最終試験かい？」

「まったく関係ないとは言わんが、まあ参考までにちよっぴり質問する程度のことじゃよ。まず何故ハンターになりたいのかの？」

「別になりたくないけど、資格持つてると色々便利だから？例えば人を殺しても免責になる場合が多い意しね？」

「なるほど、ではおぬし以外の9人の中で一番注目しているのは？」

「99番？405番も捨てがたいけど一番は彼だね　いつかは手合わせ願いたいなア　ククク？」

「ふむ・・・でわ最後の質問じゃ、9人の中で一番戦いたくないのは？」

「・・・それは405番・・・だね　99番もそうだが・・・今は、まだ戦いたくない・・・と言う意味では。405番が一番かな　ちなみに、今一番戦ってみたいのは、あんなだけだね」

「うむ、ごろうだった、さがってよいぞ」

質問が終わりヒソカは部屋から退室していった

（くえないジイサンだな　まるでスキだらけで毒気抜かれちゃったよ　」

「ポックル」

「注目しているのは404番だな、一番バランスが良い」

「406番！ームリ！ー絶対ムリ！ーわぁーん」

「キルア」

「ゴンだね、あ、405番のさ同年だし」

「53番かな、戦ってもあんまし面白く無さそうじゃないし」

「ポドロー」

「44番だな、いやでも目に付くつく」

「99番と405番と406番だな女子供とは戦うとは考えられぬ」

「ギタラクルー」

「99番」

「44番」

「ゴーン」

「44番のヒソカが一番きになってる色々あつて」

「うーん99・403・404・406番の4人は選べないや」

「ハンゾウ」

「44番だな、こいつがとにかく一番ヤバイからな」

「もちろん44番だ」

「クタピカ」

「良い意味で405番、悪い意味で44番」

「理由があれば誰とでも戦うし、無ければ誰とも争いたくない」

「レオリオ」

「405番だな、恩もあるし、合格して欲しいと思うぜ」

「そんな訳で405番とは戦いたくねエーな」

「蔵馬」

「そうですね、そうですね405番彼には助けてもらいましたし、

彼の目標は是非かなえてもらいたいのです」

「405番です、同じ理由で」

こうして参加者すべての面談が終わり、ネテロ会長は、決闘の組み合わせを書き出した

「うーむ、なるほど思ったより、かたよつたのオ、これで良しっ

と！おい、みんな見てみイ、組み合わせが出来たぞえ」

「会長・・・これ本気ですか？」

「大マジじゃ、ひえっひえっ」

（たしかに本気の目だ；」

「みなさま長らくお待たせしました、間もなく最終試験会場に着します」

飛行船は最終試験会場に降り立った、降り立った受験者たちは最終試験に向けて気合を入れなおした。

「これで勝てば晴れて、ハンターの仲間入りじゃ、試験は3日後に行く、各自それまでハンター委員会が経営するホテルで疲れを癒して欲しい、それでは3日後に又会おう」

受験生たちは、各々いままでの試験の疲れを癒す為に、割り与えられた部屋に向かっていった。

第十一話 四次試験（後書き）

はい！すみません、三次試験で戦闘描写に疲れたので、ぶっちゃけ四次試験は逃げました。

第十二話 最終試験（前書き）

何気にトーナメント表作るのに苦労しました……投稿してズレがあったら直します

第十二話 最終試験

— 最終試験会場 —

ホテルでの3日が過ぎこれから、最終試験が行われようとしていた。「さて諸君、ゆつくり休めたかな？ここは委員会の経営するホテルじゃが、決勝が終了するまで、君達の貸切となっておる、最終試験は一对一のトーナメント形式で行う！その組み合わせはこうじゃ！」

209

405

406

99

301

191

404

「さて最終試験のクリア条件だが、いたって明確だった一勝で合格である!!」

「ってことは・・・」

「つまり、このトーナメントは、勝った者が次々抜けていき、負けたものが次々上に上がっていくシステム!この表の頂点は不合格者を意味するわけだ、もう、お分かりかな?」

「つまり不合格者は、たった一名ってことか」

「さよう、しかも、誰でも2回以上の勝つチャンスが与えられている、何か質問は?」

「組み合わせが公平ではない理由は?」

「うむ、当然の疑問じゃな、この取り組みは、今まで行われた試験の成績を元によって決められている、簡単に言えば、簡単に言えば成績の良い者にチャンスが多く与えられているということ」

「それって、納得出来ないな、もっと詳しく点数の付け方とか教えてよ」

「だめじゃ」

「~~~~~なんでだよ!!」

「採点内容は極秘事項でな、全てを言う訳にはいかん。まあ、やり方くらい教えてやろう、まず、審査基準これが大きく分けて3つ、身体能力値、精神能力値、そして印象値これからなる。重要なのは印象値!

これすなわち、いふなればハンターの資質評価と言ったところか、それと諸君等の生の声とを吟味した結果こうなった以上じゃ!」

「・・・」

（試験の結果ならオレの方が上のはず・・・!!資質でオレがゴンに劣っている!?!）

キルアは、ネテロの説明を聞いて、今まで感じたことの無い感情が湧いてきた

「戦い方は単純明快、武器OK反則なし相手に”まいった”と言わせれば勝ち！ただし、相手を死に至らしめてしまったら即失格！その時点で残りの者が合格、試験は終了じゃよいな」

「それでは、最終試験を開始する！！」

― 第一試合 ハンゾー対ゴン―

開始直後、ゴンがスピードで攪乱しようと走り出したが、ハンゾーのスピードの方が速く、首に手とうが叩き込まれてしまう、倒れたゴンの頭をハンゾーは脳震盪を起こすように平手打ちで叩いた、しかし、ゴンは、負けを認めず、ハンゾーは3時間同じ事を繰り返した。ハンゾーはゴンの腕を折ると言い負けを認めさせようとするが、これはゴンが否定、ハンゾーはゴンの左腕を折った、それでもゴンは負けを認めない、今度は足を切り落とすと脅されたが、切断したらオレは死ぬとゴンに言われ、踏みとどまり何故負けを認めないか、ゴンに問いただし、ゴンの目を見て自分の負けを宣言したが、ゴンがワガママをいったところでハンゾーの右アッパーが決まりゴンは気絶

第一試合！勝者 ギン

― 第二試合 クラピカ対ヒソカー―

クラピカから攻撃を仕掛け、ヒソカは交わしていく、そしてヒソカはクラピカの耳元で囁いた、その直後に負けを宣言

第二試合！勝者 クラピカ

― 第三試合 蔵馬対ポックル―

開始直後、ポツクルがジャンピング飛び土下座、泣きながら負けを宣言

第三試合！勝者 蔵馬

ー 第四試合 ハンゾー対ポツクルー

ハンゾーにゴンと同じような体勢に押さえ込まれたポツクル、ハンゾーの「悪いが、あんたにや遠慮しねえぜ」の言葉で泣きながら負けを宣言

第四試合！勝者 ハンゾー

ー 第五試合 ヒソカ対ポドロー

スタートから一方的にヒソカの攻撃、ボロボロになったポドロにヒソカが耳元で囁き、ポドロが負けを宣言

第五試合！勝者 ヒソカ

ー 第六試合 キルア対ポツクルー

ポツクルの前の試合をみてキルアは、戦う気が起きず開始と同時に負けを宣言

第六試合！勝者 ポツクル

ー 第七試合 レオリオ対ポドロー

レオリオが、ポドロの怪我を理由に、試合の延期を申請
第七試合！第八試合後に再戦

ー 第八試合 ギタラクル対キルアー

スタート開始に、ギタラクルが喋り、顔に刺さっていた針を抜き出す。そしてキルアと話をし出し、会話が終わると、キルアは負けを宣言、宣言後は抜け殻になったようにうつむいて、誰が話しかけても無反応になった。

第八試合！勝者 ギタラクル

―第九（七）試合 レオリオ対ポドロ―

レオリオとポドロが向かい合い、開始が宣言された直後、キルアがポドロを背中から貫き手で突き刺し死亡させた。そしてキルアは会場から姿を消した。

第八試合！勝者 レオリオ

―ハンター合格者説明会―

合格者達は、キルアの失格について話し合っていた、キルアに暗示が掛けられていたという意見、レオリオ対ポドロ戦で起きた事なのでレオリオが不合格という意見、クラピカの勝利が不自然という意見、ポツクルの不戦勝での勝利が不自然と言う意見、しかし、一度決まった結果は覆されないとネテロが言い、ハンター試験合格者説明会を始めた。

「皆さんにお渡したカードがハンターライセンスです、偽造防止のための、あらゆる最高技術がほどこされています、民間人が入国不能の約90%と立ち入り禁止地域の75%まで入ることが可能になります。

公的施設の95%は無料で利用でき銀行からの融資も一流企業並に受けられます、売れば人生七回は遊んですごせますし、持っている

だけで一生なに不自由せざるはざです。それだけに、紛失・盗難にはご注意ください、再発行はいたしません。我々の統計ではハンターになった者の5人に1人が、一年以内に何らかの形によりカードを失っています。」

「プロになったあなた方の最初の試練は”カードを守ること”といつて良いでしょう、次は協会の規定についてですが……さて以上で説明を終わります。あとは、あなた方次第です。試験を乗り越えて自分自身を信じて夢に向かって前進してください、ここにいる8名を新らしくハンターとして認定いたします!!」

説明会終了後、ゴンはギタラクルにキルアの居場所を聞いた、ギタラクルはあっさりと自宅の場所を教えた”ククルーマウンテン”

ギタラクルに居場所を聞いたゴン達が歩いていると、ハンゾー・ポツクルが近づいてきて、ホームコードの交換を持ちかけて、レオリオ・クラピカは交換した、ホームコードを持っていなかった、ゴンと蔵馬は名刺だけ貰い、ハンゾーとポツクルに別れを告げた。

目指すはククルーマウンテン！電脳ページで場所を検索”パドキア共和国”飛行船のチケットを予約し一行はキルアを迎えに行く・

第十二話 最終試験（後書き）

うーん、下書きではチャンと表になってるのに、にじファンで見るとズレてる・・・何故？解決方法知ってる方、是非教えてくださいm(。°。°)m

ギリギリ何とか見えるようになったかな？ご助言有難うございました。

閑話 霊界ランク・念能力（前書き）

頭の中で、強さを考えるのが限界になったので追加させていただきます。

閑話 霊界ランク・念能力

<蔵馬>

ランク A級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<ゴン>

ランク D級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<キルア>

ランク C級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<レオリオ>

ランク D級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<クラピカ>

ランク D級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<ポックル>

ランク D級下位

念能力 無し

念系統 現在不明

<ハンゾー>

ランク C級中位

念能力 無し

念系統 現在不明

<ゲイリー・リッジウェイ>

ランク D級上位

念能力 無し

念系統 現在不明

<ジョン・ウイリー>

ランク B級上位

念能力 ウェーピングライト 死招乃右

右拳に大量のオーラを込めて繰り出すストレートパンチ。

非常に単純な技だが、小型ミサイル並の威力を誇る。

念系統 強化系

<ヒソカ>

ランク B級上位

念能力 現在不明

念系統 現在不明

<イルミ（ギタラクル）>

ランク B級上位

念能力 （仮称）針で刺したものを操作する能力

針を刺したものを操る能力。相手に自白を強要したり、暗

示を与えることもでき、また、自分に刺して顔を変えることもできる

念系統 操作系

<ネテロ>

ランク A級上位

念能力 現在不明

念系統 現在不明

閑話 霊界ランク・念能力（後書き）

矛盾点が出次第修正いたします。

念能力にはウィキペディアから、引用しております。

ジョン・ウィリー・・・ぶっちやけウボオーギンと被ります。

第十三話 試しの門

ーパドキア共和国ー

パドキアに着いた一行は、電車にのりゾルディック家を目指していた。電車揺られ、窓からみえるククルーマウンテンは、不気味な雰囲気をかもし出していた。

駅に到着すると、聞き込みを開始した、すると、駅から出てすぐの八百屋のオバサンが、ゾルディック家観光バスのお話をしてくれた。ゴン達は、バスに乗り込んだ、バスの中には一般の観光や客に混じり、明らかにカタギでは無い人物達も乗っていた。

バスガイドは、ゾルディック家の説明をし、ゆつくりと目的地に進み到着した。

「ここが正門です、別名黄泉への扉と呼ばれております。

入ったら最後生きて出られ無いとの理由です、中に入るのは看守室横にある小さな扉を使いますが、これから先は、ゾルディックの私有地になりますので見学できません」

ガイドの説明を聞き終わると、辺りを見渡して見る、高さ50メートルを越える巨大な壁が、辺り一帯を囲っており、目の前の門は、巨人が住む家の門の如く、重厚な雰囲気だ。

ギタラクルから聞いたゾルディック一族の住むククルーマウンテンの頂上は、はるかまだ先立った。

ゴンは、ガイドに質問をした。

「ねエ、ガイドさん中に入るのはどうしたら良いの？」

「んーボウヤ、私の説明聞いてまして？中に入れば二度と出てこれません、殺し屋の隠れ家なのよ！」

ガイドと話していると、バスの中にいたカタギでは無い者たちが、

看守室の扉を壊し、看守の胸ぐらをつかみ持ち上げ、看守から鍵を奪い取ると小さい扉から中に入っていた。

「おじさん、大丈夫？」

ゴンは、看守に近づいて、心配そうに見つめる

「いててて、大丈夫だよ、あーあ、またミケがエサを食べちゃうよ」
「えっ？」

看守が、不穏な事を言うと、小さい扉が、内側から開き、熊よりも大きい何らかの動物の腕が、先ほど入っていた者達であろう、入った時と同じ服装をした骸骨を外に捨てるように落とし、扉から腕を引っ込めた。

「わぁー！！！！」「ひいー！！！！」その様子を見た一般観光客達は、われ先につとバスに向かって走り出した。

今まで、人間の死を身近にあるとは感じられなかった人達にインパクトが強すぎたようだ。

「えー、ご覧のいただきましたでしょうか？一歩中に入れば、あの通り無残な姿を晒すことに・・・」

「いいからそんなこと！！早くバスを出してくれー！！あんたら何してんだ、早く乗ってー！！」

「あつ、えーと行って良いですよ、俺たちココに残ります」

ザッワールド！！ゴンの一言で、観光客・ガイド・看守の時間は一瞬止まった・・・そして、時は動き出す・・・

バスは、ゴンたちを置いて町に戻って行った。

看守室に招待され、色々話をした、キルアと友達という話、扉から出てきた腕のミケの話、看守の本当の役割は掃除夫という話、そして本物の門の話

レオリオが、巨大な門を開けるのに挑戦するが、押しても引いても左右に開けようとしても、扉は全く動かなかった。

単純に力が足りていないと看守のゼプロさんは言い、お手本を見せてくれる事になった、上着を脱ぎ呼吸をととのえたと、ゼプロさんの筋肉がパンプアップされ一流のボディービルダーのような腕になった。

ギイゴオオン！！重い音を立てながら扉は開いていったが、すぐに閉じていった。

「ふうー、ご覧の通り扉は自動で閉まるから、開いたらすぐ入るとだね”試しの門を開けて入ってくる者には攻撃するな”ミケにはそう命令されてるんですよ、1の扉は片方2tあります」

「2ト・・・そんなもん動かせーねぞ普通・・・1の扉はだと・・・？」

「ええ、ごらんなさい7まで扉があるでしょう？」

「ああ」

「扉が1つ増えていくことに重さが倍になって行くんですよ」

「倍!？」

「力を入れれば、その力に応じて大きい扉が開く仕組みです。ちなみにキルア坊ちゃんが、戻ってきたときは3の扉まで開きましたよ」

「3の扉・・・ってことは12t!？」

「・・・16tですよゴン君；」

「うーん、気に入らないなー、おじさん鍵貸して友達に会いに着ただけなのに、試されるなんてまっぴらだから、俺は侵入者でいいよ」

gonは、ハンター試験のハンゾー戦の時のように、意地でも試しの門から入ろうとはしなかった。そこで蔵馬が・・・

「ゴン君、キミは友達の家に玄関からはいらないんですか？本当にキルア君と友達なら正面から行きましょう、地域によって色々な風習があるんですよ、俺の地元（魔界）でも似たような所はありません、時間もあることだし試しの門から堂々とキルア君に会いに行きましょう」

「私も同感だ、1の門から入ることにしよう」
「ゴン」

三人の説得もゴンは聞かず、ゼプロさんに手を向け鍵を要求していた。

ゼプロは、キルアの友達をミケのエサにはする訳にはいかない、看守室に戻り執事に電話を掛けたが、おしかりを受けただけだった。

ゴンは、俺にも話をさせてくれとゼプロにたのみ、執事室に又電話を掛けてもらう、しかし、「キルア様には友達などおりません」と電話を切られてしまう、すぐさま電話を掛けなおすが「余計な外敵から主を守るのが執事の務め、悪いがお引取り願おう」と又切られてしまった。

ゴンは、キレていた、釣竿を振りかぶると門の頂上にハリを引っ掛け、よじ登ろうとした。

ゼプロは見ていられなくなり、鍵を渡す、しかし自分も着いて行くといった、もしかしたらミケが自分の事を覚えていて、攻撃をしてこないかもしれないと、ほぼ100%殺されると付け加えて。

ゴンは、ゼプロのその言葉に落ち着きを取り戻した。

「それは、ダメだよ、そこまで迷惑は掛けられない」

「いいえ行きます、残っても同じことですから、いずれにしろキルア坊ちゃんの友達を見殺しにしたらもう、坊ちゃんに合わせる顔がありません、貴方たちが死ねば、私も死にます」

「わかったよ、ゴメン、おじさんのこと全然考えてなかったね」

（良い子だ・・・芯が厚く、仲間を信頼し、他人のために私憤をおさめる優しさを持っている）

「ゴン君、もう一度試しの門を開けます、今度はミケを正面から見てください」

ゼプロはゴンに、そう言いながら試しの門の前にたった

「ゼプロさん、ちょっと俺に開けさせてもらえませんか？」

蔵馬はゼプロに言っただけで門の前に立った

「構いませんが、大丈夫ですか？」

「おい、蔵馬さっきの俺を見ただろ、お前じゃ開かねえよ」

「ゼプロさんに任せた方が良い」

「蔵馬開けるの!？」

「まあー見ていて下さい」

スゴオゴオオオ!! 蔵馬が扉に手をかけ力をこめると、大きな音を立てながら扉が開いていく、1の門2の門3の門4の門

「おお! まじかよ蔵馬!!」(俺の立場が・・・)

「なっ!」(何者なんだ!? 蔵馬)

「すごいや!!」(すごいや!!)

「ほおーまさか4の門を開けるとは・・・」(彼等なら、もしかして・・・)

「でわ皆さん中に入りましょうか」

一行は、扉をぐくり辺りを見渡した、月明かりに照らされた森の中遠くにそびえたつククルーマウンテン、普通ならキレイだと思うこの景色も今は、不気味に感じた。

ゼプロはミケを声をだし呼んだ(呼ばなくても来るけど)フーフーコー、藪の中から巨大な犬がノシノシと歩いてきて、ゴン達の前に座りこみ、じっと一行を見つめていた。

「ゴン君・・・分かったかな? あれが完璧に訓練された猟犬ってヤツですよ。ゴン君・・・こいつと戦えるかい?」

「いやだ、怖い絶対戦いたくない」

(ふっ、本当に素直な良い子だ)

「よし、じゃあこちらにいらへどうぞ、すぐ近くに使用人の家があります。まあ泊っていきなさい」

一行は使用人の家にたどり着いた、そこはログハウスのような建物だった。入り口の扉を押して入るように言われるが、扉は軽く押しただけでは、開かなかった。

「片方200キロあります、常に鍛えてないといけませんからね、さあ入ってみてください」

中に入ると、スリッパは片方20キロ、お茶を出されたが湯飲み

20キロ家の中のものとは全て通常のものとは違う、重いもので出来ていた。

「4人とも観光ビザでこの国に？」

「ええ」

「そうですね、じゃあこの国に居られるのは長くても一ヶ月ですね、もしよろしければ、この家で特訓しませんか？君達の若さがあれば、あるいは一ヶ月で1の門を開けられるかもしれませんが、蔵馬君は4の扉を開けていますが、自分で開けないと納得いかないでしょう？」

「試されるのは不本意でも」

「他に方法が無いのなら」

「やるしかねーな！よし分かった！世話になるぜ！！」

そう3人が言うとゼプロは、なにやらベストとズボンを持ってきた。

「寝るとき以外はコレを着て、まずは上下で50キロからはじめましょう、慣れたら徐々に重くしていきましょう」

「そーいや蔵馬ー？お前はどやって鍛えたんだ？」

「そうだ！蔵馬のトレーニングおしえてよ」

「そうだな、良かったら訓練メニューを教えてくださいませんか？」

「いいですよ、ただ、うまい食事と適度な運動ですけどね」

「まじかーそれだけで！？」

「本当にー！？」

「それは、是非ともお願いしたい」

12週間後ー

ギオオオオンー！ゴンとクラピカは1の門を開けるだけでは無く2の門まで開けていた。ソレを見てゼプロは

「いやー驚いた、まさか2週間で2の門を開けるとは、蔵馬さん何をしたんですか？」

「ただ、うまい食事と適度な運動ですよ」

蔵馬は、にこやかにゼロに答えた。

「うまいー！？あの毒みてーな食事がか！？」

「適度！？地獄だったあれは・・・」

「うゝもうアレは食べたくないや、ミトさんの食事が恋しいな・・・」

「

（うゝ、うゝむ、大変だったんだねゴン君たちは・・・だが、この4人なら屋敷を見つけ出すことが出来るのかも知れない）

第十三話 試しの門（後書き）

蔵馬の訓練の毒のような食事ってどんだけマズイんでしょうね？

第十四話 ククルーマウンテン

試しの門を開けた翌日、4人は使用人の家の前でゼプロに、お礼を言っていた。

ゼプロは、ゴン達に屋敷に行くには道なりに山に進んでいけばあると教えた。

（しかし、本当に試しの門を開けられるとは、蔵馬君は最初から4の扉を開けるし、ゴン君クラブ力君も2の扉を開けレオリオ君に關しては3の扉を開けていた。彼等なら屋敷につけるんじゃないかな）

使用人の家を出て、山に向けて一本道を暫く歩いていくと、小さな門がありそこには一人の執事服を着た一人の女の子がいた。

彼女はゴン達に、ココは私有地だから出て行けといった。 gon は試しの門から入ってきたし電話もしたと答えたが、女の子は室自室から許可を得ていないといい通さない、gon が許可をどうやれば貰えるかと尋ねると。

「さあ？許可した残例が無いから分からない」

つと返してきた、gon は「だったら無断で入るしかない」そう言うって足を踏み出した。

バキッ！門を越えようとしたgon に、女の子は、先端に鉄球が付いたステッキでgon の頭を殴り飛ばした、蔵馬、レオリオ、クラブ力が構えをとるが、それをgon は「手を出しちゃダメだよ、俺に任せて」と制した。

「俺達キミと争う気は全然無いんだ、キルアに会いたいただけだから」理由が何であれ関係ないの、私は雇い主の命令に従うだけよ」

そういつて、女の子は門の前から動こうとはしなかった。

gon は、門を越える為に踏み出す、女の子は通らせないように殴る・・・何度も何度も倒れては起き上がり倒れては起き上がるgon

に、女の子は殴りながら喋った。

「もう、やめてよ……もう来ないで！！いい加減にして！！無駄なの！！分かるでしょ！！あんた達も止めてよ仲間な……」

女の子に言われるも、3人は動かない真剣な目で、ゴンと女の子を見つめる。

「なんでかな、友達に会いにきただけなのに、キルアに会いたいだけなのに、なんでこんなことしなきゃいけないんだ！！」

gon は、コブシを握りしめ、飛びこんだ、女の子はゴンの気迫に押され後退してしまった。

「ねエ、もう門はくぐったよ、殴らないの？」

gon に言われ、女の子はステッキに力を込めるが、ゴンの真っ直ぐな目を見ると、ステッキに入れる力が抜けていく……

「お願い……キルア様を助けて」

パンっ！女の子が喋り終わると同時に銃声が鳴り響き、頭から血を流しながら倒れた。

「全く、使用人が何を言っているのかしら」

白いドレスを着て、顔を包帯でまき目にバイザーを付けた婦人と、黒髪で、和服日本人形のような子が現われた。

婦人は、ゴン達にキルアからのメッセージがある、そのまま伝えると言った。

「来てくれてありがとう、すげーうれしいよ、でも今は会えないゴメンな」

婦人がメッセージを伝えると、自己紹介を始めた、私はキルアの母、隣にいるのはカルトット、 gon は反応せず、倒れた女の子に向かい歩いていった。

レオリオが抱き起こし診断して、蔵馬が傷に薬草を塗りこんでいた。

女の子は気絶しているだけで、とくに問題は無いようだ。

「キルアが俺たちに会えないのはなんですか？」

gon は婦人に問いかけた。

「独房に居るからです」

婦人は答えた。

「キルは私を刺し、兄を刺し飛び出しました、しかし今は、反省し自ら戻ってきました。今は自分の意思で独房に入っています、ですからキルが、いつそこから出てくるからは……」

と言ったところで、婦人のバイザーのランプが消えた。

「まあ、お義父様だったら！！なんで、邪魔するの！！だめよ！！まだ、つないでおかなくちゃ！！」

婦人は、急用が出来たとカルトを連れて踵を返し戻ろうとしていた。

「まって下さい、俺たちあと2週間位町にいます。キルア君にそう伝えてください」

「分かりました。言っておきましょう、それでは……」

婦人は、どんどんと森の奥へと帰っていった。カルトは少しその場に残り、ゴン達を睨みつけた。

婦人たちが去って暫くすると、女の子が目を覚まし、執事室に連れて行くといった。執事室の館直通の電話をつかい、ゼノ様が電話に出ればあるいはと……

女の子は、ゴン達を連れ森の中を歩いていった、暫く薄暗い森の中を歩くと、大きな屋敷が見えてきた、屋敷の前には執事服を着た5人の男たちが立っており、ゴン達が近づくと頭を下げた。

―執事の館―

館に入ると、ゴン達はロビーに案内されてソファーに座った、女の子はゴン達にお茶を出し、男の執事の横にたった。

ゴン達の向かい側の椅子には、執事の一人が座りゴン達に、謝罪をいれ、キルアが、この屋敷に向かっていているという事を伝え、女の子にやられたゴンの傷を治療した。

ゴン達は喜んでいたところに、正面に座った執事が、ただ待って

いるだけだと退屈で時間が長く感じられるので、ゲームでもして時間を潰しませんか？と問いかけてきた。

執事は1枚のコインを取り出すと、コインを指で弾き、左右の手を交差させながらキャッチした。

「コインはどちらのてに？」

「……左手」「……」

「ご名答、では次はもっと速くいきますよ」

にこやかに執事が、そう言うつと先ほどより速く手を交差させキャッチした。

「さあどちら？」

「また左手」

「すばらしい」

執事達は、ゴン達に向け拍手をした。

「じゃ、次は少し本気を出します」

ビュオオオ！！交差する手が霞むほど複雑に動きコインをキャッチした。

「さあ、どっち？」

「んゝ自信薄だが……多分右……」

レオリオは、自信なさげに顎に手を当てながら答えた。

「私は……キルア様を生まれた時から知っている、僭越ながら親にも似た感情を抱いている……正直なところ……キルア様を奪おうとしている、お前等がにくい」

執事は、睨みながらゴン達に聞いた

「……」

「さあ……どっちだ？答えろ」

「左手だ」

クラピカが答えると、執事は左手を差し出し握っていた手を開いた、そこにはグヤグヤに握り潰されたコインがあった。

「奥様は……消え入りそうな声だった、断腸の思いで送り出すのだろう……許せねエ」

執事は新しいコインを出すとまた喋りだした。

「キルア様が来るまでに結論を出す。オレはオレのやり方で、お前等を判断する。文句は言わせねエ」

座っている執事以外の男執事4人が懷から、ドスを構え、その内の一人が、執事の女の子の首にドス突きつけた。

「いいか？一度間違えたらそいつはアウトだ、キルア様が来るまでに4人ともアウトになったら・・・キルア様には4人は先に行ったと伝える、2度と会えないところにな・・・」

「キルアは」

「黙れ、てめエらは、ギリギリのところで生かされているんだ。オレの問いにだけバカみてエに答えてろ」

ギョオオオオ！！先ほどの速さ以上のコインキャッチだった。

「どっちだ？」

（わからない・・・）

「モタモタすんじゃねエー3秒以内に答えろ！おいソイツの首カッ切れ！」

ゴン達が答えないと、執事は、女の子を取り押さえている執事に命令をした。

「待て！！左手だ！！」

「俺は右手です」

「オレも右手」

「私もだ」

急いで答えを言ったゴン達、レオリオだけが左と答えた。

「まず、一人アウトだ」

パシユ！残像すら残らないほどのスピードでコインがキャッチされる。

「どっちだ？」

「俺は左手です」

「私は右手だ」

「じゃあ俺は左手」

執事は左手を開いた。

「コレで又一人アウト残りは2人・・・いくぜ」

執事がコインを指で弾くとゴンが待ったをかけた。

「なんだ？ただの時間稼ぎなら一人ブツ殺すぞ」

「レオリオ、ナイフを貸し」

gonはレオリオにナイフを貸してと、 gonは先ほど治療で貼られている左目ガーゼを剥がしながら、ナイフを受け取り、晴れ上がったまぶたの上を自ら切り裂き、中に溜まった血を貫き、傷口にテープを貼り両目が見える状態にした。

「よし、OKよく見える！どんと来い！」

執事は先ほど同じスピードでコインをキャッチした。

「どっちだ？」

「「左手！」」

「・・・やるな、じゃこいつはどうだ」

執事は立ち上がると、女の子を押さえていない2人の執事を近くに呼んだ。

ビュウオオオ！！三人の手が交互に交差し複雑に、そして速く動いた！

「さあ・・・誰が持っている？」

「ニッ！後ろのこつちの人でしょ？」

そう、答えるとゴンの後ろに立っていた執事は手を開いた。パチパチパチ！執事達は一斉に拍手をした。

「すばらしい！！」

ゴン！入り口の方からキルアの声が聞こえてきた。

「キルア！」

「いやー少し悪フザケが過ぎました。大変失礼いたしました。しかし、時間を忘れて楽しんでいただけましたでしょ？」

そう執事に言われ、レオリオは自分の腕時計を覗き込んだ。

「あ・・・もう、こんな時間がたってたのか、いやーあんだ迫真の演技だったぜ」

レオリオが執事にそう話していると。キルアが走ってやってきた。

「ゴン！！蔵馬！！えーっとクラピカ！！リオレオ！！」

「レオリオ！！」

「ついなか？」

こうしてキルアと再開した一行はククルーマウンテンを後にした。

第十四話 ククルーマウンテン（後書き）

ココのところ蔵馬喋ってないなー、天空闘技場からはメインにしていきたいと思います。

第十五話 天空闘技場

ーパドキア共和国ー

キルアと再開したゴン達は、今後について話をしていた、ゴン達が観光ビザで滞在していたとキルアは聞くと、ゴンは、やるべき事が終わらないとハンターライセンスは使わないと答えた。

キルアにやることって何？と聞かれゴンはお世話になった人達にあいさつ、カイトに会って落し物を返したい、そして懷をあさりハンター試験のときヒソカに渡されたプレートを出した。

「かくかくちかじかで、渡されたプレートをヒソカに顔面パンチのおまけつきで叩き返す！！そうしないうちは絶対、ハンター証は、使わないって決めたんだ！！」

勢い良く答えたゴンに、キルアはヒソカの居場所を知っているか尋ねたところ・・・知らなかった様だ。

「私が、知っているよゴン」

みかねて、クラピカが答えた、レオリオに何故知っているか聞かれたところ、本人に聞いたと答えた。

「前から聞きたかった事だが、最終試験のときか？」

「ああ、最終試験のときヒソカに囁かれたのは”クモについて”クモは旅団のシンボルだ、ゆえに旅団に近いものはヤツらをそう呼ぶ。ソレを知っていたヒソカの話に興味があつてな、その後、講習が終わった後に聞いた」

「なるほどな」（プライドの高いお前が、甘んじて敵の試合放棄を受け入れた理由が分かったぜ）

「ヒソカは”9月1日ヨークシンシティで待っている”と」

「・・・」

「9月1日は半年以上先だね」

「ヨークシンシティーで何があるの？」

「世界最大のオークションがある！」

「そうだ9月1日から10日までの間、世界中からお宝が集まってくる場所だ」

「旅団が来るのかな？」

「かもな、少なくとも関わりの深い連中はごまんと来るだろう、という訳で、その日ヒソカは、ヨークシンシティーどこかに居るはずだ、見つけたら連絡するよ」

そう言うつと、クラピカは別れを告げる。

「キルアと再開できたし私は、区切りがついた。オークションに参加するにも金が必要だしな、これからは本格的にハンターとして、雇い主を探す。」

「そうか・・・さて・・・俺も故郷へ戻るぜ、やっぱり医者への夢は捨てられねえ、これから帰って勉強しねえとな」

クラピカとレオリオはゴン達に別れを告げた、又再開をする事を約束して

「9月1日ヨークシンシティーで！！」

ー空港ー

クラピカとレオリオを乗せた飛行船は大空に飛び立っていった。

「あつという間に3人なっちゃったね」

「さて、どーする？」

「どうするって、訓練に決まってるだろ」

「え？なんの？遊ばないの？」

「今のゴン君では、ヒソカに一発を入れるのは難しいですね、試しの門を開けた時の食事と軽い運動メニューを倍にすれば2ヶ月もあれば可能ですよ？」

「ゲッ！あれはもういいよ、他に無いかな？」

「フーン、ゴンが嫌がるってどんな特訓したんだ蔵馬？」

「わーわー！思い出さないでよキルア！！」

「おっ、おう；」（本当に何やつたんだ蔵馬？）

「フフフ、いった通りの事しかしてません」

笑顔の蔵馬の顔を怖いと思った二人だった。

「あーそういえば、二人とも金はもってる？」

「・・・うーん実はそろそろヤバイ」

「俺も無いですね」

「オレもあんまもってない」

「そこで一石二鳥な場所があるんだ」 天空闘技場 ”」

3人の目的地が決まった天空闘技場！！地上251階、高さ991M世界第4位の高さを誇る建物だ、3人は有り金全てを使って飛船にのり天空闘技場に向かっていった。

ー 天空闘技場 ー

飛行船を降りて闘技場に向かうと、長蛇の列が出来ていた。入り口前の受付に着くと案内係に申し込み用紙が渡され、必要事項を記入し、3人は建物の中に入っていた。

中に入ると、8個のリングが並んでおり、熱気あふれるなか激しい格闘が行われていた。

「あつかしいな〜ちつとも変わってねーや」

キルアが呟いた

「キルア君はここに来たことがあるんですか？」

「ああ、6歳のときに無一文で親父に放りこまれた」 200階まで言ってこい” ってね、そのときは2年かかった」

（6歳のときとはいえ・・・キルアでもそんなに掛かったのか）
「ヒソカクラスと戦うなら、それ以上の階の相手と戦わなきゃダメだ、急ぐぜ」

ゴン達が会話をしているとアナウンスが流れ、ゴンの番号を呼んだ。

「あ、おれだ、キンチューしてきた」

緊張しているゴンにキルアがアドバイスをした・

「お前、試しの門クリアしたんだろ？ならもうさただ思いつきり相手を押してみろよ」

「え？本当に？」

試合が始まると、ゴンの対戦相手はゴンの4倍はある大男だった、男はゴンに向けてダッシュし殴ろうとしたところ・・・ドン！！対戦相手は観客席の2階まで飛んでいった！

「2963番キミは50階に行きなさい」

ゴンの勝ちが宣言され、50階に行くように言われた・

「なー蔵馬？ゴンのヤツ試しの門をいくつ開けたんだ？1の門開けただけじゃ、あんなに飛ばないと思うんだけど」

「ゴン君は2の扉まで開けていましたよ、クラピカさんも同じ2の門、レオリオさんは3の門まで開けていましたよ」

「マジで、良くそんな短い間で開けられる様になったね、レオリオなんてオレと一緒にじゃん！ちなみに蔵馬は、いくつの扉を開けたんだ？」

「俺は、4の扉まで開けましたよ」

「げっ、まじかよ蔵馬って俺より力が強かったんだ」

「鍛えている年数が長いだけですよ、でわ俺の番がきたようなので行ってきますね」

「おっと、オレも呼ばれたか、さーて今回は200階まで行くのにどれだけかかるかな」

蔵馬もキルアも危なげなく勝利し2人とも50階行きが決定した、そんな中、離れたリングでゴンたちと同じくらいの、空手胴着を着た

少年も50階行きを決めていた。

第十六話 念

― 天空闘技場 ―

一階で試合を終えた三人は、他の参加者達と一緒にエレベーターに乗り、エレベーター係りの女性に天空闘技場の説明をされながら50階に向かつていった。

チン！50階に到着すると同じエレベーターに乗っていた胴着を着た少年が話しかけてきた。

「押忍！自分はズシと言います！あなた方は？」

「オレはキルア」

「俺は蔵馬です」

「俺はゴンよろしく」

四人は挨拶を交わしながら、とことこと歩いていた。

「さっきの試合拝見しましたいやーすごいっすね！」

「なに言っただよ。お前だつて一気にこの階まで来たんだろ？」

「そうそう、いっしょじゃん！」

「みんな、若いのに有望ですよ」

「いやいや、自分なんかまだまだっす！ちなみに3人の流派はなんですか？自分は心源流拳法っす！」

3人は、ポカンつと顔を見合わせ答えた

「「別に・・・無いよな（ですね）」」」

「ええ！！誰の指導もなくあの強さですか・・・ちよっぴり自分シヨクっす、やっぱり自分まだまだっす」

会話をしながら歩いていると、拍手をしながら近づいてくる、黒髪メガネのズボンからシャツの一部がはみ出た男の人が近づいてきた。

「ズシ！！よくやった、ちゃんと教えを守ってたね」

「師範代！押忍！光栄つす、師範代またシャツが」

「あつゴメン、ゴメン」

師範代と呼ばれた男の人は、慌ててズボンにシャツをしまい込んだ。

「そちらは？」

「キルアさんにゴンさんに蔵馬さんす！」

「はじめましてウイングです」

「『オスツ』」

「まさか、ズシ以外の子供が来ていると思わなかったよ、キミたちは何でここに？」

「えーと強くなる為なんだけど、俺たち全然力なくて、小遣い稼ぎを兼ねてんだけど」

「そうか・・・ここまで来るくらいだから、それなりの腕なんだろうけど、くれぐれも相手と自分の相互の体を気遣うようにね」

そういつて、5人は賞金受け取り所まで歩いていった。

ファイトマネーは152ジェニー1階は勝っても負けてもジュース1本のギャラが貰える、ただし、次の階から負けると賞金はゼロ！50階では勝利すると5万ジェニー手に入る。

天空闘技場では上に行けば行くほど高い賞金が手にはりるシステムになっている。

150階選手控え室1

1階でダメージを受けずに勝ち上がった4人は、本日もう1試合組まれる事になっており、控え室で自分の順番を待っていた。

アナウンスが組み合わせが発表された

「キルア選手対ズシ選手」

試合が開始され、キルアは、ズシの目に映らないスピードで背後に廻り首に手とうを打ち込んだ、ズシはダウンしたが、直ぐに起き上がった、キルアは手加減をし過ぎたと思い込み、今度は、かする

だけで悶絶するような一撃を放ちズシを吹き飛ばすが、ズシはかなりのダメージを受けたが審判にダウンを取られる前に立ち上がる。キルアが疑問に感じて動きを止めると、ズシが構えを取る瞬間！ズシはら異様な圧迫感が発せられキルアは後ろに飛びのいた！「ズシ！！」観客席から試合を中断させる大声をウイングが出し、ズシは構えを解く、その後キルアの攻撃でポイントが溜まりキルアのTKO勝ちが決まった。

試合を終えキルアは60階にたどり着いた、そこには、試合を終えたゴンと蔵馬がまつており、キルアは2人に試合のことを話した。ズシは才能はあった、弱くはない、しかし、現状ではキルアが楽に勝てる相手だったが、倒し切れなかった、そしてズシが構えた瞬間に兄貴

イルミ

に感じたイヤな感じを話した。

そらが何かは分からなかったが、何らかの技だと考えた。

キルアが60階に来る前、50階の廊下でウイングが「レンはまだ使っな」お前の目的ははずか先に、あるのだろう？この塔の最上階にと話しているのを聞いていた。

3人の目標が決まった！レンの秘密！そして最上階！！

― 天空闘技場 ―

目標が決まった3人は、破竹の勢いで勝利し、3日前に参加以来6戦連続無傷の無傷の勝利！ついに100階に到着し個室をゲットした。

とどまり事を知らない3人は、一週間という短い時間で150階にまで到着していた。

レンの秘密は、ズシに聞いたほうが早いと途中ゴンに言われ3人

は、今だ50階で戦っているズシに元へ向かう。

50階に着いて早々、ズシを発見し、レンについて聞いた。

「レン」はヨンダイギョウの1つつす、ヨンダイギョウとはシンを高めシンを鍛える全ての格闘技に通じる基本つつす。テンを知りゼツを覚えレンを経てハツに至る！要するにこれ全てネンの修行つつす！！」

「わかんねーよ！！」

キルアとゴンにはチンプンカンプンだった。蔵馬は、己の経験から独自の拳法の奥義だろうと考えていた。

そこへ、ウイングが歩いてきて、何時から貴方は人に物を教えるほど修めたのかとズシを諷めた。

キルアは、ウイングに、すぐネンについて知りたいと訴えた、自分の兄貴の強さの秘密に近づきたいと、ウイングが教えてくれないなら自分で調べる、でも半端に知るよりキチンと理解したい、ウイングさんが教えてくれれば下手に我流で覚えようともしないと断った。

ウイングは、キルアのその言葉を了承し、ネンについて教える為に、自分の宿に3人を招待した。

部屋に到着すると、ウイングは説明を始めた。

「心を燃やす」燃」のこと、すなわち意思の強さ、四五行とは、意思を強くする過程の修行」点」で心を1つに集中し自己を己を見つめ目標を定める」舌」でその思いを言葉にする」練」でその意思を高め」発」でそれを行動に移す」

説明を終えたウイングはキルアにズシの「負けない」という鍊に気圧されたのだといい、実演してもらったことになった。

「点」構えをとり集中」舌」キミを殺すと発言」鍊」その瞬間！ゴンは構えをとり、キルアは天井の隅まで飛びのき、蔵馬は手に薔薇を持った。

最後にウイングが今は「点」を極めることに励むようアドバイス

をし、ゴン達は礼をいって部屋を後にした。

次の日の夜には、3人は揃って190階の試合を一発クリアしていた。

1 天空闘技場200階

200階に到達した3人、突如ただまっすぐの今までと変わらない天空闘技場の廊下が、まるで魔物がすむ密林の様に感じられた。

気圧されながら進んでいくと、2人の足が止まったコチラに向ける強い殺気のせいで足が進まないのだ、そこへ女性職員があらわれ、200階の受付案内をし始めた、今夜24:00までに200階クラス参戦の受付をしないと、登録不能になってしまうこと、200階クラスには現在173名の選手が待機していること、このフロアから武器の使用が認められること、ファイトマネーがなくなることが告げられた。

女性の後ろから、ゆっくりとヒソカが歩いてきて、女性の横で立ち止まった、そしてゴン達に向け

「君達が、このフロアに踏み入れるのはまだ早い」

そういつて廊下に座りこみ、殺気を飛ばしてきた。

「通さないよ　ってか通れないだろ？蔵馬は通れるだろうけど君もまだ早い？」

重いプレッシャーがヒソカから放たれてこれ以上2人は進めないようだ、そこにゴン達の後ろからウィングが現われた。

「無理は止めなさい、本当の念について教えます。だからひとまずこっから退散しましょう」

現在20:20分

「もし・・・今日登録できなかったとしたら俺たちどうなるの？」

gonは女性職員に問いかけた。

「ゴン選手と蔵馬選手は、また1階から挑戦しなおしていただけます。ただ・・・キルア選手は、以前登録を断っていらっしやいます

から、また未登録となりますと登録の意思なしとみなされ、参加自体不可能となってしまう」

キルアは、ウイングに聞いてみた

「ひとまず・・・引いて、0時までにココに戻ってこれるかい？」

ゴン達はウイングと見つめあいウイングは・・・

「君、次第だ」

現在 20:30

ーウイングの宿ー

ウイングは、本当の念について説明を始めた。

「念とは、体からあふれたすオーラとよばれる生命エネルギーを自在に操る能力のこと」

そして、ウイングは内に秘めている力、眠れる能力を目覚めさせる2つの方法を提示してきた。

「ゆっくり起こすか、ムリヤリ起こすか」

ゆっくり起こした場合、飲み込みが早く、努力を惜しまなかったズシの場合で約半年、ムリヤリ起こした場合は君達次第ですが、すぐにでも、しかしムリヤリ起こした場合は死ぬことだってある。

「俺たちは0時までにはソカの念の壁を突破したいんだ！」

「分かりました、ゴン君、キルア君、上着を脱いでこちらへどうぞ、そして背を向けてください」

ウイングに言われ、2人は、上着を脱ぎウイングのそばに近寄せ、ウイングは2人の背に手を当てると念を叩き込んだ。

ゴオオオオオ！！二人の体からオーラが噴水のように湧き上がる！ウイングにより全身の精孔が開かれ

で、ウイングによりオーラの留め方が説明されたと、二人は、自然体になりオーラを留める事に成功した。

「次は、蔵馬さんの番ですね、女性に服を脱げと言いつらいのですが、素肌に手を当てないで行けませんの申し訳ありませんが、脱い

でコチラに来てください」

少し、顔を赤らめながらウィングは言った。

「気にしないで下さい、俺は男なので」

「そうだよウィングさん！蔵馬は男だよ」

「そうそう、でもオレも最初まちがえたしな、蔵馬って、スゲー女顔だよな」

三人はウィングに男である事を話した。

「そ、それはすみませんでした、でわ時間も余り無いことですし、蔵馬君こちらへ」

（男性だったのですか、私も修行が足りませんですね、それより蔵馬君は、精孔が開いていないのにこのオーラ・・・何者なのでしょう
か？）

ウィングは、蔵馬の背に手を当て念を発した、瞬間、蔵馬からゴンやキルア以上のオーラが噴出した、

例えるなら、ゴン達を水溜りの水とすると、蔵馬はプールの水、まだ念を習っていないのに脅威的だった、しかも、蔵馬は、一瞬でオーラを体に留めることに成功していた。

そして、ウィングは、3人を自分の前に立たせると、悪意を込めたオーラをぶつけた！3人は無事に耐え切りつた。

「おめでとう、キミたちなら先ほどのオーラを突破できるだろう、しかし、戦うのは2ヶ月我慢して下さい、その間に出来る限りのことは教えましょう、さあ、もう行きなさい受付時間が迫っていますよ」

ゴン達は、200階の受付をするために、エレベーターに乗り込んだ。

― 天空闘技場200階 ―

200階に到着しヒソカが居る通路を通る、今は纏をしているのでヒソカの悪意あるオーラに対抗できた。

「200階クラスへようこそ？洗礼は受けずにすみそうだね？キミが天空闘技場に参加した理由は想像出来る？ここで鍛えてからボクと戦うつもりだったんだろう？」

「まさか、そっちから現われるとは思わなかったよ手間が省けた」「ククク？纏を覚えた位でいい気になるなよ？念は奥が深い？」

そういうと、ヒソカは指先にオーラを集めスペードの形を作り、そこからドクロの形に変化させた。立ち上がりながらヒソカは、闘志むきだしのゴンに歩きながら喋りだした。

「はつきり言つて。今の君と戦う気は全くない？だが、このクラスで一度でも勝つ事が出来たら相手になろう？」

ヒソカが歩き去った方から、車椅子の男、一本足の義足の男、隻腕の男が現われた、

現在 23：35

ゴン達は、無事に受付をすることができた、その後受け付け嬢に200階クラスの説明を受け、ゴンはウィングとの約束を破り対戦申し込み書に必要な事項を書こうとしていた。

「・・・何か用？」

キルアは、自分たちの後ろに並んでいる3人組みに声を掛けた。
「いいや、オレ達も申し込みをしたいから並んでいるだけだよ」

申し込み用紙を見ると、対戦日の指定項目があった。

「ゴン、こいつらお前と同じ日に戦いたいらしいぜ」

「・・・」

無言で、男たちを見つめるゴン、薄笑いを浮かべる男たち。

「オレは、いつでもオーケーです」

ゴンは、指定日を、いつでもオーケーに印をし、受付に提出してから、ゴン、キルア、蔵馬の三人は、それぞれ200階クラスの部屋のカギを受け取り、各自自分の部屋に行った。

ゴン達の後ろにいた3人は、それぞれゴンと同じ日に戦えるように、申し込み用紙を記入して、ニヤけながらゴン達を見つめていた。

こうして、200階クラスに参戦することになった3人、ウィン
グとの約束を破って試合を組んだゴン初めての試合は、どうなるか！

第十七話 一人旅

― 天空闘技場 200 階ゴンの部屋 ―

受付が終わってから 3 人は、ゴンの部屋に集まって話をしようとしていた、カギを開けると、ホテルのスイートルームの様な豪華な部屋だった。

備え付けのテレビを見ると、ゴンの試合の対戦日が表示されていた。

< 戦闘日決定!! 225 階にて 3 月 11 日午後 3 : 00 スタート!

! >

「はやつ 11 日つたら、明日じゃねーか」

ゴンはオーラをみなぎらせながら

「たぶん、明日は勝てない、でも良いんだ。早く実感してみたいんだ。この力で、一体どんなことが出来るのかを」

「すまない、ゴン君、キルア君、薬草の残りが、試験のときでかなり減ってしまっているんだ、200 階に登録できたし、キリがいいから、2 ヶ月ほど薬草採取の旅に出かけたいんだ」

そう言くと、蔵馬は懷から、様々な瓶を出した。

「これは？」

「残っている、薬草ですよ、瓶のラベルに用途を書いているので、もし怪我をしたら使ってください」

「おーサンキューー! 早く帰ってこいよな」

「うん、ありがとう大切にに使わせてもらうね」

「ウイングさんに挨拶をしたら、今日のうちに準備をして行きますので、また 2 ヶ月後に会いましょう」

そういつて、蔵馬は二人に別れを告げ、部屋から出て行った。

ーウィングの宿ー

ウィング部屋にやってきた蔵馬は、薬草採取の旅に出ることを告げた。

「でわ、蔵馬君、気をつけて行ってきてください、点の練習は毎日続けてくださいね」

「はい、ありがとうございました、また2ヶ月後に会いましょう」
別れを告げ、点の修行は欠かさず続けるように言われた

ー200階某所ー

「やあ？どうしたんだいククク？何か話があるのかな？」

蔵馬は、ヒソカの元を訪ねた。

「ゴン君とココで戦うつつもりみたいだね、試験のときの約束だが、ゴン君とキミが戦い終わった後に、天空闘技場以外で戦おう」

「オーケー？楽しみにしているよ？」

蔵馬は用件を伝えるとヒソカの元を離れていった・・・

「ククク？ああ青い果実は何でこつも美味しそうなんだろうククク？」

ー天空闘技場ー

蔵馬は、旅に出る前に必要なものを天空闘技場で買い揃えようと、商店が立ち並ぶフロアに来ていた、まずは、ケータイショップに行き、防水、衝撃に一番強い機種で店員のオススメを聞きビートル07型を購入、その後非常食や水を購入、大きめなカバンも買い揃え、電腦ページをメクリ、今回の目的地ジャポン行きのチケットを購入した。

ジャポンは、蔵馬が居た世界の日本に似た文化があることから、帰る方法を探しながら薬草も集められると思ったからだ。

鞍馬は、飛行船乗り場にそのまま向かうと、ジャポン行きの飛行船に乗り込んだ。

ージャポンー

ジャポンに着いて、とりあえず街中を歩いてみることにする。そこには、現代の様に高いビルが建ちならんでいるが、歩いている人たちの服装は、着物などの和服の人達ばかりだった。

やっぱり、日本とは違うなっと、苦笑した。

全然知らないジャポンで、一人で情報収集や薬草探しでは2ヶ月では足りない思い、ハンター試験終了後にハンゾーから貰った名刺をカバンからだし電話してみることにした。

「お久しぶりです、ハンゾーさん、ハンター試験の同期の蔵馬です。ケータイを買って、今ジャポンに居るので、お電話させてもらいました」

「おー久しぶりじゃねーか！今どの辺にいるんだ？俺まだジャポンにいてな、修行がひと段落したところなんだ、良かったらジャポンを案内するぜ！」

相変わらず、テンションの高いハンゾーだった。

「ありがとうございます、いま飛行船から降りたばかりなので、オエドシティーのナリタ市に居ます」

「おーわかった、2時間くれエーで行けると思っからよ、どこか茶屋にでも入って待っていてくれよ」

「ええ、わかりました、丁度目の前に、良さそうな店があるので、そこでお待ちしていますよ、店名は枯山水です」

そう電話で話し、蔵馬は茶屋で休憩することにした。ジャポンの茶屋には日本の茶菓子等が、メニュー表に載っていた、この辺りは、日本と変わりがなかった。

二時間がたとうとしたとき、声を上げながら近づいてくるロンゲで侍の様な格好をした男がいた。

「おーまたせたな！」

手を上げながら男は蔵馬の向かい側の席に座った。

「！？」

「なんだよ、オレだよハンゾーだ、試験のときの服と違ったから分かんなかったのか？」

むしろ、毛のある所に気づかなかったとはいえない蔵馬だった。

冷や汗をかきながら蔵馬は、ハンゾーに話しかけた。

「え、ええ侍の様な格好をしていたので、気がつきませんでしたよ」

「まあな、流石に地元で忍びの格好で歩いてちゃ目立つからな、変装だよ、それより、久しぶりだな、ゴン達是一緒じゃないのか？」

「ゴン君たちは、今天空闘技場で戦っていますよ、ヒソカに一撃を入れるために頑張っています」

「げっ、ヒソカと戦うつもりかよー」

ハンゾーは頭に手を当てた。

「まあ、すぐに戦う訳では無いでしょうが、闘技場で戦うならヒソカも命を奪うことはしないでしょうから他で戦うよりは安全ですよ」

お茶を啜りながら、蔵馬は答えた。

「んで、お前さんは、何しにジャポンへ来たんだ？まさかオレに会いに来る為だなんてことは、いわねエーよな？」

「残念ながら、違いますな、今回は薬草探しと、ジャポンの文化について調べる為ですよ」

「おお、そうか、そうか、ジャポンは良い所だぞー、ハンゾー様特性ジャポンガイドブックを上げよう！ついでに薬草の方は、この巻物に書いてあるから見るといい」

そういうと、ハンゾーは懐からカラー印刷で”ジャポンガイド！ハンゾー特選100”と書かれた雑誌と古い巻物を蔵馬に差し出した。

「良いんですか？雑誌はまだしも、巻物は秘伝とかなにかあるんじ

やないですか？」

（雑誌もコレ自費出版しているのか？というか、いつも持ち歩いて
いるのだろうか？）

「かまわねエーよ、雑誌は、まだまだ自宅に大量にあるし、巻物は
流石に秘伝のはわたせねエーから、それは里で一般向けに販売して
るヤツでオレのお古だけどなアハハ」

「ありがとうございます、助かりましたよ、こんなに詳しく載って
いるものがあれば、調べ物も、薬草集めもはかどりますよ」

蔵馬とハンゾーが会話をしているとケータイの着信音が、ハンゾー
の方からなってきた。

「ちよつと、すまねエーな、電話ださせてもらうぜ」

ハンゾーは、電話を出すと、話をしだした、

「師匠一体なんっすか？今ハンターの同期と茶してるんですけど・
・ハイ、分かりました直ぐ向かいます」

電話していると、突然ハンゾーの目が鋭くなり、真面目な雰囲気
にで電話応対していた。

「すまねーな、会ったばかりで申し訳ないが、用事が出来ちまった、
また茶でも飲もうや、じゃあな」

「ええ、こちらこそ、いきなり尋ねてきて申し訳なかったです、ま
たお会いしましょう、雑誌と巻物ありがとうございます」

そう言うところハンゾーは茶屋から早足で出て行った。

ハンゾーと別れ、雑誌を元に、色々な所に蔵馬は出かけ、情報収
集をしていた。

しかし、元の世界に戻る手がかりは見つからなかった。

「ふーやっぱり、そう簡単には見つからないですね」

蔵馬は、独り言を呟きながら、今度は薬草を探しに山の中を探索
して行った。

12ヵ月後1

二ヶ月のジャポン滞在を終え、ハンゾーに帰る旨を電話で伝えようとしたが、電話が繋がらなかったため、ホームコードに留守電を入れ、蔵馬は、飛行船に乗り、ゴン達の待つ、天空闘技場に向かっていった。

第十七話 一人旅（後書き）

今回はオリジナルストーリーを書いてみました！ハンゾーの髪はカツラだったのでしょか？地毛だったのでしょか？

第十八話 正体

― 天空闘技場 ―

2ヶ月ぶりの、天空闘技場は出発した時と変わらず、熱気に満ち溢れていた。

帰ってきた挨拶を念の師匠である、ウィングさんに先に済まそうとウィングが泊っている宿に向かった。

ドアをノックして部屋に入ると、丁度、ゴン、キルア、ズシ、ウィングが揃っていた。

「ただいま戻りました、コレお土産です。召し上がってください」
蔵馬は、ジャポンのヘーアンシティー買ってきた、八橋をウィングに渡した。

「お帰りなさい蔵馬君、丁度いいしお茶でも飲みましょうか」
そういつてウィングは、お茶の準備をし出した。

「ねー蔵馬どこいったの？」

ゴンに聞かれ蔵馬が答えた

「ジャポンに行って来ましたよ、向こうでハンゾーさんに会って、ジャポンのガイドブックや薬草について書かれた巻物を頂いたので旅は順調でした」

キルアも蔵馬に質問をした。

「ハンゾーって、試験にいたハゲだろ？」

「いいえ、ハンゾーさんは、ハゲでは有りませんでした。むしろ口ンゲでビックリしましたよ；」

蔵馬は、冷や汗を流しながら答えた。

「マジで！？」

流石にゴンもキルアも驚いていた。

「ゴン君たちは、どうでした？」

今度は、蔵馬の方からゴン達の様子を聞いてみた・

「それがさあー、聞いてくれよ蔵馬、ゴンのアホがさ、200階受付した時のヤツらと試合した時に、コイツ纏解きやがって、まともに念の攻撃受けて、全治4ヶ月の怪我おったんだぜ！」

「むーそれは、反省してるよ、あ！蔵馬薬草ありがとっね！薬草を塗ったら1ヶ月で全快しちゃったよ」

「そうそう、蔵馬の薬草効果高すぎ！ヤバイ薬でも混ぜてるの？」

「いいえ、俺の薬草は、天然物100%ですよ、役に立ってよかった」

そこにウイングさんが、お茶をもって帰ってきた。

「そうですよ、ゴン君、念の恐ろしさは伝えていたはずですよ、もう無謀な事はしないで下さいね」

「うー反省しています」

「あーそれから、ゴンと戦ったヤツらは、そのあと全員叩きのめしてやったぜ」

キルアはコブシを握りながら、そういった。

「えーでも、隻腕の男の人は、いつの間にか、いなくなっちゃってたけど、キルア不戦勝だったじゃん」

「んーまあ、何か怖いものでも見て、にげたんじゃね？」

いい顔押して笑いながらそう言うキルアを見て、蔵馬は、何かやっとなと思った。

「色々大変だったみたいです」

ウイングが入れてくれたお茶をのみながら蔵馬はいった。

その後、暫く雑談し、ウイングから発の修行をすることを告げられた。

「発」これをマスターするれば、念の基礎は全てマスターした事になります。後は基本に磨きをかけ、創意工夫をもって、独自の念を構築していただけます」

それでは、説明しましょう、ウイングはホワイトボードに書き込みながら説明を始めた。

「発」とは、オーラを自在に操る技術、つまり念能力の集大成といえます。放出系・具現化系・強化系・変化系・操作系・特質系の6つのタイプに分かれています。そこで、大事なのは、自分にあった能力を見つけることです」

ウィングは、ウィンググラスを戸棚から1つ取り出し、ミネラルウォーターをグラスに注いでいき、窓際に有った観葉植物から葉っぱを一枚とり、グラスに浮かべた。

「水見式、心源流に伝わる選別法です」発の修行としてもコレをもちいます。グラスに手を近づけ、鍊を行う、その変化によって資質を見分けます」

ウィングが鍊を行うと、グラスの水が溢れ出した。

「水の量が変わる」のは強化系の証です。さあ4人も試してみて下さい」

ゴンがグラスに手を近づけ鍊をすると、チョロチョロと少し水が溢れた。

「ゴン君は強化系ですね」

ズシがグラスに手を近づけ鍊をすると、ゆらゆらと少し葉っぱが動き出した。

「葉が動く」ズシは操作系ですね」

キルアがグラスに手を近づけ鍊をすると、少し水が甘くなっていた。

「水が味が変わる」キルア君は変化系ですね」

蔵馬がグラスに手を近づけ鍊をすると・・・グラスの中の葉が成長し、奇妙な植物が生まれた。

「……！！？」

「ウィングさん、この変化は、何系統なのですか？」

蔵馬が、そうウィングに聞いてみると、ウィングを含め4人が蔵馬を見ながら口を開け目を見開いていた。

「け、獣耳っす！！尻尾も生えてるっす！！もふもふっす！！髪の毛の

毛も銀色になってるし、顔も全然変わってるじゃないっすか!!？
師匠!!水見式で試した本人が変化することってあるんっすか?」

驚きながらも第一声をだしたのは、大興奮のズシだった。

蔵馬本人も、いきなり自分が妖狐のすがたに戻っているとは思わずに、手を頭に乗せ耳を確認した。

（妖狐になろうとしなくても、鍊をすると妖狐の姿に戻ってしまいますのか!？）

「く、蔵馬君?その姿は一体なんですか?」

動揺したウイングだったが再起動し、蔵馬に離しかけた。

今だ、自分自身も混乱している蔵馬だったが、次第に落ち着きを取り戻し、素直に自分の正体についてはなした。

「信じられないかも知れないが、俺はこの世界の住人では無いんです。元の世界で事故があり、気がついたら、この世界に飛ばされていました。元の世界の俺は、魔族の中の妖狐でした。ある、事件で人間の胎児に憑依融合した俺は、人間の南野秀一として生きていましたが、ある植物の実を使用し妖狐に戻れるようになりましたが、戻るたびに生命力をかなり削るので、人間としてくらしていました。今回は鍊をしただけで、生命力を削られずに妖狐の姿に戻ったので、俺自身が驚いています」

「そーだったんだ!でも蔵馬は蔵馬じゃん!なにも変わらないよ」

「ゴン?俺が怖くは無いのか?この世界を調べて、この世界には魔族はいなかったんだぞ?」

「さっきも言ったじゃん!蔵馬は蔵馬!なにも変わらないよ」

「そーだぜ、蔵馬!むしろ俺んち家族の方が、人間離れしてるぜ」

「むしろ良いっすよ!もふもふしてるっす!!触っていいっすか!!」

ゴンとキルアは、気にしないと蔵馬に言い、ズシは・・・大興奮だ!!

「そうですね、姿が変わっても、蔵馬君は、蔵馬君です、驚いてしまっって、すみませんでした。私も修行が足りませんねアハハ」

笑って答えてくれるウイングさん

「みんな。ありがとう」

「しかし、変化については、魔族については、今はまだ伏せておいた方が良いでしょうね、何をされるかわかりませんし、妖狐に変化することは、あまり隠さなくても大丈夫ですよ、念能力で変化していると思いますから」

「すっげー、念能力ってこんなことも出来るの!？」

「ええ、念能力の可能性は、無限です。自分の想像した事を表す!これが、念能力です」

ウイングはキルアに念の可能性について説明した。

「さきほどの、蔵馬君の水見式の変化ですが、放出系・具現化系・強化系・変化系・操作系には無い変化だったので特質系ということになります」

一旦話が落ち着いた所で、蔵馬は鍊を解いた、すると人間南野秀一の姿に戻った。

「さて色々ありましたが、これから4週間は、この修行に専念し今の変化がより顕著になるように鍛鍊を続けなさい」

「……押忍」「」

ウイングの説明が終わり、各自自分の部屋に戻っていった、部屋にもどったゴンは部屋に備え付けの電話を手にとり、電話を掛けた。
「もしもし、ゴンだけど」

「やあ、まっていたよ、ボクといつ戦うか決めたのかい？」

「ああ7月10日に戦闘日を指定するから天空闘技場で戦ろう!」

「……オーケー?楽しみにしているよ?」

――4週間後(7月9日)――

各々が鍛鍊の成果を見せに、ウイングの部屋にやってきた。

まず始めにゴンが、挑戦した、グラスからは、ブワッ!っと前回

ウイングが見せてくれたお手本の時より大量の水が溢れ出した。

次にキルアが、挑戦した、グラスの水を舐めてみると、ハチミツのように甘くなっていた。

最後に蔵馬が、挑戦した、グラスからは、わさわさと、大量の謎の植物が繁殖していた。

「まったく・・・たいしたものです。3人とも今日で卒業です。そして、ゴン君、蔵馬君、裏ハンター試験合格！！おめでとう！」

突然ウイングから言われた言葉に3人は驚いた。

「……！！？」

「念法は、ハンターになるための最低条件、何故ならハンターには”相応の強さ”が求められるからです」

ウイングは一息ついて最後にこう言った。

「明日の試合くれぐれも無理をしないように！！」

ゴン達は、明日のゴンの試合に向け最終調整を行っていた・・・

第十八話 正体（後書き）

ウィキ見てたら、蔵馬の妖狐化は寿命を減らすようなことが、書かれていたので錬で妖狐化させて、制限無しでやらせていただくことにしました。

あと、蔵馬の念ですが、変身まえ操作系で変身後は具現化系にしようと、悩みましたが特質にちやいました。

今後の展開は、いつもどおり何も考えていません

第十九話 夢

― 天空闘技場 ―

一夜明けて翌日、ゴンの試合が始まるうとしていたが、観客席には蔵馬の姿は無かった、時間になっても現われない蔵馬に不安感じ、キルアは蔵馬の様子を見に、蔵馬の部屋に向かった。

蔵馬は、ベッドに寝ていたのを見つけ、キルアは、起こそうと思い、蔵馬を揺すってみるが起きない、ゴンの試合開始時間がまじかに迫り、キルアは2ヶ月の旅から帰ってきたばかりで、疲れて起きれないんだと考えることにして、ゴンの試合を見学しにいった。

蔵馬は、疲れて起きなかった訳では無く、夢の中に話掛けられていた。

「蔵馬！ちよつと蔵馬！起きてよ！！」

夢の中で寝ている蔵馬を、女性の声が起こそうとしているた。

「う、うーん・・・」

眠い目をこすりながら、夢の中の蔵馬は起きだした。

「あつ、良かった蔵馬！私ボタンだよ分かる？」

蔵馬に、話しかけていたのは、霊界の道先案内人（死神）のボタンだった。

「心配したんだよ蔵馬！なんとか霊界の秘法の使用許可を貰って、蔵馬の妖気を追いかけたけど中々見つからなくて、ようやく見つけたと思ったら、今度は起きやしないしさヒーン」

泣きながら、ボタンは蔵馬に話しかけていた。

「お久しぶりです、ボタンさん何処に居るんですか？」

何も無い真っ白な空間に、ただ声だけが聞こえる状態だった。

「此処は夢の中だよ、霊界の秘法、夢繋ぎの枕を使って交信してい

るのさ」

ボタンは得意げに蔵馬に話した。

「ボタンさん、異次元砲はどうなりました？」

蔵馬が一番気になることを聞いてみた。

「うん、最悪の事態だけは、免れたんだけど、異次元砲の爆発に巻き込まれて、アンタだけ消えちまったんだよ、幽助たちも心配してるよ、飛影だけは、アイツは死なないって、さっさと魔界に帰っちまったんだけどね」

「あはは、飛影らしいですね、幽助たちは、無事ですか良かった」

「良かったじゃないよ！アンタは！心配掛けて！！」

「すみません、連絡しようにも方法がなかったもので」

蔵馬は素直に謝った。

「まったく、所で蔵馬今何処に居るか分かってるのかい？」

「多分・・・異世界かと思います。こつちの世界に来て色々調べたんですが、大陸の位置も形も、文字は違うんですが、言語は同じで、日本と似たような文化がある世界ですね」

「異世界かー、まいったね、戻る方法は、見つからないのかい？こつちでも調べてみるけど、ファンタジーみたいな事になっちまったね」

「ええ、でも、ありえない事が起こったなら、あり得ない事は、あり得ない、必ず戻る方法があるはずなので探してみますよ」

「そうだね、そうだよ、こつちも魔界にも協力を要請しているし、霊界、人間界、魔界の3界が力をあわせればきっと解決作が見つかるさね、現にこうして、夢の中でだけど話が出来ているし」

「そうですね、きっと大丈夫です。幽助達にも、元気でやってる、安心してくれと伝えて下さい」

「分かったよ、必ず伝えるね、そろそろ充電が切れるから通信が終わるけど、充電が終わったら、また連絡するから、それまで頑張っておくれ」

「ええ、それじゃあ・・・」

はつと蔵馬は、現実世界でも起き出した。

「夢・・・いや、違う、ボタンさんから連絡は有ったんだ・・・」

蔵馬は、天井を見つめながら、一言呟いた

「必ず戻る」

「蔵馬ー！！」

急に、扉が開きゴンとキルアが飛び出した

「ああ、ゴン君キルア君どうしたんですか？」

「どうしたんですか？じゃねエーよゴンの試合もう終わっちまったぜ」

「ずっと寝てたなんて何かあったの？蔵馬なんか嬉しそうだし」

ゴンとキルアが交互に蔵馬に詰め寄った。

「大したことじゃ無いんですけど、多分良い事が有ったんだと思いますよ」

「なんだよそれー」

「それ、よりゴン君の試合はどうなりました？」

「うん！ヒソカにプレートをおマケ付きで返したよ！負けちゃったけど、今度は勝つよ」

「そうだよ、コイツ！ヒソカにボコボコにされたけど、しっかり顔面に一撃入れたんだぜ」

ワイワイと、騒ぎながら3人は夜遅くまで、ゴンの試合について話をしていった。

ー翌日ー

目的を果たした、3人は、天空闘技場をあとにする。

「なーこれから何する？9月1日まで結構あるぜ」

「ゴン君そろそろ、ミトさんに合格の報告をしに帰った方が良くないかな？」

「あっ！忘れてた！そうだね、キルアも蔵馬も一緒に、くじら島に行こう！」

こうして、次なる目的地は決まった。

第十九話 夢（後書き）

久しぶりの、幽白のキャラ登場しました、この設定をどう生かすか、まったくもって無計画です！

蔵馬は本当に幽白の世界に戻るのでしょうか・・・

第二十話 資金稼ぎ（前書き）

先に謝罪を申し上げます。すみませんでした。原作のユークシン
シティー編が好きな方がいらっしやいましたら、この話は、読まな
いで先に進んで頂きたいです。

第二十話 資金稼ぎ

ーくじら島ー

「ミトさーん!」

くじら島のゴンの家に、聞きなれた声が元氣よく響く

「ゴン!? もー帰ってくるなら先に教えてよ、何も用意してないわよ」

ドタドタと慌しく、料理の準備をするミトはゴンに話しかけた。

「お久しぶりです、またお世話になりますね、何か手伝いましょうか?」

「いえ、おかまいなく」

蔵馬とキルアはミトに向かっていった。

「合格したって電話くれてから全然連絡ないし心配したんだからね!」

「あ、何か手伝おうか?」

「良いから座ってて、そーだゴハン作る間に、お風呂入りなさいよ、服も全部出しといて洗濯するから」

「うん、あとで」

「今! 10秒以内!! イーチ! ニー! ...」

「いつもあーか?」

「だいたい」

「ミトさんは、相変わらずですね」

キルアは、ミトに気圧されながら、ゴンと蔵馬は懐かしく感じながら、言われた通りに、3に揃って風呂に入った。

風呂から上がると、ソコには、ミトの手料理がテーブル一杯に並べられていた。

「...いただきまーす」

久しぶりのミトの手料理にゴンは泣きながら食べていた。

「もう、泣きながら食べること無いじゃない」

ミトは、微笑みながらゴンに言った。

「ばっべぐらばのぼぶびがびどすぎでびどさんぼぶびがだぼじびだだぼん」

*訳(だつて、鞍馬の料理が酷すぎて、ミトさんの料理が楽しみだつたんだもん)

「食べながら喋らないの!!」

こうして、楽しい食事は終わった。

食事が終わり、 gon はミトにハンター試験であつたことなどを話した。

その後、ゴン達3人は森に遊びに行った。

その夜、gon はミトから、箱を手渡され、そして、ミトからジンについての話を聞かされた。

次の日の朝、gon は、キルア達に箱のことを話し、開ける事に、知恵を出し合つて挑戦し、念を込め、外側の箱を解き解き、ハンターライセンスを使い、中の箱を開けた。

すると、箱の中には、指輪とテープとロムカードが入っていた。

まずは、テープを再生するためにラジカセを用意して、テープを流した。

すると、テープから俺に会いたかつたら捕まえるつという内容がしらされた。

ロムカードは、対応機種がジョイスティックだったことから、キルアが電腦ページを使い注文をかけた。

翌日、gon の家にはジョイスティックが届いた、届いたジョイスティックにロムカードを入れ電源を入れると、ロムカードに入っているゲーム名が表示された”グリードライランド”電腦ページで、グリードライランドを調べると、ハンター専用ゲーム定価58億ジェニーという、とんでもない情報が表示された。

キルアは実家に電話をし兄貴

ミルキ

と話取引を持ちかけ、グリードアイランドの入手情報を聞き出した。ヨークシンのオークションに数本流れるという有力情報を得た。

ゴンとキルアはグリードアイランドをオークションで購入すべく蔵馬がとめるのも聞かずネットオークションで資金を増やそうとしていた。

一週間後、そこには、7億ジェニー以上も資金を減らしたゴンとキルアがいた。

「だから言っただしよ、素人が手をだすと火傷をする」と

二人は諦めず、資金を半分ずつ持って、どちらが資金を増やせるのか勝負を始めた。

「・・・俺は先にヨークシンシティに行ってますね、何かあったら連絡ください」

二人を止めることを諦めた蔵馬は、一人先にオークション会場のあるヨークシンシティに向かった。

ーヨークシンシティー

先に向かった蔵馬は、ゴン達だけでは資金調達は無理だと考え、自ら作った薬草を販売し資金を徐々に稼いでいった。

2週間後、蔵馬の元にキルアから、到着したと連絡を受け、資金集めの事を聞くと散々だったようだ。

一応自分の方でも今資金集めをしていて、現在36億ジェニーまで稼いだことを伝え、オークションが開始され、グリードアイランドが競売に掛かれるまで、別行動する事が決まった。

ヨークシンで、薬草を販売していた蔵馬の薬草の事をしった者たちから、科学薬品を一切使わない、凄腕の薬師が居ると噂になっていた。

名前を伏せていて、植物しか使わない、その薬草を作ること、隠

ハーミットプラント
者の薬師と呼ばれる様になっていた。

蔵馬も、目立つ事は、あまりしなくなかったので、今は口元をスカーフで隠し、^{ハーミット ハーミットプラント}隠者の薬師の名前で商売をするようになった。

クモの騒動で、ゴン達は慌しく動いていたが、懸賞金探しに蔵馬は誘わないで、蔵馬には、そのまま薬草販売で資金を稼いでもらう話になった。

丁度、蔵馬の元には、クモによって、大量のケガ人が出ているマフィアから大量注文が続いており、資金のも順調に増え、9月3日、遂には70億ジェニーを超えた。

^{ハーミット ハーミットプラント}
9月4日蔵馬は、隠者の薬師として依頼を受け、ヨークシンシティの隣の国、マクバク共和国に向かった。

依頼人は、共和国のサキ王女、依頼内容は恋人の遺伝子治療だった。

蔵馬は、依頼人と患者と話をする為に、とあるホテルの1室に呼ばれた。

「初めましてハーミットプラントさん、私はサキです。隣に居る彼が私の恋人のミキヒサです。」

「はじめまして、ハーミットです。それで、遺伝子治療という依頼ですが、こういった症状があるのでしょうか？」

すると、恋人であるミキヒサは自分の服を脱ぎだした。

「・・・失礼、彼は恋人なんですよね？」

ミキヒサを見て、蔵馬は少し固まったが、直ぐに王女に聞いてみた。

「はい、間違いなく私の恋人です。」

蔵馬は、頭に手を当てて考え込んでしまった。

「分かっていると思いますが、俺の体は女性です。しかし、俺は男だ！研究所で調べてもらって、俺の染色体XYつまり男なんだ！どんな病院でも研究所でも、俺の体を男にする事は出来なかったんだ、最近ウワサになっている貴方ならと思い依頼をさせて頂きました。」

もう、貴方しかたよる人がいないんです、お願いします、俺を！俺たちを助けてください」

泣きながら、自分に助けを求めてくる二人に

「無理かもしれないが、最大限努力させてもらう、過度の期待は持たないように、それと実験用に、血液と皮膚を一部頂きたい」

そういつて、ミキヒサから血液と皮膚を貰った蔵馬は、部屋を後にした。

部屋から出た蔵馬は、自分で借りているホテルに戻ってきた。

「流石に、予想外だったな・・・しかし二人を見捨てられないな」

二人の涙を見て見捨てられなくなった蔵馬は、現状の薬草では、治療できず、この世界の植物では、新たに探すのに時間が掛かり過ぎる、そこで、鍊をし妖狐に変化して、魔界の植物を召還することにした。

9月5日蔵馬の部屋の中には、数百を越える魔界の植物が生茂っていた、そして遂に試作品が完成した。

魔界の毒素が人体に影響が無いが、血液と皮膚で治験する・・・問題は無いようだ。

動物で試したところ、およそ1時間でメスの検体がオスの固体に変化した。

蔵馬は、二人に連絡をいれると、昨日会ったホテルの同じ部屋に来るように言われた。

「わずか1日で出来たのですか!？」

二人は、かなり驚いているようだ。

「ええ、無理をして作りましたので、ただ、動物実験と血液や皮膚での治験は出来たのですが、流石に人体実験は行っていないせん。服用後、どんな症状が出るか分からないですが、飲みますか？」

「ええ、二人で結婚出来る様になるのなら、どんな障害も乗り越えてみせます」

そう言つと、ミキヒサは、一気に薬を飲み込んだ・・・暫く、床を悶え苦しみながら、転がりまわるミキヒサだったが、1時間がたつ頃には、状態が落ち着いていた。

「どうやら、成功したようですね、動物実験の結果通りなら、精子も正常に作られるはずです。念の為、一年は、途中経過を俺のホルムコードに送つて下さい」

「ありがとうございます。これで、幸せになれます。本当にありがとうございました」

泣きながら礼を言う二人に別れを告げ、蔵馬はヨークシンシティに戻った。

その後、二人は結婚し、元気な子宝を授かったのは、また、別のお話・・・

第二十話 資金稼ぎ（後書き）

今回は、今まで以上に、ツツコミどころが満載だと思いますが、設定などは、見て見ぬフリをお願いします。

第二十一話 オークション

ーヨークシンシティー

9月6日蔵馬は、久しぶりにゴン達と再会した。

「よー！蔵馬ひっさしぶりーコッチは、何とか話は纏まったぜ」

「本当に、久しぶり！オークション競り落とせなくても、グリードアイランドに参加する方法も見つけたんだよ」

「よっ、初めましてだな、俺はゼパイルってmondだよろしくな」

「お久しぶりです、最終的に170億ジェニー稼げましたよ」

「マジかよー！一体何を売ったんだよ！やっぱ、蔵馬の薬草ってヤバイのが入ってたんだろ」

「170億あれば競り落とせるよね」

「いや、そうともいえねエーのがオークションだぜ、ゴミのようになるかバカみたいな金額になるかは、オークションが始まるまではかんねーのよ」

話をしながら、歩いていくとサザンピースオークション会場に到着した。

オークションが行われる、大ホールに着くと、開始まえから参加者たちは、ソワソワしながら、オークションが開始されるのを待っていた。

自分たちの指定された席に向かうと、途中で他の参加者と目が会った・・・幻影旅団のフィックスとフェイタンだった。

二人は、脇目もふらず、逃げ出した。

しかし、すぐに回り込まれ、お前たちをもう狙わない事、パクノダが死んだ事、今回は、普通にオークションに参加している事を話した。

「それでは、これよりサザンピースオークションを開催いたします！！」

オークションが、開始され様々な物の落札が決まっていた。

遂に、グリードアイランドの競売が開始された・・・落札価格305億ジエニー

落札できなかった一行は、落札者であるバツテラ氏の元に訪れ、ゲームクリアに協力すると申し込んだ、だがバツテラの雇っているプロハンターにダメ出しをされてしまう、しかしバツテラから9月10日にプレイヤー募集の選考会がある事を伝えられる。

ゴン達は、自分自身の発を作ろうとしていたが、蔵馬の念能力Ⅱ錬で妖狐に変化するだけで強力になれる、キルアは自分の中で作りたい念の方向が決まっているので、その特訓、ゴンは、自分の念を何にしたいかが、決まっておらず、色々なひとにアドバイスをもらいながら訓練をした。

Ⅰ G I プレイヤー選考会Ⅰ

9月10日ついに選考会が開始された、審査員はプロハンターのツエズゲラが行うようだ。

「1人づつステージの上で”錬”を見せてもらう、ステージは、シヤッターとカーテンで仕切り、他のものには様子が、分からないように配慮する、合格者が32名出た時点で審査は終了とする」

そう言い終わると、ステージの、シヤッターとカーテンが閉まりだした。

試験が開始されると4つのグループに分かれた、直ぐに審査を受けに行くもの、列を作って並ぶもの、列の周りで様子を伺うもの、席に座ったまま待っているものに、ゴン達は、席に座ってまっているグループだった、並んでいるグループが終わると、蔵馬たちは、試験を受けた。

「前回オークション会場で、鍊を見せなかったキミか、では試験を始めるでしょう」

ゴオオオオオ！蔵馬が鍊をすると、妖狐の姿に変化し、凄まじく強力で切れる様に鋭く冷たいオーラが立ちこめた。

（な、なんだこの念は、変化系？いや、そんなもの関係ない、今まで見てきた能力者で、こんな化け物を見たことも無い）

「オイ、どうした？まだ足りないか、もう少し本気を出そうか・・・」

「ま、まて！合格だ！合格！！」

（あれで、全力では無いだと！！バカな！！）

合格者控え室に行くと、何人かの能力者達が席に着いていた、蔵馬も席で待っていると、ゴンとキルアも控え室に入ってきた。

全員の審査が終わると、ツエズゲラも控え室にやってきて、契約書を合格者に配ってその場は、解散となった。

集合場所に行くと、貸切列車が用意されて、古城まで連れて行かれた、古城の中の一室には、モニターとジョイスティックがGIをセットされた状態で待機したあった。

最後にツエズゲラから補足説明を受けて、いざグリードアイランドへ

第二十一話 オークション（後書き）

今回は短くてゴメンなさい、眠らずに書き続けていたら限界が来ました・・・おやすみなさい

第二十二話 グリッドアイランド

ーグリッドアイランドー

選考会で合格し、ジャンケンで順番にG Iの世界に降り立ったゴンとキルアは、スタート地点の平原で蔵馬が来るのを待っていた。スタート地点の平原には、ログイン場所の小屋が1つ建っているだけで、見渡す限り青々とした草が辺り一面に生えている、ただの平原で、遠くのほうに山や森が見えているだけだった。

続々と、参加者達が、平原に降り立つては、何者かに見られている視線を感じる方向に向かっていった。

「おせーよ、蔵馬！」

「蔵馬ってジャンケン弱い？」

「すまない、この妖狐の姿に変身する所を、あまり人に見られたくなくて、わざと最後に廻ったんだ」

G Iにログインするには、ゲーム機に手を当てて錬をする必要があった、そして、蔵馬は錬をすると、妖狐に変身してしまう、この世界で蔵馬が妖狐に変身できることを知っているのは、ゴン・キルア・ウィング・ズシ・ツエズゲラの5人だけである。

「先に言ってくれよなー待って間に、なんか良くわかんねーけど、なんか俺攻撃されちゃったみたいだし」

「そうそう、バインダーからカードを出して”トレースオン追跡使用キルアを攻撃”って言ったらカードが光ってキルアに当たったんだ」

「そんでさー、何しようか聞き出そうとしたら、他のカードを出して向こうに飛んでっ行っちゃってさー、結局何かわかんねーつの、体には異常は無いんだけどさ、バインダーから出していたから多分アレはゲーム内で使える魔法だと思っただよね」

「ふむ、そんなことがあったのか暫くは、ゲームの情報を集める事

に専念したほうが良いか」

蔵馬は、顎に手をあてながら考えた。

「視線を感じるのは、コッチとアッチからなんだけど、どっちに進むかゴンと考えてたんだぜ」

「だったら、3人いることだし、二手に分かれよう、ゴンとキルアが組んで、俺が一人で行く、途中どこかで会ったら合流して情報交換をするどうだ？」

「オーケー、それでいこうぜ、ゴンもいいよな」

「うん、いいよ！それじゃしゅっぱーっ！」

こうして、ゴンとキルアは、北に蔵馬は北西に向かっていった。

（選考会で、南野秀一の姿は見られている、GI何があるか分からないし妖狐の姿でいつてみるか）

北西に向かっていた蔵馬の前に3人の人影が見えた、一人は金髪でオールバックでジャージの男、一人は黒髪でスカーフで隠している小柄な男、この二人はオークション会場でゴン達が逃げ出した時にいた男達に似ており、一人はドレッドヘアーで地面に倒れている男。

「おい、フェイまた獲物が歩いてきたぜ」

「本当ね、でもアレはプレイヤーか、獣耳と尻尾ついてるよ」

二人の男たちは、妖狐の姿に、プレイヤーか否か考えていたが、金髪の男が突然走り出した。

「関係ねエー、どっちにしろ殴れば分かるぜ！」

蔵馬に殴りかかってくる金髪を、蔵馬は軽く体よ捻り攻撃をかわしつつ、強力な手とうを金髪の首に与えた。

金髪は、そのまま地面に意識を失い倒れこんだ、蔵馬はそのまま伏せている金髪の首に右足を軽く乗せて、小柄な男に話しかけた。

「いきなり攻撃してくるとは、何だ？」

冷たく冷酷な視線を、小柄な男に向けると、男は後ずさりしながらも答えた。

「待つね、ワタシ達はプレイヤーね、カードを集める為に襲ったよ」
蔵馬を見てウソは通じないと思い本当の事を話した。

（ツイてないね、こんな目をするヤツに出会うなんて、フィックスを助ける事を優先するね）

「ワタシ達の集めたカード全部わたすね、だから足元のを開放してもらいたいね」

フェイは、蔵馬に交渉を持ちかけ、蔵馬は少し考えると了承した。
「分かった、先にお前のカードを渡せ、渡し終わったら、金髪を起こしてカードを貰う、その後、開放する」

「わかったね」

フェイタンは、蔵馬に近づきバインダーを差し出し、蔵馬はカードを自分のバインダーに入れると、足元の金髪の背中に活をいれて起こした。

「う、うう・・・」

呻き声をあげながら、金髪は目を覚ますと、蔵馬に話しかけた。

「ちっ、あんた強いな、何者なんだ？」

バインダーを差し出しながらフックスは蔵馬に聞いた。

「蔵馬ただの盗賊だ」

蔵馬は、魔界で過去、冷静沈着で冷酷と恐れられていた一流の盗賊をしていた。

「なんでエー同業者かよ、俺はフィックス、こっちはフェイタンだ、幻影旅団って盗賊をしている、蔵馬あんた旅団にはいらねーか？」

フィックスは、蔵馬の強さを認めクモに勧誘を始めた。

「いや、遠慮しておく、ただカードの礼だ、また会ったら手伝いくらいしてやるよ」

そういつて、蔵馬は北西の方角に歩いていった。

「フィン、なんで勧誘したね？アレは、どう考えてもヤバイね」

「だってよー、アイツつええぜ、ウボーは鎖野郎にやられちゃったし、団長は行方を晦ませてるし、ヒソカの野郎は裏切り者だしな、

つええ仲間が居た方が良くないか」

「無理よ、フィンあいつの目みたか？あんな冷たい目はじめて見たよ、ワタシ恐怖を感じたの初めてね」

フェイタンは、冷や汗を流しながら、答えた。

「しつつかし、蔵馬なんて盗賊は聞いたこと、ねえーよな？あんだだけの腕で目立つ格好をしてりや、有名になつてゐるだろうが」

「その辺を考えてもアイツは不気味よ、手を出さないほうが良いね」

「もったいないねーけどな、しかし、カード全部持つてかれちまつたし、別行動にするか、一週間後にマサドラ集合つてことで」

「OK」

「どっちがプレイヤー多く殺すか競争な」

「いいけど、カード奪つてから殺るよ」

「今回の蔵馬の入手カード」

N O	・ 0 2 0	心度計	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 2 1	スケルトンメガネ	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 2 3	アドリブブック	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 3 0	コネクション	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 3 4	なんでもアンケート	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 3 7	超一流スポーツ選手の卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 3 8	超一流アーティストの卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 3 9	大物政治家の卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 4 0	超一流ミュージシャンの卵	入手難度	:	B	
1枚						
N O	・ 0 4 1	超一流パイロットの卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 4 2	超一流作家の卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 4 3	大ギャンブラーの卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 4 4	大俳優の卵	入手難度	:	B	1枚
N O	・ 0 4 5	大社長の卵	入手難度	:	B	1枚

N o . 0 5 3	キングホワイトオオクワガタ	入手難度 : A
1 枚		
N o . 1 0 0	島の地図	入手難度 : G 1 枚
N o . 1 0 0 1	盗視	ステイル 入手難度 : G 4 枚
N o . 1 0 0 2	透視	フルラスコピー 入手難度 : F 3 枚
N o . 1 0 0 3	防壁	ディフェンシブウォール 入手難度 :
G 2 枚		
N o . 1 0 0 5	磁力	マグネティックフォース 入手難度 :
C 1 枚		
N o . 1 0 0 6	掏摸	ピックポケット 入手難度 : F 5 枚
N o . 1 0 0 7	窃盗	シーフ 入手難度 : C 2 枚
N o . 1 0 0 9	再来	リターン 入手難度 : G 4 枚
N o . 1 0 1 3	初心	デパーチャー 入手難度 : D 1 枚
N o . 1 0 1 4	離脱	リーブ 入手難度 : B 3 枚
N o . 1 0 1 7	衝突	コリジョン 入手難度 : F 1 枚
N o . 1 0 3 9	同行	アカンパニー 入手難度 : F 2 枚

ーバインダー内のカードー

指定ポケットカード 1 5 種類 1 5 枚
 その他カード 1 2 種類 2 9 枚

第二十二話 グリッドアイランド（後書き）

盗賊妖狐鞍馬の復活です（笑）

第二十三話 合流

ーマサドラー

草原を歩き続け、蔵馬は遂にマサドラに到着した。

マサドラの町の雰囲気は、ファンシーな建物がたちならび、空中には派手な柄の球体が浮かんでいた。

町の中は、結構な賑わいを見せ、カード売り場には、プレイヤーとおぼしい人達が列を作りレジの前に並んでいた。

「くそっ！またリーブが、出ない！もう5年もG Iから出ることもできやしない！！」

店を出てカードの袋を開けて、男は、大声をあげていた。

「まあーそんなに、落ち込むなよ、中には10年もG Iから出られないヤツだつて居るんだぜ、マサドラで働いてカードを買い続ければG Iから出られるんだ、諦めるなよ、レアカードが出ればG Iでも良い生活だできるんだしよ」

「それでも俺は、現実世界に戻りたい！家族だつて居るんだ！！娘が3歳のときにG Iに入っちゃったんだ、もう娘に会っても俺が誰だか分からないかもしれない、嫁さんだつて、帰らない俺を見捨てちまうかもしれないウウウ」

男は、泣きながら知り合いと思しき人物と話をしていた。

「ちよつと良いか？」

蔵馬は、二人の男に近づいていった。

「なんだい、アンタ？見かけねエツラしてるが、プレイヤーか？」

「ああ、昨日入ったばかりだがな、話を聞かせてもらったよ、G Iの先輩なんだろアンタらは」

「それが、なんだつていうんだ、お前もご愁傷様だな、G Iからは出られないぜ、出る為にはリーブっていうレアカードを引き当てるか、港にいつてバカ強い所長を倒さないかぎり出られねえー、所長

に勝てるヤツなんざ早々いやしねえ」

「そのことで、アンタらに取引を持ち掛けたい、ちょっと話だけでも聞かないか？悪い取引じゃないと思うぞ、悪くても話をした時間が無駄になる位だしな」

「ふん、新人と取引なんて、意味は無いかもしれんが、外の話が聞ければ、コイツの気分転換になるだろうしなオーケーだ、向こうに俺の借りてる部屋がある、ひとまず移動しよう」

蔵馬と二人の男たちは、男の一人の部屋に移動した。

「ここが、俺の部屋だ、まーそこら辺に適当に座ってくれ」

男の部屋は、安い宿の一室だった。

「それで、話ってなんだ？」

「まず先に、俺はリーブを2枚持っている」

（本当は3枚だが言う必要はないだろう）

「「！！？」」

「ほ、本当が譲ってくれ！！なんでもする！！たのむ、家族に会いたいんだ」

先ほど、泣いていた男は身を乗り出して蔵馬に迫ったが、もう一人の男が、なだめた。

「ちよつと、落ち着けよ、ちゃんと話を聞けよ！それでアンタこれは、取引なんだろ？何が目的だ？」

なだめながら男は、蔵馬に質問した。

「俺の求めているものはG Iの情報、このゲームのルールとカードの情報だ、情報の報酬としてリーブを2枚だ、悪い取引じゃないだろ？」

「あ、ああアンタはソレで良いのか？どう考えても俺らに有利すぎる条件じゃ無いか？裏が有るんじゃないのか？」

男は、あまりに自分たちが有利な条件だったので蔵馬を警戒した。（リーブは、そんなにレアなカードだったのか・・・ランクBだから妥当と思っただが、上乘せするか）

「すまないな、昨日始めたといっただろう、まだ、G Iに詳しく無くてな、だったら、先にリープを渡す、だが、お前等の持っているカードは俺によこせ、それなら心配ないだろう？」

そう言つて、蔵馬はバインダーを出すと2枚のリープを取り出し二人に渡した。

「それなら分かった、俺らもG Iから早く出たいだけなんだ条件を飲むよ」

「ありがとう、ありがとう・・・」

二人は、バインダーを出し、蔵馬に自分の持っているカードを差し出した。

「交渉成立だな、でわまず・・・」

二人からの情報提供は、その日の遅くまで続けられた。

翌日、二人は蔵馬に礼を言つとリープを使いG Iから去つていった。

蔵馬は、ある程度の情報を聞いたことから、キルアに連絡をとることにした。

コンタクトオン

「交信使用キルア！」

蔵馬は、二人から入手したコンタクトを使い、キルアと交信した。

「キルア、俺だ、蔵馬だ」

「おお、なにこれ、蔵馬どうしたんだ？」

「これは、G Iの魔法カードコンタクトだ、3分間プレイヤー同士で離れていても交信ができる」

「いいなー蔵馬は、こっちは、ウィングの師匠つてババーに、痛つて！」

「どうしたんだキルア？」

「ば、殴んなよな！いやビスケつてのに修行をつけて貰つてんだ」
「なるほどな、俺の方は、他のプレイヤーから情報を貰つたりしながらカードを集めている、いま指定は、指定ポケットのカードが15種類集まつたところだ、合流するか？」

「んー、俺とゴンは、ビスケにこのまま修行つけてもらっよ、蔵馬は、何処にいるんだ？」

「いまマサドラにいるよ、キルア達は？」

「おっ！いま俺たちもマサドラに向かつてるんだ、ば・・・ビスケの修行で、岩石地帯からスコップで山を掘りながら真っ直ぐにだけどな、あと数日で着くと思うから待っててくれよ」

「了解、そろそろ3分たつから交信を終えるな、修行頑張れよ」

16日後ー

「蔵馬ひさしぶり！！」

「おーい！蔵馬！ひさしぶりー」

笑顔で、近づいてくるゴンとキルア

「ひさしぶり、だな二人とも、そちがビスケか？」

（選考会のときに確かいたな、A級下位の力を感じる）

蔵馬は、ビスケを見ながら選考会を思い出していた。

（ちよっとキルア！このイケメン誰だわさ！）

（前にコンタクトで話をしてた、蔵馬だよ）

（早く紹介するだわさ）

ビスケの目はハートマークだった。

「こっちが、ビスケー応こんなんでもウイングの師匠らしいぜ」

「はじめまして、ビスケです。お兄さんはキルア君とゴン君のお友達なんですか？」

（げっババァー猫かぶりやがった）

「ああ、ハンター試験の時から仲間だ」

ビスケは蔵馬の体に体をもたれかけさせるようにしながら、蔵馬に話かけた。

「蔵馬サンって、もう指定カードとか集めてらっしゃるんですよね、すごいですわ、私達まだ入ったばかりで、全然ゲームの事わからなくて、宜しかったらお話聞かせていただきますか」

*くビスケは、蔵馬の人間の姿と妖狐の姿が同一人物のものとは知りません>

「話そうと思っていたからな、此処じゃ落ち着かないから俺の泊っているホテルに行こう」

鞍馬は、歩き出しキルア・ゴンは蔵馬の後ろをつきながら、ビスケは蔵馬の腕に勝手にしがみつながらキヤーキヤーと蔵馬に話かけながら一緒にホテルに向かって歩き出した。

鞍馬の泊っているホテルはマサドラで一番高級なホテルに到着した。

「ずっけー蔵馬こんなとこに泊ってたんだ、俺らなんてG Iに着いてから野宿しかしてないのに」

「野宿も結構楽しいじゃん」

ゴンとキルアは、蔵馬の部屋に入ってそれぞれ感想を言った。

「3人とも椅子に座って、待っててくれ、俺はお茶の準備をする」

蔵馬は、キッチンの方に歩いていった。

「ちょっと、アンタ達！あんな良い男なんで、早く紹介しないんだわさ」

「だって、聞かれて無いもんねキルア？」

「おう、ババアの好みなんて知らないしな」

ババアと言った時点でキルアは、ビスケに殴られた。

「早く、蔵馬の情報を私に教えるわさ」

「うーん、俺が蔵馬についてしているのは、くじら島で釣りをしていたときに出会って、ハンター試験と一緒に受けて、キルアんちにキルアを迎えにいつて、天空闘技場で一緒に試合をしてグリードア일랜드と一緒に入ってきたぐらいかな」

「あーあと、蔵馬って、薬草作るのが得意みたいだぜ、ゴンの全治

4ヶ月のケガ、アイツの薬草使ったら1ヶ月で治してたしな、あと
ヨークシンシティーでも薬草売って設けてたぜ、10日ぐれーで1
70億ジェニーとかいってたし」

「！イケメンでお金持ち！！いいわさ、いいわさ、若いツバメをゲ
ットしなくちゃだわさ」

ビスケは黒笑みを浮かべ、そんなビスケにゴンとキルアは引いて
いた。

「またせたな」

蔵馬は、トレーにカップを載せて戻ってきた。

「お手伝いしますわ」

ビスケは、蔵馬からトレーを受け取ると、それぞれの前のテーブ
ルにカップを置いた。

「それでは、俺のG Iで得た情報だが・・・」

暫く、蔵馬によるG Iの説明が続いて、蔵馬の話が終わると、キ
ルアのハンター試験の話になった。

「なー蔵馬、現実に戻るカードってもってる？」

「あるぞ、使ってくれブック！」

バインダーを出すと、蔵馬はキルアにリープを渡した。

「おっサンキューー！早速行ってくるわ離脱使用」
リープオン

キルアは、蔵馬に礼を言うとしてリープを使いハンター試験を受ける
為に現実に戻った。

「それじゃ、キルアが戻ってくるまでどうする？」

ゴンが二人に聞いた。

「決まっていますよ、ゴン君あなたは、修行ですよ」

「俺も、着いていこうか？」

ビスケは、ゴンに修行と言い、蔵馬は、ゴンとビスケについて来
るといった。

（まずいわさ、蔵馬には、私の本性を見せたくないわさ、何とか別
行動を取れるようにしないと・・・）

「着いてこなくて大丈夫だよ蔵馬、修行はビスケと二人でやるから、鞍馬はカード集めを進めてもらえないかな？」

（ナイスだわさゴン！ここで便乗して着いてくるのを諦めさせるわさー！！）

「そうですよ、ゴン君の修行は私が見ますので、蔵馬さんには、引き続き情報収集とカード集めをおねがいをしたいですわ」

「分かった、また何か分かったら連絡する」

こうして、キルアはハンター試験に、ゴンとビスケは修行、蔵馬はカード集めと情報収集に分かれて行動することになった。

ー今回の蔵馬の入手カードー

N O	・ 0 9 3	人生図鑑	入手難度	:	B	1枚
		トランスフォーム				
N O	・ 1 0 1 0	擬態	入手難度	:	A	1枚
		コンタクト				
N O	・ 1 0 4 0	交信	入手難度	:	F	5枚
		レイ				
N O	・ 1 0 1 8	徴収	入手難度	:	B	1枚
		キャッスルゲート				
N O	・ 1 0 1 9	城門	入手難度	:	F	3枚
N O	・ 1 2 1 7	ガルガイダー	入手難度	:	F	1枚

ー今回の蔵馬の使用カードー

N O	・ 1 0 1 4	離脱	リーブ	入手難度	:	B	3枚
		コンタクト					
N O	・ 1 0 4 0	交信	入手難度	:	F	1枚	

ーバインダー内のカードー

指定ポケットカード 16種類 16枚

その他カード 37枚

第二十三話 合流（後書き）

ビスケは、こんな感じにしました。

第二十四話 指定カード

ーマサドラー

ゴン達と別れた蔵馬は、カードを集めるためマサドラを離れることにした。

今までに集めた情報で、GⅠにある大きな街は分かっている、城下町リーメイロ、マサドラ、ソウフラビ、アントキバ、アイアイ、ドリアスである。

指定ポケットのアイテム入手条件も幾つか聞いていたので、それを入手しに行く事にした。

ーアイテム入手の旅ー

まず、向かったのは、マサドラをさらに北に行くとあるオアシス、ここで老人からの依頼を受け、砂漠の盗賊を依頼され、盗賊の宝を老人に返すと湧き水の壺を入手。

次は、さらに北に行き山岳地帯の村で、神隠しあつた子供を助けてくれるように依頼される、険しい山に入り、洞窟で泣いている子供を見つけ神隠しの洞を入手。

助けた村に、子供を連れ帰ると、帰還を祝って宴会が行われ、そこで子供の父親から宴会に出されている酒は、泉から汲んだただの水という情報を聞き、泉の場所を聞いて、水を汲んでみると酒生みの泉を入手。

次は、恋愛都市アイアイに向かった、入手方法が分かっていた黄金るぶ・黄金天秤を情報どりに入手した。

アイアイに居たプレイヤーとアイテムの入手条件を交換して、アイアイの東の森林にやってきた。

此処には、貴重なアイテムも腹の袋に詰め込む習性のあるというトラエモンが多数生息しているという情報だった、トラエモンはG Iに出てくるモンスターの中で最強らしく、普通の一般プレイヤーでは、歯が立たないらしいが、蔵馬は10体のトラエモンを倒し、1枚だけカード化させトラエモンを入手、後は腹の袋から幸運通帳・縁切り鋏・遊魂枕・顔パス回数券・移り気リモコン・真珠蝗・魔女の痩せ薬・人生図鑑・盗賊の剣・千里眼を入手した。

こうして、蔵馬は、一週間ほどで指定カード18を集めた。

流石に連続して、カード集めをし、疲れてきた蔵馬は、温泉の村クサツに来ていた。

クサツには、14ヶ所の宿温泉があり、その一つ一つが違う効果を持つている、二週間ほど滞在し、一日ごとに宿を変えながら体の疲れを癒していった。

そして14日目最後の温泉に入ると、女将から実は常連にしか知れてない温泉の話をされ、滞在を一日伸ばし、最後の温泉に付くと美肌温泉を入手することができた。

アイテム入手条件が分かったアイテムは粗方手にいれたので、まだ行ったことの無いソウフラビに向かった。

ーソウフラビー

海に面した街で、今までいった街より大きかった、すると突然後ろから何者かが抱き付いてきた。

振り返ってみると、黒髪でメガネを掛けた女の子が尻尾に顔をうずめモフモフと幸せそうな顔をしていた。

「うーん、もふもふー」

話しかけるも、女の子は尻尾に夢中で声が聞こえていないよ様子で、ふりほどこうとするが、かなり力が強いようで、離れなかった。すると、蔵馬に向かって近く居てくる金髪の男がいた。

「すみません、ツレが抱きついちゃってるみたいで、コイツ気に入

ったものがあると周りが見えなくなるんですよねアハハ」

金髪の男は、蔵馬に謝罪をして女の子を連れて行こうとするが、女の子は離れようとしなかった。

「本当にすみません、ほら、シズクいくよ」

「イヤっ！このモフモフから離れない！」

意地でも離れようとしないうシズクをみて、金髪の男が蔵馬に提案した。

「すみません、シズクのヤツ相当気に入っちゃってる見たいなんで、尻尾のアクセサリーを譲ってもらえないでしょうか？」

「いや、尻尾は本物でアクセサリーじゃない、売ってやることは出来ない」

「えっ！本物なの、うーん、お詫びも兼ねて食事でもどうですか？食事が終わる頃にはシズクも落ち着くと思うんで」

蔵馬は、ふりほどくのを諦めて金髪の男と一緒に食事をすることにした。

レストランに着いて食事を注文し終わると、金髪の男が自己紹介をはじめた。

「ほんつと申し訳ない、俺はシャルナークで、未だにしがみついているのがシズク、この街で仲間と合流する為に、来ていたんだ」

「俺は、蔵馬この街には、情報をもとめてやってきた」

自己紹介が終わると、料理が次々と運ばれてきた。

「情報って指定カードの事？俺たちゲームクリアが目的じゃ無いから指定カード幾つかあるからあげるよブック！」

シャルナークは、バインダーを取り出して蔵馬に差し出してきた。

「良いのか？Sランクカードもあるが」

「良いの、良いのどうせ拾い物だからアハハ」

そういつて、蔵馬に、豊作の・きまぐれ魔人・小悪魔のウインク・仕返し商店・マッド博士の筋肉増強剤・マッド博士のフェロモン剤・マッド博士の整形マシンをわたした。

カードの受け渡しが終わると、蔵馬達が食事をしている席に男女

のグループが近づいてきた。

「よーひさしぶりだな、アンタなんで此処にいるんだ？シズクはどうしたんだ？」

前にあった、フィンクスという男だった。

「なにしてるね、シズク！危ないから離れるね」

なにやら、焦っているようだがフェイタンだった。

「ふーん、あんたが、フンクスとフェイタンが言ってたヤツか、私はマチ」

フィンクスとフェイタンは、ピンク色の髪をした女性、マチに何を話したのだろう

「あれーフィンと知り合いなの？」

シャルナークは、フィンクスと蔵馬が知り合いだった事に驚いていた。

「おうよ、プレイヤーを狩ってたなら、コイツが近くにいてな、ついでに狩ろうとしたら逆に倒されちまってな」

フィンクスは、シャルナークに説明した。

「えっ！フィンが負けたの？フェイも一緒に居たんでしょう？」

フィンクスは、その時のことを説明しだした。

「ねーシャル今どんな状況なの？」

説明を聞いていたマチがシャルナークに聞いた。

「街中でさ、いきなりシズクが蔵馬さんの尻尾に飛びついて離れ無いんだよ、暫くすればシズクも落ち着くと思つてさ、お詫びのついでに一緒に食事してるってわけ」

シャルナークの説明が終わる頃には、シズクが蔵馬から離れ、テーブルの上の食事を普通に食べていた。

「もぐもぐ、もぐもぐ」

シズクは、夢中でゴハンを食べている。

「ようやく、離れたみたいだねシズクらしいけど」

笑いながらシャルナークは言った。

「ようやく、離れたことだし、俺はそろそろいかせてもらおう、カ

ードありがとうな」

立ち上がって店から出ようとする蔵馬をシャルナークが呼び止めた。

「あ、コレ俺のケータイ番号とホームコード何かあったら連絡してね」

番号とホームコードが書いてある名刺を差し出してきた、名刺を受けとると、そのまま蔵馬は店を後にした。

「ねーフェイタン、話を聞いたし実際にみて強いのは分かるんだけど、そんなにヤバイの？」

マチは、フェイタンから店に来る前に聞いた話と、さつきフィックスが説明した内容、そして蔵馬をみたが、そこまで危険だとは思わなかった。

「危険よ、フィックスを倒して、ワタシ見たときの目、あんなに鋭く冷たい目は、見たこと無かったね、今はチカラをね、始めに見たときのチカラ旅団全員で戦っても勝てる気がしないね」

「だから、そんなにツエーヤツなら同業らしい仲間にするべきだつての」

「俺も賛成だね、彼結構良さそうじゃんシズクも気に入ってたし」
「尻尾モフモフで気持ちよかった」

店に残った旅団の面々は、そんな話をしながら食事を続けていた。

ー今回の蔵馬の入手カードー

No.003	湧き水の壺	入手難度	: A 1枚
No.004	美肌温泉	入手難度	: A 1枚
No.005	神隠しの洞	入手難度	: S 1枚
No.006	酒生みの泉	入手難度	: A 1枚
No.009	豊作の樹	入手難度	: S 1枚
No.010	黄金るるぶ	入手難度	: A 1枚

N	0	0	1	1	黄金天秤	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	1	5	きまぐれ魔人	入手難度	:	S	1枚
N	0	0	1	8	小悪魔のウインク	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	2	2	トラエモン	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	2	3	アドリブブック	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	2	4	もしもテレビ	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	1	3	幸運通帳	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	1	4	縁切り鉄	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	1	9	遊魂枕	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	2	7	顔パス回数券	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	2	8	移り気リモコン	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	5	2	真珠蝗	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	5	5	仕返し商店	入手難度	:	A	1枚
N	0	0	6	6	魔女の痩せ薬	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	7	0	マッド博士の筋肉増強剤	入手難度	:	A	1枚
枚									
N	0	0	7	1	マッド博士のフェロモン剤	入手難度	:	A	
1枚									
N	0	0	7	2	マッド博士の整形マシン	入手難度	:	A	
1枚									
N	0	0	9	3	人生図鑑	入手難度	:	B	1枚
N	0	0	9	4	盗賊の剣	入手難度	:	S	1枚
N	0	0	9	6	千里眼の蛇	入手難度	:	A	1枚

ー 今回の蔵馬の使用カードー
無し

ー バインダー内のカードー

指定ポケットカード 42種類42枚

その他カード
37枚

第二十四話 指定カード（後書き）

原作でトラエモの袋にアイテムを詰め込ませようとするアイデアが出るくらい、素敵キャラクターのトラエモンさん、大量に狩らせて頂きました。

幻影旅団の皆様も再登場しました、個人的にシズクが大好きです！！

指定カード1枚1枚集めていると終わりが見えなかったので、大量入手させていただきました。

第二十五話 卵と毒

ーソウフラビーー

シャルナーク達と別れた蔵馬は、宿をとり今日は休む今年にた。宿に入りベットに横になると、夢の中におちていった。

「蔵馬、ひさしぶりだね、ようやく帰るって来る可能性を見つけたよ！」

夢の世界に入ると、ボタンから話し掛けられた。

「ひさしぶりですね、ボタンさん、本当ですか!？」

蔵馬はボタンに聞いた。

「うん、蔵馬の今いる世界とこっちの世界は、タマゴの内側と外側みたいな感じで繋がってるんだよ、こちら側がタマゴの外側でそっちの世界が内側だと思ってくれて良いよ、こちら側から、S級妖怪100人同時に妖気を全開にして、空間を歪ませて、歪んだ空間を霊界特別防衛隊が固定させ、桑原君の次元刀で歪んだ空間を切れば、タマゴの殻を割った様な状態になって、こちら側からの入り口が開くんだよ、ただ問題があつてね、丁度タマゴの薄皮みたいなのがあつて、コッチからだけじゃ色々試しているけど破れないんだ、あとは、蔵馬側から次元干渉能力で同時に攻撃すれば道が通じるんだけど蔵馬の方で次元干渉能力を探しておくれ、ゲートは審判の門跡地から固定してあるからね、準備が出来次第連絡をおくれよ、こちら側からのゲートは開いているから蔵馬が夢の世界に入れば、いつでも私に連絡が取れるから頑張るんだよ蔵馬」

元の世界では、三界が協力して、蔵馬の為に道を作ってくれたよ
うだ。

「ありがとうございます、皆にお礼を伝えてください、俺の方も能

力者を早く探します。再開できることを楽しみにしています」

こうして、2回目のボタンとの会話は終わった。

「次元干渉能者か、念能力者なら次元干渉能力をもっている人がいるかもしれないな・・・G Iから一旦出て、ハンターサイトで調べるか」

鞍馬は、そう呟くと、ゴンにG Iから出て調べものをする事を伝える事にした。

コンタクトオン
「交信使用ゴン!!」

コンタクとを使用して、ゴンに連絡をし、現実に戻ることを伝え、どの位で戻ってくるか不明なので、G Iールの外に出て10日経つとアイテムは失われることを懸念し、ゴン達に自分の持っているカードを渡すことにし、蔵馬が、ゴン達の元へ行く事になった。

マグネティックフォース
「磁力使用ゴン!!」

マグネティックフォースを使いゴン達の元へ蔵馬は飛んだ。

「ゴン・キルア・ビスケひさしぶりだな、キルアは試験受かったのか?」

「おう!そつこうで合格してきたぜ、G Iに戻って来る方が時間が掛かったぐらいだぜ」

「ひさしぶりー蔵馬!俺必殺技考えたんだよ!」

「ひさしぶりです、蔵馬さん、カード集めは順調だったのですか?」

上からキルア、ゴン、ビスケの順に蔵馬に答えた。

「キルアおめでとう、ゴンも修行は順調そうだな、カード集めは3週間で42種類42枚順調に集まった」

「え!!もう半分近くも集めたのかよ!!」

驚きながら、キルアは蔵馬に聞き返したて来た。

「自力でゲームを攻略して入手したカードは、少ないけどな。人から貰ったり、トラエモンというモンスターから獲たりしたのが多い」

そして、いつ戻ってこれるか分からないので全てあげるとゴンに言ったが、ゴンはジンが作ったゲームだから自力で攻略したいと言って受け取れないと蔵馬に返した、蔵馬は、じゃあ預けるだけだ、預かってくれないかと言いなすが、ゴンの反応は、悪かった、それを見てビスケが蔵馬のカードを私が預かりますと、地図以外全て引き受けてくれた。

「すまない、感謝する、又戻ってきたらコンタクトで連絡する」

ゴン達に礼をいい、蔵馬はGⅠ唯一の港に行き所長を殴り飛ばし、帰還アイテムを入手した。

アイテムを手に入れた蔵馬は、そのま入国管理ゲートへ行き受付を始めた。

「いらつしゃい、島からでるのですね？それでは行き先を決めてください選択できる港は50種類以上ありますので希望の場所を選んでください」

受付嬢は、そういつて地図を表示しながら説明をした。

「ヨークシンシティー」

蔵馬は、行き場所を告げると、受付嬢はコンソールを操作し蔵馬を転送した。

ーヨークシンシティー

ヨークシンに着くと、蔵馬は、前回来た時に泊った同じ宿に泊ることにする、部屋に入ると早速、電腦ページを開きハンターサイトで検索するも、検索結果は0世界有数の情報量を誇るハンターサイトで見つからなかったことから念の師匠であるウィングに電話をかけることにした。

電話で、まず、天空闘技場を出てからの話をし、粗方話し終えると、次元干渉能力者に聞いてみるも、自分の知り合いには居ない事と、個人の念能力については秘匿せいがあることから、探すのは難

しいと言われ、ウイングは、蔵馬にこういった。

「どうしても必要な能力なら、自分で作ればいいんですよ、蔵馬君は、特質系ですし」

ウイングは、蔵馬に習得には時間が掛かるかもしれないが、自分で編み出すのが一番早いと伝えた。

「ウイングさん、ありがとうございます」

蔵馬はウイングに礼を言うと言った。

蔵馬は、自室で自分の知っている能力者桑原をイメージし、イメージトレーニングをする事にした。

3週間自室でトレーニングすると、蔵馬の右手にはイバラの様な念が巻きつき始めた。

まだ、訓練が足りないのか次元を切るどころか、何の効果も無いが、新たな手ごたえを感じ訓練に集中していった。

そこから、1週間経つと蔵馬の部屋を誰かがノックしてきた。

蔵馬は、訓練を中止し、ドアを開けるとそこには、バッテリー氏がいた。

バッテリーに話を聞くと、凄腕の薬草を作る、ハーミット ハーミットプラント隠者の薬師の話聞き、噂を頼りに探してみるとマクバク共和国の王女の恋人を治したのが、ハーミット ハーミットプラント隠者の薬師だと分かり、手を尽くして探していたようだ。

仕事の内容を聞くと、事故にあって起きない自分の恋人を治して欲しいと言った話だった。

蔵馬は、患者を見せて欲しいと、バッテリーに同行して恋人の待つ病院に向かった。

バッテリーの恋人は、かなり衰弱をして、危険な状況にあった、蔵馬は、手持ちの薬草を全て使い彼女の体力を回復させることに成功した。

みちがえる様に、顔を色が良くなった患者にバッテリーは、嬉しさのあまり、号泣しながら、彼女の手を握り体を抱きしめた。

蔵馬は、完全には治っていない、今したことは、患者の体力を回

復さただけだと言い、検査をさせて欲しいと、バッテラに頼み、彼女を検査した結果、事故で倒れた事は事実だが、意識が戻らなかったのは、毒物が原因と蔵馬は、バッテラに告げた。

バッテラは激昂したが、蔵馬は、この毒なら1日もあれば解毒剤と精製することができる、落ち着いて欲しいと蔵馬は、解毒剤を作る為、バッテラは彼女に毒を与えた者を探すために別れた。

翌日、解毒剤を精製しバッテラの元に向かおうとすると、突然数人の男たちに取り囲まれてしまったのは、蔵馬は、審判の門で使った曼陀羅華を使用し、男たちを眠らせ、バッテラに電話をかけると、護衛を連れて現場にやってきた。

襲撃してきた男たちの顔をバッテラが見ると、バッテラの顔は、ほとんど赤くなり男たちの中に一人を殴りだした。

バッテラに尋ねてみると、この男は自分の可愛がっていた甥で、親戚の中でも唯一自分の彼女に対して普通に接しており、他の親戚の様に、遺産目当てで近づいて来たなどといわず、彼女が倒れてからも病院に見舞いに来るなどしていたそうだが、しかし彼女に使用された同じ毒を事故の一週間前に購入していたことが判明し我慢できなくなり殴ったと、蔵馬は、男を起こし尋問すると、遺産を目当てで、彼女が邪魔だったと男は答えた。

バッテラは、護衛の男たちに、襲撃した男たちをどこかに護送させた。

そして、蔵馬と一緒に恋人の待つ病院に向かった。

病院に入り、解毒剤を飲ませて、しばらくすると、恋人はゆつくりと目を覚まし、バッテラに「なんで泣いているの？あなたは笑っていたほうが素敵よ」といった。

バッテラは、そうだね、そうだったね、と涙を流しながら彼女を抱きしめ嬉しそうに、ただただ抱きしめていた、そんな二人を見て蔵馬は、黙って部屋を後にし自分の宿に戻った。

翌日、バッテラと彼女は二人揃って、蔵馬に礼をしにきた、治療の報酬として全財産を譲渡する契約書を蔵馬に手渡そうとするが、

蔵馬は断ったが、バッテラは此れを機に彼女と二人で隠居をすることを伝え、彼女を蔑んでいた一族全てには遺産を渡したくないこと話した。

蔵馬は分かりましたとバッテラから財産を受け取ると、バッテラは、自分がG Iの攻略を依頼したツエズゲラ達に、この事を伝え違約金として、クリア報酬を支払と伝えてくれと頼んだ。

蔵馬は了承し、二人を見送るとG Iに戻るべく古城に向かって行った。

第二十五話 卵と毒（後書き）

ちよつと展開が早すぎたような・・・

第二十六話 爆弾魔

古城に着くと、そこにはツエズゲラがバッテリーを探していた、蔵馬は事情を話すと、ツエズゲラも中の事を話し出した、ゴン達がボマーと戦うと聞いた蔵馬は、いそいでG Iに入った。

G Iにはいつて直ぐに、浮葉科の魔界植物を召還して、空高く飛び上り、魔法カードを手に入れる為にマサドラへ向かった、蔵馬がマサドラに到着すると同時に、ゴン達が同行でマサドラ^{アカンバー}に來た。

そこで、3人と合流した蔵馬は、姿を隠す為に茂みに潜りゲンスルー達の様子を伺いながら、3人に現在の状況を聞いた。

3人の話で、ゴンがゲンスルーを一人で相手にすると言い、キルアも新技の試運転を兼ねて一人で戦うと言ったので、ビスケと一緒に行動することになった。

ゲンスルー達は、辺りを見渡し姿が見つからなかったことから、魔法カードを補充されるとめんどくさいとカードショップに顔を出してくるが見つからない、仕方なく最後の同行使いゴン達^{アカンバー}の前に飛んできた。

「見つかった！逃げろ！！」

4人は、森の中を疾走し逃げ出す。

「見失うなよ！こつちも同行はもう無い！」^{アカンバー}

「くくく、なかなか速いな」

「1名増えたが、優男で残りはガキ共だ、俺たちの敵じゃねー」

ボマー達は3人を猛スピードで追跡し、遂にゴンに追いついた。

「くくく、鬼ごっこはもう終わりか？諦めてカードを寄越したらどうだ？」

「・・・」

「やだね、絶対お前たちなんかに渡すもんか」

ボマーたちは、ゴン達を誰一人逃がさない様に散開して、ジリジ

リと間合いを縮めてきた。

「おいゴン！くそっ……」（よし……あとは少しずつヤツラを引き離す）

キルアは、ボマー達3人が離れたことを確認すると、行動を起こした、自分に近いボマーにとび蹴りをかました、しかし相手のパンチで弾き返されてしまう

「蔵馬！！ビスケを抱えて逃げる！！」

蔵馬は、ビスケを抱えると、その場から飛び退いて、そのまま走り出した。

「おっと、逃がさねエーぞ」

もう一人のボマーは、二人を追いかけた。

「お前はオレだ」

最後のボマー、ゲンスルーはゴンに襲い掛かった。

ー蔵馬・ビスケー

蔵馬に抱えられた、ビスケはゴン達から大分離れたことを確認し、バインダーからカードを一枚とりだした、カードはビスケが手に持った瞬間に、煙を上げて変化をした。

アカンパニオン
「同行使用ソウフラビ！」

ビスケは、変化したカードをつかい、蔵馬とボマーと一緒にソウフラビへ飛んだ。

「……仲間を大勢集めて待ち伏せしていた訳でもなし……か、わからねエな、なんで、そんな面倒な

マネしてバラバラになったんだ？」

「理由は一つ、キサマが他の二人に助けを求めると、ゴンとキルアの戦いの邪魔になるからだ、目障りだ眠れ……」

（キヤーキヤー蔵馬カッコいい！！ってフザケてる場合じゃなかった、なに！？この殺気を、強いとは思っていたけど、この私が、気圧されるなんて）

蔵馬は殺気を込め、ボマーに視線を向けながらビスケの視界から消えた。

（消えたー！！）

瞬間、ボマーの一人は口から大量の血を噴出しながら地面に倒れこんだ。

「無様だな・・・」

蔵馬は、ボマーの一人を見下しながら呟いた

ーキルアー

キルアの先ほどビスケが逃げ出すのを確認すると同行

アカンパニー

を使いゴンのそばを離れた。

「アカンパニー同行か解せないな、なぜバラけた！？まっタイマンは望むところだな」

ボマーは、走るキルアを追いかけて攻撃しながら話しかけてきた。

（コイツかなり強い体術や筋力はオレが、やや上けど、オーラの量はオレがはるかに劣るだろう、それは、攻撃や防御に大きく影響する、通常の攻撃じゃおそらくダメージは与えられない、だからこそイイ実験になる）

キルアは、考えながらボマーの猛攻を避け、相手の力量を測つてから、攻撃に転じた”肢曲”キルアの得意とする歩法で、相手の攻撃をかわし、懐に入り込むと相手の腹に両手を当てて新しい技”雷掌”をくらわせた。

雷掌は、キルアの発でオーラを電気に変えて相手を痺れさせる技、まだ鈍度は低いが数秒は動きを止められることがわかった。

「ガキがぁぁぁ手にスタンガンか何か仕込んでやがったな」

ボマーは、キルアの年でオーラを電気に変えることが出来ると予想できず、スタンガンの攻撃だったと間違った認識をもった、次にキルアは、ポケットからユーヨーを出し、左腕に装着した。

キルアは、ヨーヨーを構えるとボマーに向けてヨーヨーを放ち頭を薙ぐように攻撃するが、しゃがんで避けられてしまう、攻撃目標を外したヨーヨーは木の幹をエグリとり、キルアの手に戻っていた。

「一体、何で出来てやがる!？」

あまりの威力にボマーは、キルアに聞いた、

「（兄貴）特注の合金、重さ50キロ位あるから食らったら効くぜ!！」

話ながらヨーヨーを再度投げ一旦避けられた所で、体を捻りヨーヨーの軌道を変え、ボマーの顎に直撃させた。

キルアは、ボマーが後ろに吹き飛んだ瞬間に、ボマーに気づかれないようポケットからもう1つヨーヨーを出し、右腕に装着した。

吹き飛ばされたボマーは、キルアが追撃をしてこない一瞬に作戦を考え実行した。

邪魔なヨーヨーを手放させるために、足元に落ちていた石を見えないように拾い上げ、キルアに向かって飛び込みながら左腕のヨーヨーに石を当て、吹き飛ばさせる、そして接近戦になると右フックをを放ち、キルアのスキをつくいて、右わき腹にミドルキックを直撃させキルアを吹き飛ばした。

「よし!! あばら粉碎コース!!」

勝利を確信したボマーに、背後から強烈な後頭部への攻撃があたえられた。

キルアは、吹き飛ばされた瞬間に右腕に装着したヨーヨーを近くの木に糸を経由させ背後からボマーに攻撃をくわえたのだった。

倒れたボマーの頭に、キルアはヨーヨーを落とし、電気を流し込み気絶させた所をヨーヨーを使い縛り上げた。

「実験終了どっちもイケるね」

自分の新たな攻撃の結果に満足した。

ーゴニー

襲い掛かってきたゲンスルーの上段からゴンの頭に迫ってくる右手を手の甲で弾き上げ、後ろに飛び退いて体勢を整えた。

先ほどのゴンの右腕を回避する動きをみて、ゲンスルーは、だれに自分のことをボマーと聞いたか、誰に能力のことを聞いたか質問をしてきた。前者の質問にはツエズゲラと答え、後者に関しては答えずにバインダーを出し、ゲンスルーに勝負を持ちかけた、ルールは先に”まいった”と言ったほうが負け、これを了承し、本気の勝負が始まった。

ゲンスルーが構えをとると、ゴンは鍊をしオーラを高めた、ゲンスルーはゴンのオーラに関心したが、自分も鍊をしゴン以上のオーラを練り上げた。

ゴンは、ゲンスルーに反撃をゆるさないように、激しく攻め込んだが、オーラの攻防力移動が粗く自分の攻撃のスピードに追いつかずダメージを与えられない、全てに置いてゴンの上をいくゲンスルーによりゴンはダメージを受けるが、倒れても起き上がってきた、次第にゲンスルーもイライラしゴンに話しかけた。

「いい加減諦めたらどうだ？勝ち目なんかないぞ？」

「全然！！オレはまいっていい！！」

力強くゲンスルーを睨むゴンにゲンスルーは、勘違いをしていたことに気づく、これは、肉体でなく心を抓む闘いだと、ここにきてゲンスルーはゴンとの闘いで初めて自分の発を使用した一握リトルの火薬フラワー。ゴンは左腕を捕まれ爆破されるも、左腕にオーラを凝で集めダメージを激減された。ゲンスルーは、ゴンの攻略法の穴をついて一方的に攻撃を加える、途中からゴンは目にオーラを集めゲンスルーの一握リトルの火薬フラワー。

を使用するかどうかを見極めながら戦うようになった。

気づいたゲンスルーは、両手にオーラを集め一握リトルの火薬フラワーを両手で発動し、ゴンに最後通告をしゴンが断ると、これからする攻撃を言いながらゴンに向かっていった。

「両手を同時に爆破する」

「無事に残していたいほうを凝で守れ」

「次に残ったほうの腕と、左足を同時に爆破する残していたいほうを凝で守れ」

「それを永遠と続ける、キサマがダルマになるまでな!!」

「やれるもんならやってみる!!」

ゲンスルーは、ゴンの両腕を掴むと宣言通り一握りリトルの火薬フラワー両腕を爆破した。

瞬間！ゲンスルーの視界が歪んだ、いきなりことで、状況が理解できないゲンスルーだったが、ゴンの必殺技ジャンケングーの練り上げられたオーラを見て後ずさりをした、ゴンが、グーを放つが木の根に躓き後ろに倒れこんだゲンスルーをはずしてしまった。

ゲンスルーは冷静になりゴンを見ると、ゴンの両腕は爆破されて、左腕は失い右腕はじゅうしうだった、爆破されるときに左腕は完全に捨て、右腕は少しのオーラでガードしたことが分かる、自分のダメージを考えると足にガードするオーラを回し自分に攻撃してきたことが・・・そして未だに戦意を失わず自分に挑んでくる。

（こいつ・・・完全にイカレてやがる）

流石のゲンスルーもコレには、動揺した。

「ブツク！」

ゴンはいきなり、バインダーを開きカードを取り出しゲンスルーに負けを認めるように迫った。

「諦めるなら今のうちだぞ、コレを使うと最悪の場合、お前は死ぬかもしれない」

ゲンスルーは、ハツタリだと思ったが、今ゴンはバインダーを出していることからチャンスだと思い、

自分もバインダーを出してゴンに近づいた。

「ブツク！根負けだまいった、どうやってもお前に負けを認めさせるのは無理なようだ持って行け」

ゲンスルーはバインダーをゴンに向けると自分のバインダーを指

差し一つの頼みをいった。

「何？」

「このカードだけは勘弁してくれないかな？」

そういわれて、ゴンがゲンスルーのバインダーを覗き込むと、ゲンスルーは右手を鍵手にしゴンのノドを潰し、バインダーを閉じれなくさせると気絶させるために、首へ手とうを叩き込んだ。

手とうはオーラを首に回しガードしたゴンは、先ほど取り出していたカードをゲンスルーに向けパンチを放った、瞬間1分の時間がたちカードからアイテムに変化したそれを、打ち抜いた。

打ち抜いた物は、ガソリンを中に詰めた大瓶だった、それによりゲンスルーはガソリンまみれになり一握りの火薬を封じられた。

「これで、もう一握りの火薬^{リトル}は使えない絶ッ対ぶつとばしてやる！
」

ノドが潰れたゴンはかすれるような声でゲンスルーにバインダーから1枚のカードを取り出してから言った。

ゴンは、オーラを右腕に集めると、ジャンケングーを地面に向かって放った、すると地面が抜け落とし穴に二人とも落ちていった。

ゲンスルーが混乱しているうちに、ゴンは横穴に入り、先ほどのカードを上に向かって投げた瞬間にカード化が解け大岩が落とし穴に向かって落ちてくる、ゲンスルーは慌ててゴンが逃げた横穴に入るも、オーラを練りこみジャンケングーを準備していたゴンに腹を殴られ血を吐いて気絶させられた。

戦いが終わったゴンは、キルアに^{コンタクト}交信を使用して連絡を取り合流した。

合流した4人は、それぞれ倒したボマーを縛り上げ、最後の交渉を始めた・・・

第二十六話 爆弾魔（後書き）

妖狐蔵馬は、圧倒的でした。

G I 編が終わったら、霊界ランクを更新します。

第二十七話 最終話（仮）

体を縛り上げられ、地面に横たわっている、ボマーたちに、キルアとビスケはバインダーを差し出すように迫った。

「早速だけど、バインダー出して」

「あんた達が仲間を裏切って、手にしたカード全部返してもらうわさ」

ゴンのジャンケンを食らい弱っているゲンスルーは1つの条件をつげた。

「条件がある・・・大天使でバラを治してやってくれ・・・複製はある・・・」

ゲンスルーは自分の隣に倒れている、仲間の傷を治すように頼んだ、バラは先ほどの蔵馬との戦闘で内臓が破裂し、すでに意識が無い状況だった。

「安心しろよはじめっからそのつもりだから」

「こっちは、予め6人分の複製クローンを用意していたわさ」

それを聞いたゲンスルーは、バインダーを出し、それをビスケが受け取った。

「ゲイン！」

ビスケが、カードを取り出しカード化を解除すると、美しい天使が現われた。

『わらわに何を望む？』

「こいつの両手とノドを元通りに治してもらいたんだけど、つか出来れば悪いところ全部治してもらえる？」

キルアは、ゴンを指さしながら天使に願いを言った。

『お安い御用では、その者の体治してしんぜよう』

天使は、ゴンに息吹を吹きかけると、ゴンの体は一瞬にして完治した。

『でわさらばだ』

治療がおわると天使は、消えていった。

次の大天使も使い、瀕死だったバラに使うとバラも完治し、意識を取り戻した。

2枚目を使ったところで大天使の息吹を複製で増やそうとするが、使用した瞬間、複製

(クローン)

は破壊されてしまった。

「ちよちよちよと、ちよと、どーなってるの！？あたしのせい！？あたしのせいなー！？」

慌てたビスケは、混乱しながら叫んだ

「・・・いや、ゴレイヌだ大天使の息吹の引換券を複製が擬態で増やしたんだ、それなら向こうの引換券が先に大天使の息吹になる」

キルアが話すと、ゴレイヌが交信

コンタクト

で連絡をしてきて、この場に来る事になった。

ゴレイヌにボマーを治すことを伝えると、彼は反対をした、しかし、ゴンは戦う前に皆で決めたことだと返した。

「ごめんキルアもう少し我慢してくれる？」

「問題なし！このくらい蔵馬の薬草があればすぐ治るし」

キルアは、蔵馬を見ながらゴンに返答し、蔵馬は、外で薬草は使いきったが1日もあれば作れると言ったところで、ゴンは、自分のもっている最後の1枚の大天使をゲンスルーに使った。

「オイちよまてよ！！わかった！！わかったよ！！お前等にやるよ」

ゴン達をみて、ゴレイヌは、持っている2枚の大天使を差し出し、
てきた。

「まったく、お前等と話していると、何かオレの方がスゲーガキなんじゃねーかと思えてくるぜ」

「いいの？ほんとに？」

「ああ、つーかなココへ来て話を聞く前は渡すつもりだったんだよ、俺たちのカード全部な」

「「「え！？」「」」」

「これは、ツエズゲラ含め俺たち5人の合意だ、俺たちはもうゲームをおりたんだ」

「そう・・・バッテラさんが」

「ああ違約金つて形で全額支払われるそうだ、ここにいる蔵馬からな」

「ちょー！蔵馬どういうこと！？」

蔵馬は、GIから出てからのことを3人に話した。

「バッテラさんの全財産つて、一体いくらだよー！」

「そんなことが、あつたんだ」

（イケメン！お金持ちー！）

「そんな訳で、カードは全部お前たちにやる、使い方は自由だ！条件はたった一つ、必ずお前等が最初にクリアすること！」

「うん！問題なし！！」

ゴンは、ゴレイヌからカードを受け取ると99枚目をバインダーにセットした。

99種がバインダーにセットされたことでNO・000の入手イベントが始まった、クイズは五折形式の指定ポケットカードについての問題だった。

そして結果が発表された。

「最高得点は100点満点中87点ー！プレイヤー名ゴン選手です

！！」

「やったアーー！！100種類コンプー！！！」

するとゴンのもとに、1羽のフクロウが飛んできて”支配者からの招待状”をゴンに渡した。

ゴンが、アイテムを手に入れると、近くにベラム兄弟がカードをよこせと勝負を挑んでくるも、一蹴し

招待状に書かれていた場所、城下町リーメイロに同行で飛んだ。
アカンバニー

リーメイロに着くと、一人ゴンは城の中に招待され”NO・000支配者の祝福”と3枚のカードを収めることの出来る箱を受け取りゲームマスターからジンの話を聞いた、そのご城下町では盛大

なパレードが行われG Iの全てのプレイヤーが集まった。

パレードの御輿に担がれた4人は、町中を進んでいった、観客の中にヒソカを見つけた蔵馬は、声を出さずに口だけでヒソカにメッセージを送った。

《パレードが終わったらマサドラ南岩石地帯で待つ》

《オーケー？》

パレードが終わると、蔵馬は、G Iクリアのプレゼントと言いなから1つの箱をゴンに渡し、G Iから出たら開けるようにと3人に伝え、マサドラに向かった。

ーマサドラ南ー

ゴン達と別れた蔵馬は人間の姿に戻り、岩石地帯に来るとヒソカは、先に待ってた様で、座りながらトランプを岩に投げドクロの形を作っていた。

「待たせてしまったみたいだな」

「いいよ？楽しみにしていたことだからね？それよりも、どうしたんだい？あの姿はゴン達と一緒に居なかったら分らなかったよ？今は元の姿に戻っているけど？」

「ええ、あの姿は俺の本当の姿ですが、戦う約束をしたのは、この姿ですからね」

「ククク？ボクを舐めるなよ？」

そう言うヒソカは立ち上がり凶悪な殺気を放ちながら蔵馬に襲い掛かった。

戦闘の天才であるヒソカでも、あるヒソカは蔵馬と互角に戦っていた、伸縮自在バンジーガム（の愛（を巧みに使い、人間の姿では凝を使えない蔵馬と一進一退の攻防が続いていた。

激しい攻防戦の中で、戦いながらも二人は成長していった、周りの岩は跡形も無くくだけ、二人を中心として更地が広がっていた。

そして遂に決着がつく！！

ジュリョウヨウザンケン

「樹霊妖斬拳」

蔵馬の放った一撃をヒソカは両手でガードするも腕ごと胸を貫かれた。

「ククク？もう終わり、もう終わりかい・・・まだ・・・ボクは戦いたい！！」

胸を貫かれ倒れたヒソカは、最後の力を振り絞って叫んだ、するとヒソカの体から妖気が噴出し傷が塞がっていく・・・魔族大隔世・・・ヒソカは、昔から自分は他人とは違うと感じていた、自分では押さえることも出来ない殺人本能、強者との闘争その全てが今分かった”魔族”自分は人間では無かった、全てを理解したヒソカは、魔族である自分の力を使える様になった、そしてゆっくりと起き上がりつつた。

「その妖気、ヒソカ君も魔族だったんだね、ココからは本気で行かせてもらおう」

蔵馬は、妖狐の姿になり、ヒソカ向かって攻撃を仕掛ける、魔族になった蔵馬と魔人になったヒソカは、そのご10時間ほど戦いをつづけ、手持ちの種を全て使い尽くした蔵馬は、未完成の発を右腕に纏いヒソカに向かって腕を振るつた。

蔵馬の攻撃をヒソカは避けた、しかし、攻撃が当たっていないにもかかわらず、ヒソカの右腕は、消滅してしまった。

「・・・何をしたんだい？」

予想できなかったことに、ヒソカは驚き、戦いながら蔵馬に尋ねた。

ジュネンジゲンザン

「樹念次元斬とても名付けられるようか、未だ未完成だが、空間を破壊する」

新たな技で、戦局は蔵馬が有利に進んでいった、そこで思わぬアクシデントが発生した、二人の戦いが余りに激しかったので戦闘が得意なGM、レイザー・ドゥーンが駆けつけ二人を攻撃した。

突然のだったが蔵馬は、その攻撃を避けた、いや避けてしまった。

ヒソカは、そのまま攻撃を受けつつもダメージを無視して、避けてスキが出来てしまった蔵馬の腹に手とうを入れるとそのまま蔵馬の核（魔族の心臓）を握りつぶした。

その後、ヒソカは戦いの場に現われた二人を瞬殺すし、蔵馬の死体に近寄ると、魔族に生り新しく得た念を使った略奪する愛を使い蔵馬の体を取り込み無くなった右腕を再生させた。

「魔界って所があるんだ？ボクにはコツチの世界だともう楽しめそうに無いね？クロロやゴンに魅力を感じ無くなったし？蔵馬の能力で魔界に行けば面白そうだねククク？」

蔵馬の体を吸収し、蔵馬のチカラ・能力・記憶を奪ったヒソカは、右腕に能力を発動させ目の前の空間を切った。

「樹念次元斬？」

切った先には、空間が歪みゲートが出来ていた、ヒソカはそのままゲートを潜った。

―審判の門跡地―

審判の門を潜ると、ヒソカの目の前に3人の男たちが待っていた。審判の門跡地で待っていたのは、幽助・桑原・飛影3人は、こちら側のゲートが開いてからゲートの前で蔵馬を待ち続けていたのだ。ヒソカは、3人のチカラを感じ取ると自分の股間に熱いものを感じた。

「やあ？はじめまして？幽助・桑原・飛影だよな？」

ヒソカは、幽助たちに近づきながら声をかけた。

「ああ、なんで俺たちの名前をしってるんだ蔵馬の知り合いか？」

幽助はヒソカに聞き返した。

「うん？さっきまで蔵馬と戦っていたんだ？蔵馬を食べたから君たちの事も解っているよ？」

ヒソカは、殺気を幽助達にむけて放つと笑顔で右腕に蔵馬の念を発動させた。

「コレ証拠？蔵馬の能力植物をあや・・・」

途中まで言ったところで、ヒソカは幽助に顔面を殴られ吹き飛ばされた。

「ククク？せっかちな、もう押さえきれないや？」

こうして蔵馬の敵討ちをするべく、幽助・桑原・飛影は一斉にヒソカと戦いだした。

戦いが始まって直ぐに飛影は邪王炎殺黒龍波^{ジャオウエンサクコクリユウハ}を吸収し、幽助は、妖力を高め魔族本来の姿に戻り妖弾を放ち、桑原は次元刀で切り裂いた。

三人の力を合わせてもヒソカの力は、3人の力を上回っており、ヒソカ有利のまま戦いは次第に激しさをましていった。

人間である桑原は、既に体力の限界を超えて、霊力もすべて使い果たし気を失ってしまう、じわじわと、追い詰められ、飛影は最後の切り札、邪眼を使用し威力を底上げした本日2回目の邪王炎殺黒龍波

（ジャオウエンサクコクリユウハ）を放つが、防がれてしまうも大幅に体力を削りとらることに成功、反動で飛影は深い睡眠に入った。残っているのは、慢心相違の幽助と、いまだ余力のあるヒソカ最後の戦いは終わりを見せようとしていた。

「ククク？楽しい戦いもう終わりだね？」

「へっ！まだまだコレからだぜ！！」

幽助と、ヒソカは再び接近戦の殴り合いを始め、辺りにはS級妖怪2人分の妖気の放出で竜巻が起こり地面が砕け、激しく殴りあいをしていたが、ついに幽助が打ち負けて地面に倒れた。

ヒソカはトドメを刺そうと幽助に近寄っていくと、突然体に異常が現われた、ヒソカの内側から肉を貫き肌を破り無数の茨がヒソカの体をしばり動きを封じた。

「へへ、蔵馬は、そこにいたんだな・・・この一撃は俺たちの一撃だヒソカ遠慮なくもらっておけよ」

幽助は、ヒソカに近づくと渾身の力を右腕に集める、そこには、

霊気とも妖気とも聖光気とも異なる黄金のオーラを発つする、幽助の拳があつた。

「くらいやがれ！！！！レイコウヨウダン霊光妖弾！！！！」

黄金に光る拳はヒソカの胸を突き破り遂に、魔人ヒソカを倒す事に成功した。

「だーしんど！もう動けねー蔵馬！俺たちが勝ったんだ！！」

幽助も体力の限界で、地面に倒れ込み、仰向けになって右腕を天に向け、蔵馬に勝利を宣言した。

ヒソカの死体には、無数の草花が生えだし、蔵馬も勝利を祝っているかの様だった。

ーグリードアイランドー

GIのクリア報酬の3つを、ホテルの部屋で、3人で選んでいた。

「この中の3枚を決めたら港へ行ってくださいってさ」

「で、どうするのよさ、選ぶ3枚は！？」

「一人一枚でいいんじゃない？」

「じゃ、あたしわブループラネット」

「ゴンは決まったか？」

「うんまあ一応・・・」

「マジ！どれよ？」

キルアに聞かれ、ゴンはバンダー内のカードを指さす、キルアは、ゴンの考えを理解し、自分のアイテムをゴンに合わせたものを選んだ。

翌日、港に行き3枚の現実にとって帰るカードを指定した。

「選んだのは、No.002一坪の海岸線No.081ブループラネットNo.084聖騎士の首飾り以上の3枚で本当によろしいでしょうか？」

そうして、現実に戻った3人はカードを具現化せた、ビスケは、ブループラネットを手に入れて大喜びし、ゴンは聖騎士の首飾りを

首にかけ、最後の1枚である一坪の海岸線を手に取った、聖騎士の首飾りの効果で擬態が解除されカードは本来の姿に戻った。

「それにしても、よく実行する気になったもんだわね、指定ポケットじゃないカードを選ぶなんて」

「うん、でも最初にオレがゲームに来る時にもし1番じゃなかったら、きつと確信は持てなかったと思う」

2番目にゴレイヌさんだったっていうのも大きかった、印象に残ってたしね」

「え？え？」

「ここに来る前ジャンケンしただろ？」

「オレが1番でゲームに入ってスタート地点でキルアと蔵馬を待ってた時、近くに誰も居なかったんだ、

つまり、オレがゲーム内で最初に会ったのは、2番目に入ってきたゴレイヌさんのはず、でもバインダーで調べたら、その前に1人遇っている人物がいたんだ”ニツグ”ジンのスペルはGING」

「NINGは、そのアナグラムってわけね」

「多分オレは、赤ん坊の頃ジンと一緒にGI来た・・・！」

「おそらくジンはあんに、こう言いたかったんだわね、何を捨ててもオレに会いたいなら、このゲームをクリアするくらい強くなれてね、ゴンあんたは、ジンに会ったら・・・まず何をする？」

「もちろんキルアを紹介するよ！オレの最高の友達だって！！」

「よせよ、はずいだろ」

「ホント、やめてよ」

そこには、自信満々に言うゴンと、恥ずかしがるキルア、感動で涙をながすビスケがいた。

「そーいやゴン、蔵馬に貰った箱開けてみようぜ」

「そういえば、そうだねプレゼントってなんだろう？」

「ワタシへのラブレターこもだわさ」

「あーないない」

「んじゃ、開けるよ」

箱の中には、手紙とカギが入っていた

「ほら！やっぱり手紙じゃないわさ」

「ぜってーちげーって、ゴン読んでみてくれよ」

ゴンが手紙を読んでみると、帰る手段が見つかった事、貸し金庫のカギを入れてあるのでバツテラ氏から受け継いだ財産を有効活用すること、最後に別れを別れを告げるのがはずかしいということが書かれていた。

「えーみずくさいな蔵馬」

「ビスケへのラブレターじゃなかったな」

「くやしーわさ、若いツバメを逃がしたわさ！！ゴン、因みに金額とかわ書いてあるのかだわさ？」

「んーちよつとまってるね・・・あつ・・・」

「おい、どうしたんだよゴン？」

手紙を見ていた固まって動けなくなつたゴンの手からキルアは手紙をとって見た。

「・・・」

「あんたたち何固まってるんだわさ、ワタシも見るわさ」

手紙をみた、ビスケも固まった。

「カムバークー！蔵馬！！こんな大金活用できないよ（ぜ）」

二人の叫び声が、港の中で鳴り響いた・・・

ーエンディングー

ヒソカとの死闘が終わって丁度5年、荒野だつた審判の門跡地には、様々な草木が生茂る森になっていた、森の中心、ヒソカの死んだ場所には、一本の巨木が生えていた。

毎年蔵馬の命日には幽助・桑原・飛影・コエンマ・ボタンの5人

が巨木の前にお参りをしに来るようになっていた。

今年も、皆で集まり、巨木の前で宴会をしていると・・・巨木の中から蔵馬が出てきた。

「みんな、ただいま」

第二十七話 最終話（仮）（後書き）

書き終えて、これで良いのかと思い（仮）にさせていただきます。

これで終わりですが、優柔不断な私なので、各話を修正しながら、キメラ編も書くかもしれません。

今まで読んでいただいた皆様ありがとうございました。

閑話 霊界ランク・念能力2

<蔵馬>

ランク A級下位

念能力 無し

念系統 特質系

<ゴン>

ランク B級下位

念能力 ジャジャン拳

念系統 強化系

<キルア>

ランク B級下位

念能力 イストシ 雷掌

念系統 変化系

<ビスケ>

ランク A級下位

念能力 まじかるエステ 魔法美容師

念系統 変化系

<ヒソカ>

ランク B級上位

念能力 バンジーガム 伸縮自在の愛

念系統 変化系

<ツエズゲラ>

ランク B級中位

念能力 現在不明
念系統 現在不明

<ゲンスルー>

ランク B級上位
念能力 一握りの火薬
リトルフラワー
カウントダウン
命の音

念系統 現在不明

<サブ>

ランク B級中位
念能力 一握りの火薬
リトルフラワー
念系統 現在不明

<バラ>

ランク B級中位
念能力 一握りの火薬
リトルフラワー
念系統 現在不明

<妖狐蔵馬>

ランク S級
念能力 樹念次元斬
ジュネンジンザン

右腕にオーラを集め植物を腕に巻きつけて攻撃する蔵馬が使用していた時は未完成で、空間を削り取る攻撃でしかなかった。
JOJOの虹村億泰のザ・ハンドの能力といっしょw

念系統 特質系

<魔人ヒソカ>

ランク S級
念能力 伸縮自在の愛
バンジーガム

スナッチラバー

略奪する愛

倒した相手の体を吸収し、チカラ・能力・記憶を奪ったう、ただし相手の魂すら奪っているの、吸収した相手次第では、体の中で抵抗されることがある。

ジュネンジゲンザン

樹念次元斬

右腕にオーラを集め植物を腕に巻きつかせて攻撃する蔵馬を吸収したことで、完成された能力効果は、桑原の次元刀念系統 変化系

その他G IのキャラはC下位〜B中位つてことで

閑話 霊界ランク・念能力2（後書き）

オリジナル能力って難しいですね；

お詫び

この度、完結しましたが、余りにも設定を生かしていない事と、未回収フラグも多数、文字の間違い、句点などの間違い、文章の書き方などの問題多かった、むしろ問題しか無かった。

そもそも、1週間で完結させようとしていて無計画に、作品を書いたことが間違いだたと、思い知りました。

各話を大幅修正して、読みやすい作品に仕上げますので、それまでは、この作品のダメな所を感想に書いていただくとありがたいです。

それでは、最後に皆様、私の作品を読んいただき大変ありがとうございました。御座いました。

お詫び（後書き）

修正中

http://ncode.syosetu.com/n4813w/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770w/>

植物だいすき

2011年9月6日18時05分発行